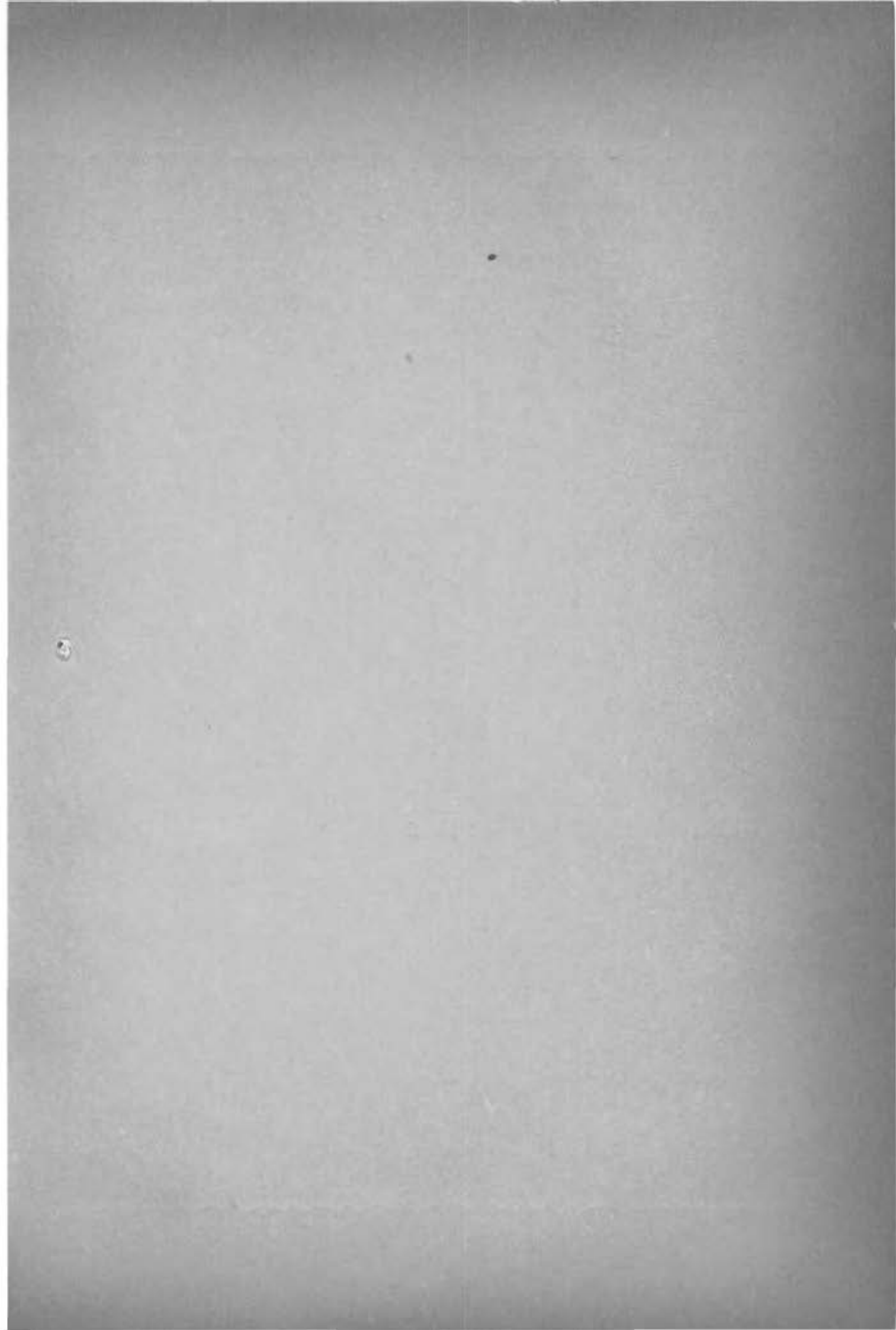


梁瀬長太郎氏を語る



寄稿者索引

(A・B・C順に依る)

- 人生の達人……………株式会社 安藤組社長 安藤清太郎(一)
- 萬年青年の梁瀬長太郎氏……………東京物産株式会社々長 相羽有(二)
- オオタ號を育成した梁瀬さん……………大平企業株式会社常務取締役 福井孝一(六)
- 一人一業主義に生きた梁瀬君……………日本化薬株式会社々長 原安三郎(一〇)
- 梁瀬君と私……………元 東北配電株式会社々長 橋本萬之介(一四)
- 梁瀬さんと育英……………蓮見徳男(一七)
- 一業一貫の白頭翁……………株式会社荏原製作所社長 島山一清(二三)
- 追従を許さぬ、ねばりと不屈の信念……………富士紡績株式会社取締役會會長 堀文平(二四)
- 二、三想ひ出すこと……………日東自動車興業株式会社々長 堀久(二五)
- 梁瀬長太郎君の事ども……………株式会社細山商店社長 細山太七(二九)
- 上州人特有の短所がない梁瀬君……………日清製粉株式会社監査役 星野唯三(三〇)
- 想ひ浮ぶ儘の梁瀬さん……………東京日産自動車株式会社監査役 石澤愛三(三一)
- 梁瀬氏と私……………大七證券株式会社々長 石田芳助(三六)

其のものズバリと言ひ得る人……………	五十嵐自動車工業株式会社々長	五十嵐正作(四)
梁瀬長太郎翁と私……………	協和興業株式会社専務取締役	猪子 和雄(四)
タイヤに議見のあつた梁瀬長太郎氏……………	日本タイヤ産業時報代表者	岩 窪 通(四)
二月十一日の記念日……………	泉自動車工業株式会社々長	泉 藤吉(四)
こんな秘話もある……………	電氣化學工業株式会社々長	近 藤 鏡次(五)
梁瀬會長の思ひ出……………		川 澄 正保(五)
梁瀬さんと癡……………	トヨタ自動車工業株式会社常務取締役	神谷正太郎(五)
自動車界の大御所たる梁瀬さん……………	小林光榮株式会社専務取締役	小林 光榮(五)
梁瀬のおちさん……………	中小企業廳公報課長	松 田 慎三(六)
フィアットと私……………	日刊自動車出版部長	門 馬 孝吉(六)
御 縁……………	山二證券株式会社取締役	永 田 秀吉(六)
ゼスチユアの自然な梁瀬さん……………	全國自動車整備工業組合連合會々長	中 島 亮(七)
梁瀬學校の思ひ出……………	自動車再生協會専務理事	西 山 東 治(七)
我が國、自動車界に於ける……………	株式會社田尻特殊車體製作所社長	尾 花 信(七)
梁瀬長太郎君の業績について……………		小 川 菊 造(七)
所 感 片 々……………	日本自動車株式会社々長	

其の先見と英斷	元梁瀨自動車株式會社監査役	岡野悌二(八二)
蛸 <small>ひぐらし</small> と綽名をつけられる努力家		岡壽(八二)
吳服橋時代の想出	折橋商會主	折橋勇治(八六)
初代店限雇員?	株式會社エービー商會社長	大井壽郎(八七)
會社在勤三十餘年の感想	梁瀨自動車株式會社取締役經理部長	大原當一郎(八九)
どんな時にも梁瀨の商魂	元梁瀨自動車、自動車部長	鈴木義五郎(九二)
恩情の人梁瀨會長を思ふ	五輪商會社長	柴田瞭三(九六)
梁瀨學校の追憶	日産自動車販賣店協會事務局長	曾根貞(九八)
待望の會長傳記に寄せて	新國産自動車株式會社々々長	齋藤央(一〇〇)
梁瀨校長の話	全國自動車整備工業組合連合會専務理事	齋藤淳(一〇一)
梁瀨長太郎氏の寫眞額	日本經濟新聞社勤務部長	佐々木弘之(一〇四)
事業家としての嘆服	日本石油株式會社調査課長	左部睦男(一〇九)
靜かに匂ひ起つ梁瀨長太郎氏	ニュー・エンイバヤ・モーターズ株式會社々々長	柴田勝助(一一〇)
ビュツクの梁瀨	日本ビストンリング株式會社専務取締役	田所鷹一(一一一)
梁瀨さんと國産自動車	日産自動車株式會社取締役吉原工場長	田中常三郎(一一三)

チャンス
機 會を逃さぬ、あの意欲……………元、梁瀨自動車株式會社販賣掛長 竹内光秋(二六)

燒電柱の一片が置物……………梁瀨自動車株式會社名古屋支店長 館野松十(二七)
(元、臺北市、巴自動車商會主)

自 動 車 王……………高城彌太郎(二〇)

側近者から觀た、私の綴方……………梁瀨自動車株式會社營業部囑託 高階孝道(二三)

自動車大學の校長先生……………自動車交通新聞社々長 辻 靖剛(二〇)

私の識る梁瀨長太郎氏……………衆 議 院 議 員 植原悦二郎(二三)

思慮周到な梁瀨さん……………元豊國自動車株式會社々長 梅村四郎(二三)

石橋を叩いて渡る人……………渡邊 勝(二五)

顧問に推薦する梁瀨會長……………東京都自動車整備工 業協同組合専務理事 渡部治一(二七)

異彩を放つ、あの白髮童顔……………元横濱正金銀行重役 山崎秀太郎(二四)

活かして使ふ、お金の教訓……………三和自動車株式會社取締役 米山良吉(二四)

私の觀た「梁瀨長太郎氏」……………東京自動車タイヤ株式會社々長 柳本光三(二五)

梁瀨長太郎氏の横顔……………東京日産自動車株式會社々長 吉田政治(二四)

私 の 言 葉……………梁瀨自動車株式會社取締役管理部長 梁瀨喜作(二五)

刊行會世話人としての謝辭……………梁瀨自動車株式會社常勤監査役 大澤喜市(二五)

人生の達人

安藤清太郎

赤坂の山王神社の大鳥居の近くに『山王會館』といふ、小さいけれどもまことに氣持の好い建物がある。こゝに毎月か或は一月おきに十人足らずの人々が集つて、午餐を共にしながら數刻を楽しく語り合ふのである。

梁瀬さんはこのパーティーのレギュラー、メンバーの一人である。このパーティーのメンバーは、かくいふ私を除いては各方面の權威者揃ひであり、年輩も皆六十以上である。従つて老巧練達の士の集りと言つて好いのであるが、その中でも梁瀬さんは長老の一人である。何かの差支で、この會合に梁瀬さんのあの美しい銀髪が見えない時は、我々は何となく物足らない感じがするのであるが、梁瀬さんも亦この會合を楽しみにしておられて、よくせきの事でないといふと缺席されることはないやうである。

いはゞこの會合はロータリ・クラブのやうなものであり、事實又メンバーの半數近くはローテリアンであり、梁瀬さんまた自動車界代表としてローテリアンなのである。この會合には時々ゲスト・メンバーとして馬場恒吾氏や鈴木文史朗氏が顔を見せるが、そんな時話の引き出し役をつとめるのはいつも梁瀬さんである。

一昨秋古稀の賀筵で原安三郎さんが『梁瀬君はキング・オブ・ワン・トレードだ』といはれた。ま

ことにその通りであるが、經濟界はもとより百般の事に該博な知識を持つて居られ、而もものごとのポイントを必ず心得て居られるのにはいつも敬服させられるのである。これが梁瀬さんがいつも話の引き出し役をつとめられる所以である。

梁瀬さんは話上手でもあり、聞き上手でもある。だから梁瀬さんが一枚加はると話が一段とはづんで來ていつも時の移るのを忘れてしまふのである。

私はいつも思ふのであるが、自分で一業を起された人々は何處か常人と變つたところがあり、その片言隻語にも我々のいひ得ないオリヂナルなものがある。つまりいつて居ることが本當に腹の底から出て來て借りものでないからである。私は梁瀬さんのお話をうかゞふ度にいつもこの感を深くするのである。そして人生の荒波の中で百鍊千鍛して來られた達人は違ふなアと感嘆するのである。

この一文を草して居る時に山王會館のパーティーの案内が送られて來た。恐らく梁瀬さんの溫容に接し、あの滋味掬めどもつきせぬお話をうかゞへることと思ふ。今から楽しみにしている。

(株式會社安藤組社長)

萬年青年の梁瀬長太郎氏

相 羽 有

西歐の傳説にて知名なるフェニックス物語には、火焰の裡にても生きつゞける不死鳥のごとき存在

こそ、わが自動車業界に於ける、梁瀬長太郎さんの輝やく半生涯であらう。

わたくしと梁瀬さんとの縁は、大正七年、英國製のハンバーといふ、空気冷却式二氣筒十馬力の二人乗り軽自動車の中古品を購求したのが始めであつた。代價は驚くなかれ、六百圓也。

賣る方の梁瀬さんも、買ひ手のわたくしも、簡単に取引きを済ませてから、自動車の取締法規などまつたく知らないわたくしのことなので、無雜作に、そのまま運轉して歩いた。

その頃、いまの羽田飛行場の埋立てもない、海濱の干潮時に滑走したり、離着陸する、民間航空の草創期なのだから、その自動車は『日本飛行學校』とボデーに書いただけで検査も受けなければ許可もない。當時の飛行機は検査などは無かつたので同じように考へていた。また飛行士の免狀も無かつたから、自動車運轉手のことも差支へないものと早や合點したものか、免許證なしにて平氣の平左衛門であつた。

都大路を氣まゝに走り廻つても、いまだ交通巡查といふものが生れて來ない時だから、誰れ、一人としてとがめるものもない。

やがて、自動車の規則があることが判明して驚いた。恐縮して検査を受けたり、運轉手の試験に合格し、漸く安堵の胸を撫でおろしたものであつた。

いまでは嘘のような話であるが、恐らくは飛行學校といふ珍らしい文字が、陸軍とか海軍とかに所

屬するかのごとき印象を世人に與へていたからであらうと推察される。

この中古自動車からスタートしたものを、『日本自動車學校』であつたから、梁瀬さんは自動車學校の生みの親と稱し得る譯である。世に謂ふところの梁瀬學校出身の有能練達の上村秀次郎さんが飛行士を志願して來られたが、唯一の教官、玉井清太郎飛行士が惜しくも犠牲となられて飛行學校の方も再興難の折から、上村さんが俠氣をだして自動車運轉手の養成を試みた。この創始時代は羽田海岸であつたが、後年、蒲田村……大震災までは菖蒲園と農家が點在する水郷……へ移つた。

月刊雜誌『スピード』と申してもお忘れの方が多いであらうが、梁瀬さんの廣告料を載いて印刷代を補填したときであつた。

自動車講義録を發刊したときも、御指導と御鞭撻とを賜つた。いまは亡き山口安之助さんの編輯振りも、懐しい思ひ出となつた。

梁瀬さんの萬年娘ならぬ萬年青年らしい活躍振りには、まつたく頭が下がる。實に敬服の外はないが、自動車の販賣に於ける、獨特の手腕と水も洩らさぬ計畫とには前人未踏の境地があつた。わたくしも猿真似ながらもと決心して『日米スター自動車株式會社』を創立した。そして梁瀬さんの後輩として御教導の下に努力した。

丸ピルの二階に『自動車投資株式會社』といふ、月賦販賣の約束手形を割引する金融機關が中谷保

さん、山田忍三さんの斡旋にて開業したとき、また「朝日タクシー株式会社」といふ、獨立心の旺盛なる運轉手に一臺づゝ自動車を買取、収入金より償却せしむる、圓タク利用の新しい販賣方針の實施などに就いても、大先輩として尊敬する梁瀬さんの一方ならぬ御支援を仰いだことを想ひ起していまさらながら感謝の念の切なるものがある。

幾變轉する萬華鏡のごとき自動車界に雄々しくも梁瀬自動車株式會社を築きあげて今日に及ぶ、三十有餘年の歴史こそ、わが自動車界の金字塔であらう。

戦時に於いては、特殊ボデー工場を擴張せられて軍用車方面に貢獻されたのであるが、終戦となるや、忽ちにして急轉廻されてゼネラル・モーターズ株式會社とのデストリビューター契納成立の快事を達成なされた。この間、進駐軍やG・M社關係との敏速かつ眞面目なる努力のため投じつくされたことは驚嘆に價するものがある。梁瀬さんの老來ますます意氣旺んなるものに多年親交のありし人々のことごとくが敬服した。

古稀の壽を重ねられた梁瀬さん！どうぞ、幾久しく強健なる頭腦と強健なる身體を維持せらるゝよう、そして後進のわたくしどもをみちびき、愛し育くんでいただきたい。

わたくしどもの光明として仰ふぎ、大先輩として梁瀬さんの巨歩の跡を偲び、いま感謝の念が胸中に沸々として湧きいで、止どめ得ない。

梁瀬さんの傳記刊行を梅村さん、大澤さん、中島さんが發企せられたことは、洵に時機を得たるものとして推奨したい。また山崎晁延さんが編集なされることは錦上さらに華を添るものであるから、これこそ、永遠に残る、わが自動車發達史の貴重なる文献となることを信じ、近來まれにみる快心事として無上の歡喜を覺える次第である。

||一九四九・一一・一五・池上假寓にて|| (東京物産株式會社々長)

オオタ號を育成した梁瀬さん

福井孝一

昭和九年、資本金一千萬圓で日産自動車株式會社が鮎川義介氏に依つてスタートして以來、同社の製品が國內需要から、これが海外市場への進出となり、同社の小型自動車ダットサン七五〇CCが三菱商事の手を經由して濠洲方面へ、三百臺も大量に輸出されたことがあつた。

當時、三井物産は支那(現在の中華民國)を始め南方諸地域には數多くの支店や出張所があつて、絶えず彼地にあつた物産南方支店では、凡ゆる市場に於て三菱商事との商戦は華々しい競合ひを生じていた。

そして其のダットサン小型自動車に對抗して物産の各支店から本社に對して、これに類した自動車を提供して、くれることを、しきりと懇懇してやまなかつた。

然し、其頃は三井コンツェルンとしては全面的に國產自動車工業に對して魅惑を持つて居らず、偶々、當時の三井造船の川村貞次郎氏と、三井鑛山の牧田環氏などが、此の自動車工業の熱心な支持者で、旺んに其の意慾を發揮していた頃であつた。然も其の所信とするところは極めて高踏的なものであつて、所謂、間に合せのものでなく、國產自動車と名が附く以上、最も純粹度の高い國產車で立派なもの、その構想とするところは、たゞ聽いた丈でも、一寸や、そつとでの話ではなく、三井の面目にかけても他車の追隨を許さぬ様なものを造り度い、と言ふ、高い高い理想を以つていた、それであるから、しばらくの間はこの構想は成る可くして成らない状態が続いて、實際には遣り度い熱意は充分に持ち合せ乍ら、なかなか、これが夢の實現には程遠い感じがしていたのである。

ところが、時も時、此頃のこと、明治四十年から内燃機關の研究に着手して、飛行機用空冷式百馬力エンジンを製作したり、同四十五年には學校教科用小型發動機を多量に製作して、大正九年には水冷式九馬力乗用自動車の製作に乗出し、同十年には、これを完成して昭和六年、五〇〇CC水冷式二氣筒小型自動車、翌七年には七五〇CC水冷式四氣筒エンジンを製作して、遂にオオタ號小型四輪自動車を世に送つた、今迄業界には隠れていたエンジンニア太田祐雄氏の太田自動車製作所を三井物産が業務一切を繼承することとなり、愈々待望の國產自動車工業に乗出すことが急に纏つて、計らずも私には選ばれて、此の事業を直接に擔當することになつたのであつた。

即ち、夫れは昭和十年四月三日に設立された高速機關工業株式會社が、それであつて、早速、三井物産の當事者が企畫していた理想に向つて、そのデザインを作る可き見透しがついた譯である。

ところが茲に、その販賣に就て大切なセールズと云ふ面になつてハタツと行詰りを生じて仕舞ひ、如何にしたら此の問題を解決するかと云ふことが、當事者に於て大きな問題とはなつたのである。

然し幸ひにも、これは全部を擧げて多年業界に經驗を重ねる達識者の梁瀬さんに、期待した方が一番宜しいと云ふことに決定をみたのであつた、當時三井物産の企畫で作つた販賣に關するものは非常に慎重を極めたものであつて、その Interest を梁瀬さんは、心よく引受けて下さつたのであつた。

そして私達の目論見であつた事業は理想にと進み、一方對敵としたダットサンは、此頃オーバードアクションのために、急に車の販賣價格の値下げを斷行して、勢ひ國內市場では、そのセールズ戦は熾烈を極めて來たが安全の中谷保、愛國の丹羽義次、八洲の木村兼次郎、豊國の梅村四郎の各氏と共に梁瀬長太郎氏の熱心な指導によつて出來た、彼の日本にとつては唯一無二の高速販賣網には寸毫のゆるみなく、デビュー早々にも似合はず新型オオタ號小型自動車は逐次、好評を得て全國到るところに進出をしていた。

殊に私にとつて忘られないことは、梁瀬さんが多年の經驗を、その技術面に具現して、あのオオタ號のスタンダードセダンのボディをデリバリーして頂き一層オオタ號をして價值あらしめ、ボディ面

でも絶大な援助を仰いだと云ふことは、たゞ、あの車が立派であつた許りでなく、茲には斯うした隠れた多大の犠牲が拂はれていて、精神誠意の援助を以つて、あのオオタ號の將來へ育成を拂はれたことである。

こうして私達の手鹽にかけた會社のプロダクションも漸く順調に進み、あの月産二百臺と云ふ線に達して愈々、これからと云ふ時、 \parallel 今から考へると實に残念なことであるが \parallel 私の應召と云ふことであつた。そして其頃、既に七五〇〇〇の軌範からオオタ號は脱して一二〇〇〇も二〇〇〇〇の試作車も出來て、行く行くは當時、世界の業者を瞠若たらしめた、彼のドイツのフォルクスワーゲンたらしむべき意圖を持つて居たのに、これが斯くも簡単に挫折した事は、今日でも私は實に遺憾、此の上もないことゝ思つてゐる。そして高速機關の會社は私の應召中に遂に立川飛行機に身賣りされたことは御承知の通りである。

然し、オオタ號を育成し、オオタ號の將來への見透しに就て、筆紙につくせぬ援助と指導を與へて下さつた梁瀬さんは、終生、私の忘れ得ぬ恩人である。また私が常々抱懐していた夢を幾分なりとも斯く實現するに預つて力のあつたことを、心から感謝するものである。

三井物産が太田氏を拾ひ上げ、私達も努力して兎も角、國產自動車工業の一分野に、事實、劃期的な企業を合理化して、現在、例へ事業形態が變つても、當時の私達が意圖したことが今日も尙、依然

として繼續されていることを見ても、私は獨り満足することが出来るが、尙、それにも増して往年の梁瀬さんの採られた、あの態度と言ひ、あの親切な指導に想ひをめぐらして轉た感、無量なものがあつた。故に今日、直接自動車につながりを持たなくとも至極満足な氣持で、かくはぐくみ育てあげたオタ號の前途に満足を持つ一人である。(太平企業株式會社常務取締役)

一人一業主義に生きた梁瀬君

原 安 三 郎

梁瀬君に初めて御會ひしたのは、同君が山本条太郎さんと相談されて、日比谷に事務所を持つて、菱形の中にY・Hのマークで、自動車販賣業を創められた頃であつた。その後、自分の別懇の友達で今は故人になつてゐる吉崎良造君がその仕事をお手傳ひしたり、また自分自身も約十年ほど同君の會社の監査役をしていたこともあり、常に公私共にお親しく願つてゐるので、同君については色々の事を思い出して果しがないが、その二つ三つを拾つてみよう。

同君は、一ツ橋高商卒業後初めは三井物産に入社して機械部に勤務されたが、後に獨立して自動車輸入業を創められた。

一體、新しい仕事を創めることは容易なことではない。他人には想像できない苦勞の伴うものである。三井物産のような所に入つておられた梁瀬君が、よくその決心をされたものだといふ自分は常に感服

しているが、これは獨立の時期が早かつたから退社の思ひ切りがついたのだと思ふ。

若し、そのまま物産に留つていられたら、或は同君ほどの才能をもつてすれば、『三井の梁瀬』になられたかもしれぬが、今日の「自動車の梁瀬」は生れなかつた譯である。

創業後の同君は、米國のゼネラル・モーターズ會社の一販賣業者として、高級車の輸入に全力を注がれて、内には着々と社業の基礎を堅められると共に、外には自動車の普及大衆化に努められた。この頃の同君の姿は他所目にも颯爽たるものであつた。

然し乍ら、永い間には、同君も人の知らない苦しい經驗をされたことがあつたと想像する。殊に、日比谷から吳服橋に移つた後、震災によつて、事務所並に當時としては宏大であつたショールームが全焼してしまつた際などは、さすがの同君も大部困つておられたようであつたが、平然として一切をさつぱりと諦めて、焼失建物の道路にあつた二尺程の電柱の焼残りを罹災の記念として、綺麗な遺物に仕立て、自分の部屋に飾つておつた。そして、却つて勇氣百倍して、日本橋通三丁目に以前よりも宏壯な事務所を再興されたが、その時の同君は實に御立派であつた。

その後は芝浦の車庫、高濱のボデー製造工場など、日を追い月に伴つて發展し、戦時中は輸入が中止されたものの、時宜に適した自動車修理などに終始され、戦後再び盛大になつて現在に及んでいる。また近頃、戦前の販賣力と信用とを米國の會社が認めるところとなつて、米國車の一手販賣權を再度

與えられて、輸入業者の第一人者として一大飛躍を試みようとしていられる。老いて益々さかんなりというところである。

次に、梁瀬君について語るとすれば、そのお人柄を見逃す譯にはいくまい。同君は物ごとを處理する場合、先づ仔細に検討熟慮して、一度び結論がでると、それを積極果敢に斷行される。まことに事業家にはうつつ、つけの氣性である。然し、同君は人に接する時は極めて慇懃鄭重であつて、他人に嫌な氣持を起させたことなどは、今迄に一度も無かつたことと思ふ。

それから、最後に、同君について特筆大書しなければならぬことは、事業家の絶対に嚴守すべき「一人一業主義」の枠から一步も踏み出さなかつたことである。

この點、私などは、同君と反對で、手廣く事業をしていた山本さんの許にいたので、翁の命令に即従し、その新規の計畫にはいや應なしに參割してきたのであつた。然し、梁瀬君だつたら、たとい翁の命令であつても、恐らくは簡單には耳をかさなかつたことと思ふ。同君が自己の信條を守る意志の強さは實に驚くべきものがあつた。

先年、將來は日本火藥會社と必ず合併される筈である帝國染料製造會社の株を臺灣銀行から自分が引受けた時、値段は割安であり、將來性もあるので、その株を分譲しようと同君に申送つたところ、即座にきつぱりと斷られた。これなどは、「一人一業主義」の枠を越まいとの深慮に出たものであら

また、それと似た話であるが、こんなこともあつた。それは、或る時山本さんが、自分の同族會社にも等しい内外鑛業會社の株を、その親類及親類附合ひの者に引受けさせた時のことであつたが、傘下の者も二、三人ほど持つことになつたので、梁瀬君も止むを得ず少しばかり引受けたが、その後自分の本意でない株式を持つたことを何時も氣にしておつたようである。

事業の經營にしる、學問の研究にしる、何事でも、一事に徹することは決して容易なことではない人間というものは生來倦きつぽいものであり、また多情なものである。そこで、少し事がうまくいかぬと之をやめて他に移りたくなり、また少し上手にいきだすと、彼も此も手を擴げたくなるものである。そして何一つ大成しないで、本も子も無くしてしまふ場合が多い。自ら考え自ら選んで自己に最も適した一事に徹して生きぬくことは、容易なことのように、これ位難しいことはない。失意の時、得意の秋、初一念を貫くことは大勇猛心があるものである。梁瀬君こそは、その幾多の苦難に耐えて大成された方というべきである。

一昨年、麴町のエスカイヤーで同君の古稀の賀宴が行われた際、自分が祝辭を述べたが、その一節にも、

「私は梁瀬君について特に感心いたしておりますのは、同君が、生涯『一人一業主義』に徹し、キン

グ・オブ・ワン・トレードの信念を貫徹されたことであります。

それに反して、お恥しい次第ですが私はジャク・オブ・メニー・トレーズの途を歩きました……」
と言つたことを今でも覚えてゐる。

即ち、梁瀬君といへば、自分の脳裡には、直に「一人一業主義に生きた事業家」といふことが思い
浮ぶのである。

今や、梁瀬君の存在は、單なる「梁瀬自動車會社の梁瀬」ではなく、「全日本自動車界の梁瀬」否
「自動車界の國際的梁瀬」と言ふも過言でない。敗戦日本の産業再建には同君のような信念の人に期
待するところ甚だ大である。切に御加餐を祈る次第である。(日本化薬株式会社々長)

梁瀬君と私

橋本萬之介(談)

梁瀬長太郎君には、一昨年十月十六日古稀の壽を重ねられ益々元氣旺盛で梁瀬自動車株式會社の取
締役會長として日本の自動車界の爲に御活躍されて居ります事は、誠に御目出度い次第であります。

此の度梁瀬君の傳記刊行に當りまして過日世話人の方から梁瀬君について何か書くようにとの御依
頼を受けて居りましたので、私も親友の一人として此の目出度い御計畫に對して、御祝辭を兼ねて少
し御話申し上げ度いと存じます。

世話人からは特に今日迄公表されなかつた秘話の様なものを公開して欲しいとの御要求であります
が、實際を申し上げますと、私と梁瀬君との本當の交際は四十過ぎてからでありまして、學生時代や、又
は實社會へ出てからの若い時代の所謂、特種の様な思ひ出話はないのであります。

梁瀬君と私とは一ツ橋の東京高等商業學校を明治三十七年に同期生として卒業したのですが、梁瀬
君は東京府立一中から、私は東北の田舎の中學から入學しました者で、一ツ橋で一緒になつたとはい
ふものゝ組が異つていた爲め、合同講義以外には顔を合せる事も少く、従つて在學中は餘り親しい交
際はして居りませんでした。

更に卒業してからも、梁瀬君は三井物産に入社してから、印度に在勤された事もあり、私は銀行生
活に入つて内地から外地へ轉勤する等、仕事の違い勤務地を異にして居りました關係上、卒業してか
らも交際する機會は極めて稀でありました。こんなわけで梁瀬君の潑刺たる青年時代の秘話は持合せ
がないのであります。

梁瀬君と本當の意味で御つき合ひをする様になりましたのは、大正十二年の關東大震災直後に私が
朝鮮銀行の理事として外地から東京へ戻つて參りましたからであります。

その頃梁瀬君は、既に日本の自動車業界に於ける第一人者として成功され、梁瀬自動車株式會社及
び梁瀬商事株式會社兩社長として大いに御活躍されて居りました。

その時分から白髮童顔の梁瀬君は附合へば附合ふ程、味の出る人柄であり、誠に人ざわりの良い福徳圓滿の性格でありました、年齢は私より一つ年上であります、梁瀬君の風格からして私はその時分から「梁瀬翁」「梁瀬翁」と呼んで居つたわけです。然し乍ら圓滿居士と見える梁瀬君も心の中は非常に確りして居りまして、一度決心した事は機敏に之を斷行するといふ、所謂、外柔内豪の性格の持主であります。

私と梁瀬君との交遊は四十代から始まり、爾來現在迄、永い間交際をして参りましたが、私が梁瀬君に對して何時も敬服して居ります事は、梁瀬君に會ふ度毎にその談話の中には必ず一つか二つは良い事を教へられる點でありまして、私は之を有難く拜聽するのが常であります、此の美點は、又梁瀬夫人も同じ様に持つて居られ、私の家内等も梁瀬夫人にお會ひする度に必ず何かしら良い事を教へられて歸ります、ですから私達は梁瀬夫妻を社會學の先生とも御呼びして居ります。

梁瀬君は日本の自動車界に於ける先驅者として、且、成功者として業界に君臨され、ヤナセと云へば自動車と云はれる程に、有名となられました、同君が自動車界のヤナセとして、今日の嚴然たる基盤を築き上げられた所以は、前にも申し上げました様に、その福徳圓滿、外柔内豪の性格の然らしめたものと私は信じて居ります。

尙、梁瀬君は一昨昭和廿三年に米國ゼネラル・モーターズ會社と戦前に於ける關係を復活されまし

て、自動車輸入の業績も最近頗る擧り、御子息次郎君（社長）が後繼者として梁瀨君の仕事を立てて受けついで居られる事は誠におめで度い限りでありまして、私は梁瀨翁の御多幸を衷心より祝福申上げ度いと思ひます。（元、東北配電株式会社々長）

梁瀨さんと育英

蓮　見　徳　男

昭和九年正月も末の頃、私が満鐵に入社して赴任の途につく時であつた、満洲に行つてしまふと今迄のやうに、月に何回も番町のお邸宅に參つて御垂教を受けることが出来なくなるので、梁瀨さんに「私に座右の銘を下さい」とお願いした。私はそれを出来ることなら揮毫して頂き度いと思つたが、自分が其準備をして置かなかつたので書には出来なかつた。

梁瀨さんは其時一寸時間をおいて私に「身を殺して仁を爲す」といふ言葉を下さつた。そして「此場合の身を殺してとは身を殺ぐといふことで、つまり自分の身をけづつて他人に仁を施すといふ意味だ」と註釋して下さいました。

私は堅く心に銘記した。今でも銘じている。梁瀨さんが實業に御熱心のことは何人も熟知している處であります、私はこれと同時に梁瀨さんは育英について又非常に、御熱心であられたと申しますか、御高德を垂れさせられたお方であることを茲に記述致したいのです。

唯、此事については梁瀬さんは不言實行で、終始され、聊かも口外なさらぬ様でしたから、其實際に浴した者以外には容易に判り得なかつたことと思ふ。

これを前記の論語「殺身爲仁」の銘を藉りるならば梁瀬さんの育英は「身を殺して仁を爲し、然かも語らず」といふに在るものと私は信じます。

會社が吳服橋際に在つた當時、一介の子供として入社した私は、働き乍ら、夜學に通ひ始め、ついで梁瀬さんと當時の商事會社の常務橋戸さんとの御高配によつて、晝間の商業學校に通ふ時間が與へられ放課後は會社に歸つて會社の雜務や、夜の當直員の補助をやつていた。此ことは田舎から飛出した私には非常な好遇であつたので、獨り感激していましたが、梁瀬さんは左様の御配慮をかけて下さつたのに何等の素振もお示しにならなかつた。私はこの事を商業學校を卒業した時、初めて橋戸さんから伺ひ知つたのであつた。

其商業學校在學中のことである。東京商業會議所で第一回の甲種商業卒業學力檢定試験といふものが施行された。私は試みに、其試験を受けて見たら、合格したので其證書授與式に参加した。會頭さんから證書を貰つて席に戻つた、其時、同會議所の議員であつた梁瀬さんは、私を發見するなり、早速つかづかと私の席にお出になつて「良かつたなあ」と仰言つて下さつた。

錚々たる實業家連の集まつている會議所の式場で、自分の會社の社長さんに會ひ、其の上「良かつ

たなあ」との言葉を頂いたことは、小さい胸にも人一倍の感激であつた。

思うに、當時の會議所議員は特定有資格者による選舉であつた様だから、議員は各々業界の代表的方々であつたらうし、梁瀬さんも其御一人であつたことは勿論であるが、同時に梁瀬さんは此處に於ても育英についての御關心を發露されて、會議所の此方面の役員をも兼ねられたので其式場にも御來席あられたことと想像されたのである。

商業學校を卒業するや、直ちに商事會社の社員になつて、晝間會社の仕事に働き乍らも、早朝と夜間は、同じ呉服橋の宿直室で若干の勉學をしていた。其年の十一月頃であつた。梁瀬さんから突然「君が一ツ橋に入學するなら面倒を見てやつても良い」といふお言葉があつた。私は當時夜學のことについては、一言も社長さんにも、會社の幹部の方にも、お話したことはなかつたので、意外に思ひつつも、梁瀬さんの、此偉大なる厚情に感激しつつ翌年三月、一ツ橋に入學したわけである。十二月末頃受験準備の爲、退社の御挨拶に初めて社長さんのお邸宅に上つた時であつた。應接間では奥様が帝大の一學生さんに何彼となく親しく教訓されて居られるやうであつた。

そこで、私は、梁瀬さんは「會社では學校のことなどは片鱗も窺知出来ないのに、お邸宅に在つては奥様も御一緒に他人の子弟を、かくも懇切に御教導下さつて居られるのだなあ」と獨り感歎して歸宅したものである。

果せるかな、私が學生になつて見て、私と同様の學生が外にも數人居つた。其後自分達の以前に、既に多くの學生があつたことを漏れ聞くに及んで、愈々、梁瀬さんの育英の廣いことに自ら感銘置く能はざるものがあつた。

これは昭和三年頃のことであるから、其の後の二十年間を加へると直接、間接、梁瀬さんの育英によつて御世話になつた者は、何十人か何百人が恐らく私の想像出來ないことと思ふ。

而も梁瀬さんの育英は單に學資とか、學校育英とかに止まるものではなくて、奥様共々身を以つて親しく御指導され、人格の教養から教育の向上の方に迄及ぼされているのであつて、現に私の如きも在學中も其後の在京當時も少くも、一週に一度は番町のお邸宅にお招き下さつて四方山の御指導と深い御惠澤に浴せしめられたのである。

或る春先、私は番町のお邸宅の庭の草取りをしていた。小石の間から無數の鶏頭が延び出していたのを、私は雑草と思つて、きれいに抜き取つてしまつた。後から奥様がお出になられて、此邊に鶏頭の芽が出ていた筈ですが」とのことで、私は「雑草と思つたから抜いてしまひました」と答へた。すると、奥様は微笑し乍ら「それは可愛想のことをしました、然し鶏頭に壽命がなかつたのでせう」と仰言つて下さつた。

私は奥様のこの寛容の御姿に少なからず敬服致したのである、と同時に私にとつて大きな修養の材

料が興へられたと思つた。

一ツ橋群馬縣人會といふものがあつて、戦争以來今は途絶えているが、大正、昭和にかけて梁瀬さんは其會長をお引受けになり、當時は随分とお忙しい梁瀬さんであつたが、それでも會には必ず御出席なされて學生達を熱心に御指導して下さつた。或時の會である。學生が二、三十名集まつていた。會場は舊前橋の藩主松平さんのお邸宅だつたと思ふ。梁瀬さんは「學生は勉學すべきことは勿論であるが、其勉學は自分の能力の八〇%位でやつてのけて、あとの二〇%位は餘力として持つていなくてはならない。そして其二〇%を以つて學校勉強以外のこと、即ち社會觀とか、修養とか、趣味とか、いふ方面を養つて置くことが良い」と當時の社會の種々の事例迄舉げてお話し下さつた。會の後で我々は其懇切に感謝しあつた。

扱て、是等のことを次々と書き列べると單に私一人の場合でも書き切れるものではない。

これが梁瀬さんの今日迄の永い間に亘ることであるから、其深さと廣さとは、容易に、私達の側からは想定も出来ない程のものです。

梁瀬さんを以つて、實業界、殊に日本の自動車界に非常な御努力と御貢獻とを捧げられたお方と、世間の皆様が承知せらるることと思ふが、私は、これと同時に、梁瀬さんは、育英方面に於て又非常な御努力と、御貢獻とを賜はつたお方であられたことを確言致したのである。即ち自動車事業と育

英とは常に表裏一體して、三十有餘年間の久しきに亘つて推し進められて來たのである。

而して、前者は實業といふ廣い社會を相手に大勢の社員や其の他の人々との協同ワークとして、常に表現的のものであるのに反して、後者は、全然、表面に現はれず、又お現はしにならず、ひたすら奥様と、ただお二人だけでお遂げ下さつたのである。即ちこれ隠れた大いなる育英家である。梁瀬さんは「殺身爲仁」を御實踐なされた上に「然かも語らず」といふ言葉を無言の裡に付け加へられたのである。

江湖、育英事業といふものは相當にある。然しこれとても、世の篤志家の寄附を基礎として學校教育を授與させている崇高なる事業で、常人の遠く計り難い處であるが、梁瀬さんの場合は、これをお一人で行はれ、而も、學校教育に加ふるに奥様共々一般教養の育成に迄御導き下さつたのであるから、其、崇高にして偉大なる御仁徳には嘗々敬服の外はないのである。

一業一貫の白頭翁

島 山 一 清

梁瀬と云へば自動車、自動車と云えばすぐ梁瀬を連想する。自動車界の梁瀬はそれ程有名な天下の存在である。明治の後年、三井物産が自動車の輸入を始めたが、自轉車でさへまだ物珍しい時世であつた位だから、どうしても採算に乗らない。さすがの物産もとうとう投出すようになってしまつた。

その頃の三井物産といえは飛ぶ鳥も落す豪勢さで、國內はもとより廣く世界中に活躍していたので、その物産が思わしくないと見て手を引いた以上、普通ならそれに代つて引受けるものはない筈であるところが、そこが梁瀬長太郎翁の偉い點で、事業の將來性に着目して、獨力で敢然と乗出され、その後は所謂一人一業主義を押し通して、脇目も振らず社業に精勵されて、ついに今日の發展を見たわけである。

この一人一業主義は小生も亦共鳴するところで、おそらく同時代と思うが、學校を出てから、大學時代の恩師發明の機械を造る機械工場に勤めたところ、當時は丁度日露戦争後の永い不況期で、とりわけ機械工業は倒産するものが續出するうち、御多分に洩れずこの工場も閉鎖を餘儀なくされる羽目に陥り、そこで止むを得ずその事業を引受け今の會社を創設し、爾來四十年の間ポンプと首つ引きをして來たが、永い年月には照る日ばかりは續かず、その間いろいろと人知れぬ苦勞もあつて、自ら同氣相通するものがあるうと思ふ。もつとも小生の方は元々地味な仕事である上に、終戦後は殊更振わず、時勢から取残されて氣息奄々孤壘を守つてゐる有様で、風を切つて疾走する新型自動車のスマートさを羨むばかりである。

翁はまた戦後初の不自由な時にも拘らず、盛大な古稀の賀宴を催し、臨席した全國の有志に逸早く復興の警醒を喚起し、ついで芝浦に、誠に明るい氣持のするアメリカ風のシヨールームを新築して輸

入自動車のデモンストレーションを展覧せられたが、今後平和國家の建設が進むに従い、自動車界の前途いよいよ洋々たるを想わしめる。

翁の人となりについては、他に多勢の方々が語られると思うから、敢て重複を避けるが、翁は見るからに綺麗な銀髮童顔の白兔そのもので、常は黙々として餘り多くを語らない沈着さがある。能樂では白頭といえ、小書付き別傳壯重のもので、例えば普通鞍馬天狗といへば極く初心のものであるがこれが白頭となると免狀物以上に八釜敷いものになり、従つて沈重な中に力強い動きがある。この白頭翁も一度その沈黙を破つて發すれば、月の世界までも跳躍する程の果斷と勇氣を持てる卯年の人である。温厚篤實な人柄に加えて經濟觀念に長け、まことにビジネスマンとして申し分がない。いま本傳記編纂の擧を聞き、老來ますます壯んな梁瀬翁を祝福して、喜んでこの一文を呈する次第である。

(株式會社荏原製作所社長)

追従を許さぬ、ねばりと不屈の信念

堀

文 平

梁瀬長太郎君との交友は、今から四十數年前、今の一ツ橋大學の前身東京高等商業學校に入學の時に始まる、同君は學校時代は寧ろ大器晚成型で、ゆつたりとした態度の持主で、年長でもあつたが、私は常に兄事して居つた、卒業後、同君は三井物産に入社されたが、私はひそかに同君は物産型では

ないと考へて居つた。果せるかな三井で修業せられた蘊蓄と經驗を以て自主獨立自動車關係の仕事に進出せられた、當時發展日本に最もふさわしい仕事で、同氏の目のつけ所に感心した、其後事業は段々と順調に繁榮し、遂に今日日本の自動車王として業界に君臨せられるに至つた、洩れ聞く所によれば、同君が今日の地位を築き上げられる迄には、度々業界の波瀾に遭遇せられた事もあり並々ならぬ苦勞をせられた事も尠くなかつたかに承知して居るが、同氏一流のねばりと不撓不屈の信念が今日の成功をもたらしたものと思ふ、此事は後進に對する立派な生きた教訓である、同君は既に古稀を迎へられたが、仲々元氣である、どうか此上とも一層、自重自愛、業界の爲、又日本の爲めに、今、一ふんばりの御健闘を祈る次第である。(富士紡績株式會社取締役會長)

二、三思ひ出すこと

堀

久

私が梁瀬學校に入つたのが、大正六年、春とは言ひ乍ら既に暑い様な日であつた。新米として勉強する事が澤山あるので、机に向つて居ると、その上に陽が當つたから、一人丈の室で廣くはあり、机を少しズラした儘で室から云つても斜に位置して着席して居た。

ところが、社長(今日の會長)が見えて、正しく格好の良い様に机を直したら、よかろう、との御注意であつた。勿論、そうした方が見た眼には良いことを氣着いたので有難く思つて直ぐに動かして

並べ直したが、建物の形から来る光線の加減が落着いて居られぬ様な感じがして困つた。そして會長は細いところまで氣を使ふ方だなと、云ふ事を考へた。

未だ此頃は會長自身も、お若い時のことだつたし、そうした几帳面さを云々されること等には常人では氣を使はない筈である。

そう云へば、その後、端正を整はるゝ會長は如何なる暑中と雖も人前では上着も脱がれたことがなかつたが、反面、夕方社内會議の場合などには列席の社員の身を考へられてゝあらう、眞先に上着を取つて皆んな脱いでは何うかと勞はられたのである。

斯うして自動車の事も短時日に憶へて、一ツ製作をやらうと考へて、會長に相談をしたところ、早速承認を得たので、勇躍した私は設計に取りかゝつたが、驚いたことには、會長は一旦委せた以上此の若い経験も薄い私に全然委せきりで、たつた一度もその計畫に就て異議を申されなかつた。血の氣の多い私が此時には感激したことは勿論であつたが、私は、なんて會長は腹の大きい人であらうと痛感したのであつた。

斯く梁瀬自動車の試作、ヤナセ號の設計の終つた時、即ち大正八年九月のこと、私は時の農商務省の海外實業練習生の試験を受けて合格したので急にフランスに渡り、併せて歐洲に於ける小型自動車製造に就て研究することゝなつたので、會社からも海外出張の形式を採られることに會長の諒解を得

て頂き、約三ヶ年と云ふ間、つぶさに勉強をさせて頂いた次第でした。

此の間、吾が國に於ける財界のパニツクは酷しく、會社も御他聞に洩れず相當な苦境に起つていたので、私と同様に海外に派遣され、アメリカに居た山縣政夫、泉藤吉の兩君達は、豫定より早く歸朝される様な始末でしたが、私は何の幸ひか充分な日時を許されて、出來得る丈、ヨーロッパ各地の自動車工場を視察し巡ることが出來たのであつて、今日想へば、望外の願ひが叶へられた譯で、これはたゞ會長の寛大な御知遇であつたと感謝に堪へない一事です。

そうしてヤナセ號の製作は努力家の折橋勇治君が其後擔當者となられ、種々尊い經驗を積まれたことであつて、何んでも最初の車が出來て試運轉に出たところ、早速吳服橋の省線ガードの處で、故障を起して動かなくなり、喜んで乗つて居られた會長も下車をして電車通りから押し除けることを御手傳ひ願つたと云ふ始末で、寔に恐縮の思ひをしたが十分に取調べる様にと、軽い御注意をされたことには、益々、冷汗ものであつたとは、今日でも話に出る事である。

大正十一年七月に、私は歸朝して、再びヤナセ號の完成に努め、十二年の春には漸く、これでと云ふ確信あるものが出來て、茲に計らずも山階宮、同妃兩殿下の工場へ行啓と云ふことになり、そのヤナセ號御試乗の光榮を賜はつた次第でした。ヤナセ號は最初の計畫は十臺でありましたが、最初は五臺丈完成したものです。

それから例の關東大震災に遭ひ、電力が停まり、それやこれやで、工場内で物を探して居る時、誰ともなく、此のヤナセ號の發電機を廻して見たら、結構これは役立つことが判つたので、被害を受けなかつた此のヤナセ號は初めて買手がついて、あの復興作業に活躍した譯でした。

其後十年程経て、來社された歐米の自動車會社の技師連中から、此のヤナセ號は設計としては時流に決して遅れていなかつたと、お讚めの言葉を頂いたことがあつたが、何んとしても製作費が安く上らなかつた故、然かも時は不況で資材も不足勝ちで、採算上到底、これを繼續することが出来なかつたことは、如何にも残念なことであつた。

想えば、若し條件が許され、事情さへよかつたら、そして、これを續けて行くことが出来ていたら此のヤナセ號は今日國産車の第一線に起ちニッサンやトヨタに勝つたものと或はなつて居たかも知ぬが、又一面、それは危機に望むも止むを得ない事態となつて居たかも知計り知れない。

此様にして會長は現場仕事は當事者委せてボデー架装にしる、その装置の改造にしる、決して言葉をはさむことなく、たゞそれぞれに人を得、これらの人々を統率して、其の個々に練磨せしめていたと云ふことは、やはり會長は大將の器で、しみじみその偉さが判るのである。

人の成功が、運頓根に基くと云はれる處、梁瀬會長は運才根によつて居り、會社の經營を商行爲以外に出さぬ事によつて、數回の苦難を切抜けることが出来、所謂、危険な大成功に到らずとも、今日

ある満足すべき小成功者となられた梁瀬會長に、私は愈々御健闘を祈る次第である。

(日東自動車興業株式會社々長)

梁瀬長太郎氏の事ども

細 山 太 七

梁瀬長太郎君は自動車界の元勳にして、又成功者である事は周知の事實である。私が同君を親しく知れるは、今より十數年前、當時のライジングサン石油會社の特約店(今のシエル石油會社)となられた時からである。會社の肝入りで毎月例會が開かれ、毎年春秋二期には、全國名勝の地に旅行會が催され、常に同席して互に談笑して來たのである。君は一種剽忽たる風致のある立派の感じのする人である、それと云ふて特筆すべきものもないが、或る年の春、京都へ旅行した際、宴會場がたしか鴨川べりの「大千賀」であつたと思ふが、會社側と特約店側十二、三名で仲々盛會であつた、先づ本職藝妓等の余興があつた後、誰云ふとなく銘々隠し藝を出す事になり、或は蠶聲を張りあげて歌謡曲を唄ひ、或は詩吟を爲すものもあり、又は手品をやるものもあり、中には酒盃を逆さに口中に含みて、うすら寒き折柄に拘はらず半裸體となりて「わたしのラヴァさん會長の娘」と歌に連れて踊るものあり、興愈々酣なる時、手拭鉢巻に褌を掛け、羽織を逆にして袴に見なし、ステッキを腰間に挟みて「人は武士氣概は高山彦九郎」と、例のサノサ節に合せて、劍舞をやりだした者がある。何人ならん

かと見てあれば、是れぞ、梁瀬長太郎君其人である、鮮やかに一番踊り終り、ヤンヤと、大拍手大喝采、又哄笑實に興の盡くるを知らざりし如き事ありき。其當時の事、今尙歴々として眼中にあり、日支事變も起らざりし頃とて、一般にのんびりしたものがあつたものがあり、實に夢一場感慨無量である。何時かは再び斯かる時世になつて梁瀬君の劍舞を再び見る朝がある事を祈つて止まない

(株式會社細山商店社長)

上州人特有の短所がない梁瀬君

星野唯三

明治三十七年に一ツ橋を卒業した、我等三七會員中、自營で事業を經營せられた者は極めて少いが梁瀬君は若い頃、自動車事業に着眼して自營發足せられ、創業當時種々困難があつたに拘らず、萬難を排し、獨力で今日の地位を築き上げられ、自動車と云へば、梁瀬と云はるる程の成功を收められた事は、一般の等しく認むる所で私の常に敬服して居る次第であります。

梁瀬君の郷里は私と同じく群馬縣であるが、一體上州人は比較的正直で、率直の長所を持つ人が多いと同時に、其半面短氣で怒り易い短所を持つ人も相當に居るのであるが、梁瀬君には此短所が無く至極圓滿で大局に着眼して事業を經營する長所を發揮せられたので、同君事業の隆昌發展を見るに至つた事と信じます。

梁瀬君と私とは、事業の上では交渉がなく、毎年數度開催の京濱三七會席上で談笑裡にお目に懸かつた次第で、同君の秘話逸話等に付ては知る所が少いのであります。

梁瀬君は現在第一線より退かれて、若い人々に經營を任せ、大局上の統轄をされて居らるるようですが、同君の如く堅忍不拔の意思を穩健圓滿なる人格で包み、事業を健實に發展せしめられた長所は同君の事業に従事せらるる諸君の大に範として學ぶべき事と確信致します。(日清製粉株式會社々長)

想ひ浮ぶ儘の梁瀬さん

石 澤 愛 三

梁瀬長太郎さんの傳記が出来る、お前も昔の同業者の一人として、又、永い交友關係者の一人として何か書けといふのであらう、其刊行會から原稿用紙を送られた、注文をつけられてお断りしては誠に失禮にあたる、サリトテ現存する知友の人物評めいたものをかくのは可成り氣詰りのものである、第一よく存じ上げている筈の僕だが、サテ改まつて筆を執るとなると何をとりあげてよいのか見當がつかない、唯そこはかと、かく想ひ出づる儘を書きつけて見る。

兎に角、自動車業界の梁瀬さんといへば、斯界の第一人者であることは勿論、私にとつて「サテモ久しい」梁瀬さんである、折にふれ、事に臨んで、見聞きした印象を、とりあげるとなれば、随分と資料豊富であるべき筈だ、併しこゝには刊行會の世話人や、所謂、梁瀬自動車學校出身のOBと呼ば

るお歴々がある、これに名を列ねる方々こそ、此機會に存分の感銘や、述懐を披瀝せらるゝであらうから、我等外界人の管見、どは何の價値もないかも知れない、なにせ、アノ精神力の旺盛な闘争本能の熾烈な、梁瀬老のことであるから、御當人にして見ればマダマダこれからの積りで居らるゝに相違ない、ウツカリ戸籍簿面の誕生日から割り出して、なかば人を歴史の部に繰入れるやうな傳記編纂の仕事などは氏にとつて當に苦笑ものであらう、ウツカリ正直に想ひ出話など持出したら必ず叱られるにきまつて居る、併し多年梁瀬陣營のブレイントラストとして其行動を共にして來られた、お歴々から見れば、オヤヂもモウ古稀の祝をすましたのだから此邊で一くぎり過去の思出を纏めて置かねばと考へるのも、誠に道理で、且、又美しい話でもある、現に此企畫の世話人の中に、當然其名を列ねる可き吉崎氏や、相良氏の名前を既にもう見ることが出來ない寂しさを思ふと、却つて其面からも此企畫が時機を失はなかつたことに感謝もし、共鳴もせずには居られないのである。

私が梁瀬さんを知つたのは何でも明治末年のことでもあつたらう、從來三井物産の機械部で、直接取扱つて來た自動車の輸入販賣といふ仕事を、梁瀬個人が引きつがれ、其頃、日比谷公園交叉點の附近、後の三信ビルの近所にあつた事務所を、呉服橋内に移されて、梁瀬商會の看板を掲げられた、それが業界に覇を唱へた梁瀬自動車株式會社の發端であつたと覺えている、當時、私は大倉の日本自動車會社をあづかつて、梁瀬さんのピュイツクを向ふに廻はし、ハドソンをひつさげて對立し、又ダン

ロツブ・タイヤの日本市場を兩分して、互に對峙し、隨分思切つた競争に鎗を削りあつたものであつた、此時分の事情を知つて居る人といつたら今では幾莫も残つてはいないであらう、自分等は實に憎さも憎し、懐しいといふ棋敵に似た感懷を抱きあつたものである。

其時代の競争といへば、今から思ふと隨分馬鹿氣きつたものであつた、カツトブライスは謂ふに及ばず、御馳走政策もいつか其則を越えて、盛んに運轉手の抱き込み運動に憂き身をやつすやうになり將を射んと欲せば、先づ其馬を射よといふ筆法で、今から考へると、冷汗の出るやうな買収運動にまで落ちて行つたものである。こんな有様であつたから自然ソコに運轉手の間にも、梁瀬黨、日本自動車黨といふやうな色別けまで出來て事毎に張り合ふから自然の勢でそこに兩虎を闘はせて、漁夫の利を占めやうとする智慧者も出來て、ヤレ梁瀬がどうした、日本自動車が凭うしたといふ反間苦肉の策も行はれる、終にはお互に戒め合はねばならぬところまでに落ちてしまつた。

業界に始めて組合といふものを作つたのも梁瀬さんや、藤原俊雄さん達の仲間で、私を交へて三人が交互に組合長を勤めた、私的の御交際には、綠會とか木曜會などといふ社交クラブのやうなものを始めて、築地の綠屋や赤坂の三河屋などに、毎月會合し、盃盤の間に斯界の大勢を論難するといふこともあつた、これが後には陰然業界の主動的立場を造りあげ、斯くして永い歲月御交際を續けて來たものであつた、こんな時梁瀬さんはヨク遅刻されたり、行衛不明になられたりして隨分同人を苦しめ

たものだが、今ではどうであらうか、忙がしかつたには相違ないが、梁瀬さんの癖の一つでもあつたのであらう。

前後三十年にも亘る交際の中に、物に觸れ事に當つて常に感ぜさせられたことは、梁瀬さんといふ人はホンに心から商賣人に出來た人であるといふことである、私のやうに生涯士族の商法といふ域を脱し得なかつたものにとつては、それが實に羨望の種で、學んで學び得ざる天賦の才能であるかに見られたのである、其機を見るに敏に其事を斷ずるに迅速で、あく迄自己の信念に固く、如何なる場合にも否は否として明かにノーと言ひ得る人であつた。平素は随分人を喰つた態度で世を渡るやうに見えていて、一朝商賣の事になるとガラツと人が變つた様に眞劍になる、そんな例を私は幾度か見せられた記憶がある。

昭和十年前後の事であつたらう、日本産業の鮎川總裁が、其頃、氣込んで着手されていた自動車製造工業の最初の所産として、ダットサンが市場に出始めた頃の事である、何分最初の生産のこととて機構も未だ充分でなく、社會の認識もなかつた頃とて、其賣行きが頗る面白くなく、製品は工場に堆積する金融は塞るといふ始末で、流石に鮎川さんも堪り兼ねたのであらう、一席業界の一流人物を招待して其意見を聽かれたことがあつた、一體ダットサンは一年でドレ位賣れるであらうといふのが質問の焦點であつたが、誰れもが萬一自分が引き受ける場合の立場を考慮して、的確の數字を答へる人

がなかつたが、其うち業界の宿老の一人が、斯くては果しないと見てか自分の信ずる數字を鮎川氏に答へると、何と思ふてか梁瀬さんはおこり出し、偉い劍幕で其濃厚な宿老を嘗倒し、周圍の人をして啞然たらしめた事があつた、鮎川さん始め列席の人々も一時は白らけ切つてしまつたが、この事なども梁瀬氏に何か深い考へがあつてしたに相違ないので、要するに商賣の事となると何事も願慮する所なく、一圖に眞劍になる梁瀬さんの性格の一つの現はれと見る可きであらう、マダこんな話もある。或る席で同じ鮎川さんが梁瀬氏をつかまへて、例の調子で話かけた「自分は元から梁瀬さんの業界に於ける聲望を聞いていたので、ダットサンの生産が始まると、先づ其一手販賣權を貴下に任せたいと考へて、貴下に相談を持ちかけた事があつた、彼時貴下は一向取あつて呉れなかつた、彼時貴下が私の差伸べた手を握るだけの明があつたら、今頃は梁瀬は當然ダットサンの販賣權を一手に掌握していたであらう」と、遠慮のない調子で非難めいたことを話したのである。ところが梁瀬さん一向ひるんだ様子も見せず「サアそんな事もありましたな、併し私は今日でも其手を握らなかつたことを少しも後悔していません、矢張あれで良かったのです」と見事反撥して向ふ意氣の強い所を示した事がありました、ツマラヌ一場の話ではあるがこんな所にも亦梁瀬さんの性格の一断面がよく現はれてゐると思ひます。

兎に角梁瀬さんといふ人は理想家であるよりは寧ろリヤリストで公式の前には相當我儘の人であつ

たが、一面事實の前には存外謙虚な人でもあつた、前世期の騎士道などは憐憫の眼をもつて見送ることの出来る人かと思ふと、又、一面感傷的になる場合もあつたやうだ。いつであつたか酒の席で葉蔭武士の「死ぬは一定の覺悟」をシンミリ禮讚するのを聞いた事もある。何と言つても梁瀬長太郎氏は日本自動車界出色の第一人者で古い見立てだが、三國志でいつたらサシヅメ魏王曹操といふところであらう。(東京日産自動車株式會社程監査役)

梁瀬氏と私

石 田 芳 助

學校の先輩としての梁瀬氏と久しく親交を續けて來た私は、自動車業界に於ける彼の業績につき語るべき直接の材料を持たない。しかし、今、私自身の經驗を通して人物としての梁瀬氏につき、少しばかりの素描を試み度いと思ふ。

一口に氏を評する時、先づ私は彼を經濟界の名醫と呼び度い、今から二十年ばかり前にさかのぼる當時、金万商店(現金万證券)に入社したばかりの私は、金万社長難波禮吉氏と共に、先輩の紹介で梁瀬氏と星ヶ岡茶寮に會食した。これが氏と知合になつた最初である。たまく、話題が、當時の大藏大臣井上準之助の上に落ち、梁瀬氏は彼の金解禁政策につき不満の意を示し、「あの様な人を永く大藏大臣にして置くのは困りますね。」と云つた。私は未だ經驗にも淺く、又井上氏を學校の講師とし

て非常に尊敬して居たので、金解禁政策を大いによろしいと考へ、その爲梁瀬氏の意見を奇異なものに感じた、が、間もなく、この金解禁繼續中、井上氏は一暴漢の手に倒れ、濱口首相亦相次いで暗殺された。しかも濱口内閣に取つてかわつた、政友會内閣に於ては、すぐに金の再禁止を行つたのである。この爲に日本の經濟界は危機を脱したとも云はれて居るが、眞に名醫の診断は適中したのである。又、七八年以前、私がミシン會社經營中の事、將に會社破滅の状態に至らんとした事がある。私はその苦境を氏に打開けたが、「もう駄目だらう」との絶望的診断を豫想して居た私が、「そこ迄行けばもう大丈夫。」と云ふ、全く意外な語を聞き、如何にはげまされた事か。氏は自らも幾度か死線を越えたと云はれ、自らの身を持つて、「再び起き上る事の不可能と見える状態から必ず新しい道が開けるものである。」との信念を示されたのである、果して私の會社は起ち直り得たのだ。

彼の名醫ぶりにつき、もう一つ述べよう、これは經濟界ではなく、むしろ政界に屬すべき物だが、未だ、戦たけなわなる頃、日ソ同盟が解消され、日本が孤立の状態に立つた時、私は國民の一人としての心細さから、何か將來の見通しにつき指示を受け、なぐさめられる事を希望して梁瀬氏を訪問して、確信を與へられむと期待していた所、彼の見通しは、眞に絶對的なものであつた、いわく「降服するより他に仕方ないだらう。」未だ巷に此の様な觀測を下す者とはなく、此の言葉は私を愕然とさせた。他の者が若しこの様な事をもらしたとしたら非國民の一語の下に笑ひ流したであらう。しかも

其後吾が形勢は漸く下り坂の一途をたどり、遂に無條件降服に到達したのである。今にして思へば、彼の如き人物を多く政界に活動せしめて居たら、吾が歴史も異つて居たかも知れぬ。「覆水盆に返らず。」であるが惜しい事だつた。

一體、彼は一人一業主義の主張の故にか、輝かしい成果を收められたところの自動車業界のみに集中して活躍されたのだが、今から後でも、政界、經濟界を問はずあらゆる方面に、彼の名醫振りを發揮せしめたなら、今後、幾多の困難を乗り越えねばならぬ國家に裨益する處、大なるものと信ずる。

私は次に彼をフェアプレイヤーと考へる。十數年前の事、其の頃は、五・一五事件、滿洲事變等により經濟界は非常に變動がはげしかつた。偶々私が彼に買はせた株式が暴落して證據金は飛び、その上、彼は莫大な埋合せをせねばならなかつた。當時、梁瀨自動車會社は、隆々と榮えて居たが、彼個人としては、その金を即金で拂へなかつた。私は金万商店の社員としての責任上から自動車會社の社長であり、又先輩である、梁瀨氏に對し、「では社長に會つて諒解を得ていただき度い」との僭越な申出を行つたのであるが、彼は即座に承知して、私と共に難波氏宅に赴いてくれた、さすがは梁瀨氏だと敬服し、又感謝したのだが、又、此の時の談話中、難波氏が「貴方の店には、ビエイツクの高級車が何臺も飾つてあるではないですか」と云ふと「勿論澤山ありますが、あれは社のもので、私ではないのです」と答へた、この公私確然たる態度に、難波氏も何の追求もしなかつた。しかも、此の

場合、誰もが、一應はその損金を負けてくれとか云ふのであるが、一言の文句も云はず、次の決算期に完済してくれた彼、個人の配當金の中から、出たのだらう事は明らかである。此の後も、彼は相場をした事があるが、常に自分の資力を越えず、確實な取引を行つた。

又、或時の事、梁瀬氏が自社の株券を、同族以外に分ける必要が起つた時、私は先づ主人の、九州の佐藤慶太郎氏に書面で「市場性はないが堅實な株だから」とすゝめたところ、會社内容を知せてくれとの返事があつた。書類を作成してもらひ、送ると、折返し返事に、内容の充實して居るのに驚いたとあつた。資産の評価が十分の餘裕を持つて行はれ、例へば、賣掛金の處理法にしても、A、B、Cに分け、Aを官廳のもの、Bを一月以内に入金するもの、Cを、二ヶ月以内に入るものとし、他は掛倒れとみなしている。勿論、掛倒れは假想のものである。これ程、整然と處理された内容に慧眼の佐藤氏は、満足し、株を求めた。終戦後、梁瀬氏が、今後の餘生を、いかなる嘘をもつかないで過し度いと言はれた事を考へ合せて見る時、眞に彼を評するにフェア・プレイヤーの精神で貫いた人と云へると思ふ。

未だ彼の思出は盡きぬが、紙面が一杯であるから最後に心から彼の長生を希望し、又今後の活躍を期待して筆を置く。私の拙筆が多少とも彼の面影を傳へ、諸氏の處生上の一指針ともなり得れば眞に幸ひである。(大七證券株式會社々長)

其ものズバリと言ひ得る人

五 十 嵐 正 作

梁瀬さんを最初に私が識つたのは昭和の初期、東京自動車商組合が旺んに活動して居る頃で、それはたゞ同じ業界に梁瀬さんと云ふ方が、G・M系の会社の自動車を扱つて居られると云ふ程度の知り方でした。尤も其後組合にタイヤ部會とか、自動車部會と云ふやうなものが出来て、梁瀬さんの会社からは主として鈴木義五郎さんが見えられ、ことにふれ、折に際して梁瀬さんの、人となりや段々に判つて來たのであります。

そして商組合も昭和十一年に解散して、十五年となり東京自動車加工修理工業組合が出来て梁瀬さんが其の理事長となられたことがありました。又一方總動員法に依つて自動車統制會が出来、其の下部機構に日本自配や地方自配が設立され、私達用品商は自動車部品小賣業組合を作つて、窮屈な統制下に商賣をしておりました。

丁度其頃、戦争も酣になり、何事につけても御役所の言葉の多い時です、警視廳に輸送課が出来て多分、軍部あたりの推進力も強かつたのでせう「トラックの突貫整備」を行ふ必要が叫ばれたことがありました。

即ち其の構想とするところは、東京都内の自動車修理業者をブロックに編成して、其處に移動修理

班を編成し、若しトラックが走行中、故障を起したら最寄りの交番を通じて其の附近の修理工場に連絡するとか、或は電話等を以つて適当な修理工場の移動修理班の出動を依頼すると云ふ方法で、又、修理工場では、その通知を受けると修理責任者は直ちに自轉車とか小型車を以つて現場に急行して修理をする、若し修理不可能の場合は其工場まで牽引して整備をする、と云ふ組織であつた。

これは戦時下に即應した手段であつて、斯うしてトラックの稼働率を増強する譯で、俗にこれらの人々を突貫整備挺身隊とも云つて居た、そして時の間狩輸送課長の主唱で其の結成式が警視廳八階の大講堂で開かれ、後、或日芝公園の勞働協調會館で其の打合せが開かれた、集る者は東京中の自動車部分品小賣業組合員、自動車修理工業組合員、トラック事業組合員と夫々の役員約四百名程で、同課長はトラックの加工修理と云ふことは日に日に重要性を加えて一日、三日、一週間と日増に責任を増している、それで若しも此のトラックが止まるやうなことになる、戦争に敗けることになる、それ故、自動車部分品小賣業の方々は務めて集荷配給に盡力して貰ひ加工修理の方では一臺でもトラックを多く整備するやうに協力をして貰ひ度いと、云ふ趣旨を述べられた。

すると、梁瀬さんは「御説はご尤もと思ひますが、然しトラックばかりが荷物を幾ら積むやうになつても、そのトラックを動かす原動力ともなり、それ自體の主となる人を運ぶ乗用車を先づ動かすことが順序ではないでせうか、それを忘れて、たゞトラック丈が實働するものではないと思ひます、卑

近な例ですが私が毎日働いて居るのも、やはり乗用車で駆け廻るからこそ、出来ることであつて、若し急を要する務めを持ち乍ら、電車に乗つたりテクつたりして居ては決して用事は満足に出来るものではありません、正直こんな非能率的なことはないと存じます、ましてや此頃は交通状態は混沌として居る時ではありませんか（戦時中の状態を謂ふ）御當局では、これまで種々な規則や制限を以つて乗用車が段々動きのとれないやうに仕向けられて来て居ますが、此際こそ、重要な人々に乗用車を或る程度、運用出来るやうにしてあげたら、如何に夫れは効果的であり、有意義であるかは御判りのことと存じます。成程トラツクの整備も必要缺く可からざることには相違ありません、然し乗用車の整備も又緊急を要することでありませう」と、誰に遠慮氣兼ねもなく、ズバリと立派に言ひ切つた、あの態度には尠からず私は愕いた次第であります。

兎も角、あゝも素直に喋られては、誰しもそれに相違がないと頷くのも當然と思はれました、慥かに斯うした言葉に對しては御役所の連中も夫々組合役員も、梁瀬さんには充分の敬意を拂はれた譯であります。

これは私の梁瀬さんを識つた一つの例に過ぎませんが、其後私はパーツ關係の仕事で時折りの會合などで梁瀬さんに逢ふと、その會話の中に、いつも豊かな内外の事情に精通した、あの判り易い言葉に引きつけられて、幾多學ぶ可き點を得たのであります。

斯うして業界の多くの人々が梁瀬さんから受くるものは尠くないと存じます。いや正直、古くから業界に居て、それ程にも梁瀬さんに近い筋でもない私が、直接、間接に教へられるのも、やはり梁瀬さんが業界のバイオニヤであり、長老であればこそと思ひます。(五十嵐自動車工業株式会社々長)

梁瀬長太郎翁と私

猪 子 和 雄

我國自動車界の第一人者は誰？ 梁瀬長太郎翁との答に異議のある人は、おそらくないであらう、それ程翁と自動車とは業界は勿論、業界外の人達にも知れ渡つてゐるが、一朝一夕に此結果が生れたものでないことは、當然であると想像される。そして今日をなされた翁の努力と達眼に茲に更めて私は敬意を捧げるものである。今回翁の傳記が刊行されるに際し、私如きが各界のお歴々と同一に其の一端に稿を寄する如きは、僭越のそしりを受けるかもしれないが、翁の御庇護を得た私の想ひ出話もこれ又意義のあるものを思ひ、敢て投稿をするものである。

私は約三十一年前に初めて翁に面識を得た事があつたが親しく御指導を受ける様になつたのは、昭和十六年日本自動車修理加工工業組合連合會に採用されて以來で、其の間名稱は變つたが仕事は同じく自動車修理業組合の連合會で、約十年間理事長たる翁の許に自動車修理業の爲、微力を盡して來たものである。従つて此一昔前の十年間は數々の想ひ出にみたされていたことを今更感ずる次第で、丁

度それは太平洋戦争の始まる直前から戦時中引續き敗戦直後の多事多端なる時に及び自動車業界中最も薄力だと云はれる反面、其組合員數に於ては、大小取交ぜ約四千五百と云ふ業界最多數を擁する修理業界の連合會理事長として、老軀を提げての隱然たる苦闘を續けられ曲りなりにも整備業を今日に至らしめた、翁の足跡は身近に仕へた私でなければ眞に會得する人はないかも知れないと想ふのは、少々過言かも知れず或ひは之を熟知している方もあるであらう。

梁瀬理事長の指導方針は、終始一貫整備業をして自動車業界の指導權を得る事にあつたが、遺憾乍ら其一端もつかめない現状で、翁にとりては心残りであらうと思ふと共に、實務の責任を與へられていた私にとりては、ざんきに堪へないのは勿論、翁の足跡に汚點を止めた事をお詫びしたい。翁は理事長として決して華々しく表面に立つて活躍されたのでない爲に、或は名譽理事長の如き感を抱いていた人が多數であつたと思ふが、之は誤つた見方であつて大きな抱擁力により専務理事であつた、私の意の如く活躍するに任せる如くして實際は後方より手綱を握つていられたので、私としては失敗しても必ず其結末はつけて頂けると云ふ安心さがあつて、隨分猪武者式の仕事も出来たのであつた、一方永い經驗と達見により適當なる時に大局的な方針を指示せられて、私はその線に沿ふに豫計畫をたてて執務してきたのであつた。翁は又物事の結末をハッキリすることをやかましく云はれ、丁度日修聯の清算事務が空襲の激烈になつた時で、裁判所、登記所等も焼失していた際であつたから未了とな

つても止むを得ないで済んだかも知れないが、飽く迄これをも完了することを私に命じられた爲、私も眞實に生命がけて清算完了をしたものである、故に其際非常にお賞めの言葉を受けて嬉しかつたと共に、かくあるべきを訓へられ感銘を深くした事を、今尙、記憶している、之は翁が非常にノンビリしていられるが如く見えて、實は責任の遂行には實に忠實である事を物語る實例である。一部の人が翁は非常に功利的な性格の持主だと云ふ噂をきいたことがあるが、事業家が功利的である事は當然とは云へ、私の知る限り批判されるが如き性格ではなく、丁度全國自動車整備組合が物資購入資金の不足の爲、銀行より借入をするに際し、翁の個人保證を求められ、私も初めての事ではあり、心配し乍ら、お願ひした處、業界の爲ならばと快よく承諾して頂き借入をしたことがある、其際翁は自分は從來個人的保證等はした事がないがと、云はれていたからこの事實を以てしても如何に翁が整備業界の發展向上を考へ努力していられたかが了解できると思はれる。

昭和廿二年四月に現在閉鎖機關に指定されている全整連の設立と共に、翁は連合會より引退せられ私も同時に引退をする考へで其旨お話した時に、今、君がやめては業界の人が困られる事もあるから引續き止まる様申された爲、私は其後約一年半ばかり留任する結果となり、翁には公的にお別れしたが、其後も、連合會の事務所に來訪せられて安否を尋ねて頂き恐縮している有様で、これこそ恩情の厚さと不變の現れで私の深く感銘している處である。

誠にとりとめのない一文ではあるが、私の追憶の一部で多少なりとも、世人に知られざる翁のよき一面と、整備業界の爲に心勞された事を知つて貰へればと述べて見た。

益々御健在にて我國自動車界の爲に御努力下さる事を心から祈念して此稿を終る。

(協和興業株式會社専務取締役)

タイヤに識見のあつた梁瀬長太郎氏

岩 窪 通

昭和九年の頃であつたと思ふが、私は當時業界の新聞記者をしておつた、ヤナセといふ名は當時その當主の梁瀬長太郎氏の人格的な存在と共に有名であつた。何んの會だつたか忘れたが、赤坂の山本豊村氏を世話人に業界記者連が共同でお目にかゝつたことがあつた。上品な、親しみのある梁瀬さんは、

「中小事業體である我々は相寄り、協け合つて先進國の長を採り、自らの經驗を活かさねばならぬ……」と説かれた、當時の業界は軍部の勃興時代のこととして中小企業の協同による事業の繁榮などといふことも、今程にハッキリしたのではなく、むしろ梁瀬さんの考へ方に、此方が考へさせられたものだつた。

まあそうした第一印象から數回お目にかゝり、超へて私は從軍記者として一年半程渡支し、昭和廿年

の終戦の年召集をうけて陸軍航空本部の兵器部機材課囑託となり、自動車整備の企畫に参劃していた時、現役の中尉連と梁瀬自動車の技術と機能を軍の直轄下に入れて三多摩地方の奥地へ移植する案を樹て、某日公式に交渉に行つたことがあつた。

社長の梁瀬次郎氏が出て來られ種々話の末、會長の梁瀬さん（お父さん）と相談しておくこととなり、歸ろうとしたが、記者時代に會つた梁瀬さんの親しい顔が見度くなつたので、「會長がお出でしたら」と懇請した處、心持良く奥から出て來られた。

初印象のところから十餘年振りで、お會ひしたが梁瀬さんは私の方を御見忘れられていた様であつた然し私に「會ひたい」といふ氣持をいつも起させる梁瀬さんであつた。

更に私の思出は三轉して、私はタイヤ關係に入り、終戦後は縁あつてタイヤの新聞を出しているが此處に始めて最も正しい梁瀬さんを發見して驚ろいたのであつた。

梁瀬さんは、我國にG・M社系の高級自動車を輸入して有名なばかりではなく、タイヤの史上にも又、一頁を飾る恩人であつたのである。輸入車がぼつ／＼盛んになつた昭和の始め、梁瀬さんは、「バーコナン」「ピレーニ」「コンチネンタル」「ミチリン」「フキスタ」などといった様な現代の人達には一寸判らない名前前の外國タイヤを輸入したり、又更に驚ろいたことにはタイヤの再製、修理

を考案され、梁瀬の車庫の一隅で始められたことである。最もその後間もなく安全系でも外人の指導で始めたが、當時先進の米英でも、アンダーソン式といふ修理法が始められたばかりで、日本としては全く思いもよらぬ苦心創案のものだつたらしい。

東京の古いタイヤ屋さんは赤坂の凹凸舎だとか、木挽町の原タイヤ等何れも此の梁瀬出身の人達で、地方のタイヤ屋に至つては更にその弟子クラスが多いのであるが、私の、記者―陸軍時代―再び記者といふ人生のメリーゴーランドに於いて、いつも蔭ながら多くの敬虔な念を興へて止まなかつた「大梁瀬長太郎」さんは屹度私以外の多くの人達に更に―大きな親しみと敬虔を興へているに相違ない、その梁瀬さんが古稀を迎へられたときいて、私は何んだか「偉大なる父」の像に接する様な感激にうたれる。

私は直接に敬嘆に接するの機が少くとも、私の半生をいつも無言で叱正し、育んで呉れた人生教本としての梁瀬さんを更に―長命される様衷心から祈つて止まない。(日本タイヤ産業時報代表者)

二月十一日の記念日

泉

藤

吉

吾が國の交通界に革命兒として渡來した自動車の出現は當時の若い私達にとり、唯一の魅惑でありそれは將來へ、かけた夢であつた。しかもそれが梁瀬商會(今日の梁瀬自動車株式會社の前身)に在

つては、朝な夕なに此の自動車の仕事に携はる私にとつては、其の意慾は、何んとかして此の自動車の本場に足を踏み入れて、これを究めて見たい希望に胸は、ふくらむばかりであつた。

それに既に其頃、日本人の手に依つて此の自動車を國産化しやうと目論見、早くから晴山直吉氏（後の晴山自動車機械工場主）などは渡米してミンガン大學を卒へ、當時ビュイツク自動車工場の研究生として赴いて居り、又、會社からは堀久氏（後年、あのヤナセ號製作に携はつた人）が、フランスに研究に往かれて居たので、私はその機會の來るのを一日千秋の思ひで待つ様な譯でした。

想へば、それは忘れもしない大正九年二月十一日のことでした。丁度此日は紀元節で、恐らく、ふだん忙しく外を廻つて居られる社長（現在の梁瀬會長）も此の祭日はかりは御在宅であらうと思つて私は番町の御邸へ伺つたのです。

當時の私の考へとしては、文明の利器でも、これ程、重寶な自動車と云ふものに對して、なぜ日本では、これが出來ないのか、遅かれ、早やかれ、誰かゞ、これは作らねばならない。然し、此の勉強は何んと云つても本家本元のアメリカに行かなければならない。と云ふ考が一杯であつた。それで社長宅（會長番町邸のこと）訪問早々に、此のアメリカ行のことを御願ひすると、「成程、君の言ふことは判つた、將來ある日本のことを考へると、廣い意味で國家のために人材を養成して置くことは、よいことかも知れない」「尾花君によく相談して行きなさい、G・M本社へも添書をつけてやらう」

と、社長（會長）は淡々と喋られるのでありますが、慥かに此時程、私は、しみじみと自分の姿を、はつきり見出したことはなかつたのです。はづかしい事ながら私は、たゞ目先のことだけしか考へて居なかつたのです。然し、社長（會長）の視野は將來の日本に於ける自動車界にあつたのです、そして國家のために勉強して來い。と云ふことは、何んと見識の深い言葉であつたでせう。私は自身に課せられた責任と使命の重且つ大なるを感じた次第です。

後年、私が獨立をして國產自動車工業の部分品製作者として現在ピストン及びスリーブの製造會社を創立したのは、此の私がアメリカ行きのため梁瀬會長から、あの御教訓を受けた日を忘れずに、其の二月十一日を期してスタートをして居るのであつて、絶えず私の意慾は會社の操業に、また其の生産面に、あの時の社長（會長）の言葉を、不言の中に織込んで如何にかして國家のため、業界のため働きたいと願つて居る譯で、幸ひ、定められた商工省優良自動車認定部分品に第一次より第二次、第三次と優位な合格品とピストンはなり、又スリーブも引續いて優位の合格品となつたことは、皆これ會長の教訓あつたればこそ、此の榮冠をかち得たことであつて、尙一昨年商工省重要指定工場となつたことも、これまた其の餘慶であると信じます。

終戦後、一層アメリカとの交流が旺んとなり、何かにつけて、あちらの知識を必要とする時、嘗て私がアメリカへ勉強に行かせて頂いたと云ふことは、今日如何ばかり、私の仕事の上に幸を與へて居

るか、それを想ひ、これを思ひ、當時のことを追想して、私はたゞ、梁瀬會長に感謝の言葉もなき次第です。(景自動車工業株式會社々長)

こんな秘話もある

近藤 鏡次

梁瀬翁が明治三十七年に三井物産會社に入社して以來、今日まで實に四十有餘年の交誼を辱ふしてゐる。自分としては此度の傳記刊行の企てに何か書いてはと勧められて、その過去の永い年月にあつた事どもを今更らのやうに想ひ浮べて感無量のものがある、殊にその當時を斯うして想ひ起す機會が與へられたと云ふことを第一に悦ぶ次第である。

それに就而も梁瀬翁に纏る面白い方面も多く書くと良いとは思ふが、自分は此際は仕事に關する場面丈に止めて置かうと思ふ。

翁は三井物産の機械部に居て主として潤滑油を取扱つていた、然し自分は營業部に居た、ところが或る朝、早々のこと(たしか大正四年春頃と思はれる)翁が自分のところへ、やつて來て「今、武村さんから、今後物産としては自動車の小賣は止める事にした、就ては君に此の仕事を、やらせようと思ふが、どうだと、云はれたが、良く考へてから返事をしますと、言つて君に相談に來た譯だがどうしたものだらう。」と、云ふので、そこで自分は「これは武村さんが君に非常な幸福を與へられた譯で

是非御引受けをすべきだが、先づ一應は婉曲にお断りした方がよい、すると武村さんは更に勧められるに違ひない、そうすれば其時のストックの代金其他に就ても好條件が與へられるだらう、僕が看ても君以外に一寸此向きの適任者はないと思ふ、」と云つたら、それではと云ふので直ぐ此旨を武村さんの許まで返事に行かれたが、やがて翁は變な顔をして自分の居るところへ戻つて來た、そうして「駄目だ、駄目だ、武村さんは極めてアツサリと、そんなら止し給へと打切られて仕舞つた、アハ、ハ」と、極めて淡々たる態度で話されるものだから、自分は入智慧をした關係上、責任を感じて「それでは此の折角の話も、おしまひではないか、明日の朝早く、武村さんの家へ行つて、あれから段々と考へて見ましたが、どうか、あの仕事は私にやらせて下さいと話し給へ」と、云ふと「今更ら、そんな事は言へない、モウあの事は諦めた」と云ふ、そして「君だつてそんな事は云へまい」と喰つてかゝる始末なので、「僕は駄目だが、これは君に採つて將來の大問題だ、僕の云ふ通り遣り給へ」と熱心に一度かためた決意を翻すため自分は努力した、そして、嫌がる梁瀬翁を、とう／＼それが實行をせしめてたところ、武村さんは直ちに承諾をし、それから急に當時日比谷にあつた物産の自動車部を獨立させて、今日の梁瀬自動車の基を作つた譯である。武村さんは流石に人を觀る目があつた、尙その間色々な面白い話もあるが、此邊で擱筆をする。(電氣化學工業株式會社々長)

梁瀬會長の思ひ出

川 澄 正 保

一、腕の人より徳の人

私が梁瀬會長の膝下に入つたのは昭年四、五年頃の濱口内閣時代、不況のどん底であつた。随つて會長の自動車界三十有餘年の歴史の三分の二以上の期間に亘つて苦樂を共にした次第である。

入社匆々業界は非常な競争で茨城の田舎から檜舞臺に飛出した私は五里霧中で努力するだけ、今から思へば随分と無駄骨を折つたものです、それでも會長は何時もニコ／＼と慈顔其儘で少しも文句を云はれず、親切に指導して下さつたものである。其の柔和な愛情に満ちた態度に感激して何とか成績を挙げ度いと働いた結果が漸く實を結んで、どうやら人並の仕事が出来る様になつたのです、やつぱり會長は腕の人と云ふよりは徳の人で、其の徳の感化によつて、私の如き不徳の者も如何やら一人前になれたと思はれます。此點、私の人生にとつて非常に尊い修業をさせて頂いたので感謝に堪えぬところではあります。

二、いぶし銀の味する人格者

會長は非常に頭腦明晰の人であつて、これを決して外に現はさうとしない人です、何もかも良く知つて居て、それで人の話をジツクリ聽いて居り、時々鋭い批評や指示を與へて呉れると云ふ、實に行

き届いた態度には何時も敬服させられるものです、眞實に濫い底光りのする何時までも飽きると云ふ事のない、いぶし銀の様な人格者です。

三、信頼は信頼を生む

會長に接して何時も感動させられるのは其部下に對する愛情の深さと、信頼する態度でした、一度この男はと價値を認めると決して細かい事を云はずに全面的に信頼して、其男の全能力を發揮せると云ふところに眞似の出来ない風格がある。

人の長所を伸ばさせると云ふ事は云ふに易く、實に難しい事です、普通の者は如何しても自分の思ふ様な型に、はめ様とするのが人情であるが、そしてそれに合はない人間は疎んじると云ふのが普通は使用者側の常であるが、會長には其の弊が全くなく、常に人の人格を尊重し其長所、才能を束縛することなく伸ばして行く所に妙を得て居る。

四、眞實一路の會長

仕事に疲れて歸へて來て、會長の前で話し出すと、何んとはなしに、などやかな氣分になつて云ふに云はれぬ安らかさ、慰めを受けるは不思議な位である。

この意味で會長は吾々社員の慰めの泉とでも云ふべきもので、人に依つては話合つて居る内に重苦しさを感ぜざるもの、壓迫を感じるもの、不快を感じさせるもの等を色々種類の人がある。

然しそうした中でも眞實に落着を感じさせ親しみと温味を感じさせ、更に慰めを與へると云ふ人は極く珍しい者です、そうした珍しい人の中で最も吾々に大きな慰めを與へたものは會長だと思ひます。斯く會長に對する思ひ出は湧然として盡きませぬが紙數に限りがあるのでこれで擱筆致します。

「梁瀬さん」と癖

神谷正太郎

私が梁瀬さんを識つたのはゼネラル・モーターズ在職中のことである。その當時から自動車業界に於ける「ヤナセ」として君臨されていた。卒直に云つて終始一貫ヤナセはゼネラル・モーターズ會社の車に専念して來られたのであるが、今日再びビュイツク車の販賣權を獲得せられ、あの華かなヤナセ時代を再現されつゝあることは誠に欣ばしいことである。

不幸にして私には梁瀬さんを充分語り得る程御交際も深くないが、梁瀬さんには梁瀬さん個人に伴う癖が連想される……人間には誰しも何等かの癖があるものであるが……と云つても別に嫌味があるのではない。梁瀬さんは人と談話中に指先で自分の眉毛まゆげをなでつけられる癖があつた。その指先には唾をつけられたかどうかまでは憶えていないが、兎に角梁瀬さんから受けた印象の中でこの眉毛をなでられる癖が深く残つている。

そして話しは常に慎重そのものであり、又思慮の深いものがあつた。外國人相手でも何等臆すると

ころもなく堂々と自分の見解を披瀝するといつた感じで、やはりそこからはある偉大さが感ぜられるのであつた。

日本の自動車業界と梁瀬さんとは一體をなしているといつても過言ではないが、特に梁瀬さんと共に永年その會社の常務の要職に在り活躍されている大澤さんも忘れることの出来ぬ人である。立派な人格と圓滿な性格の所有者で、一面この人にしてこの社長ありと思はしめるものがあつた。

又不幸にして逝去された清水さんも非常な手腕家として内外の業界に識られていたし、梁瀬さん本來の偉さを、これ等の人々がその兩翼となつて推進し、今日の大をなしたことも確かであつたらうと思つてゐる。

何れにしても梁瀬さんは持つて生れた強固な信念を以て一貫して來られたし、將來も亦この信念で君臨されてゆくであらうと思ふ。

名實共に業界のナンバーワンとして常に我々に敬服される人である。

(トヨタ自動車工業株式會社常務取締役)

自動車界の大御所たる梁瀬さん

小 林 光 榮

自動車界の大御所たる梁瀬さんを語るに際し、まづ氏が業界の人になる前の思ひ出から述べたいと

思ふ。今からざつと三十五年程前の話であるが、私のよく通つた日比谷大神宮前の撞球場へ、毎日四時頃になると必ずセールス靴をさげた青年紳士があらはれた。この紳士は甚だ無器用で球をつく手さばきの拙いことは私と同じ位であり、忽ち下手なものは下手同志、知合ひとなつたのである。この紳士こそ、當時日比谷公園前にあつた、三井物産の自動車部に同居の三井礦油部でバルボリンモビール油の販賣に従事されていた、若かりし時の梁瀬さんであつた。即ち其頃の自動車部の部長としては、我國自動車界の草分であつた吉田眞太郎氏がおり、アメリカの自動車を扱つていたが、歐洲の自動車の倒されて、あまり業務は振わなかつた。そこで三井物産としては澤山のストックをもち、手を焼いてゐる中に吉田氏は退陣し、その後を梁瀬さんが引受けたのである。

時代は大正三年であり引受けた自動車は一九一四年式のビュイックであつた。時、恰も自動車界が歐洲車より米國車へ轉換せんとする革命期が始まらんとしたところへ、梁瀬さんが業界に飛込んで來られたのであつた。人の運といふものは、そう度々來るものではないが、梁瀬さんにとつては、それが來たのである。大正三年といへば當時世界大戰の最中であり、この年に日本は對獨宣戰をなし、青島攻撃が開始され、我國でも初めての自動車隊が編成された。翌大正四年は大正天皇即位式があり、世界戦争のおかげで、日本商品は夥しく海外に賣れ、國內には異常な好景氣の時代が到來し、到るところに成金が發生した。それらの成金は今でもそうであるが、自動車を矢鱈に買ひ始めたものである。

しかし當時外國より一臺も自動車は入つてこず、山をなしていたビュイックのストックは、梁瀬さんが引受けてまもなく羽が生えて飛ぶ様にして、忽ち賣り切れてしまつた。

此頃の梁瀬さんの大當りは、全く無人の野を行くが如くといふ、形容詞がピッタリくる位すさまじいものであつた。これから梁瀬さんは一大陣容をかため、呉服橋際に日本一大きな店舗兼工場を建て、進出し、梁瀬自動車株式會社と改稱し、米國より大正五年には一九一六年式のビュイック自動車を輸入し、愈々、日本全國へ大々的に販賣をするに至つた。其頃又米國よりスミスといふ飛行家が來朝し、青山練兵場で宙返りの妙技を見せ、地上では豆自動車の競走をやつて、日本の人達をアツと言わせたのであるから、米國製自動車の好評は益々高く、梁瀬さんにとつては勿怪の幸となつた。

かくの如くして、梁瀬自動車は幸運なる第一歩を踏出し、遂には世人をして、ビュイックと云へばヤナセを連想せしめるやうになつたが、當時氏が社屋高く、ヤナセと云ふ文字を冠した自動車の形を浮き現はし、夜はその周圍を赤色イルミネーションでかこみ、積極的營業振りを見せた事には、さすがの業界人も驚いて、是れから梁瀬さんに一目置く様になつた。

其後大正十二年の大震災の年に日本橋通りに鐵筋で、ライト式の豪華なオフィスを設け、芝浦には東洋一のボデー工場を建て、米國ゼネラル・モーターズ日本總代理店として活躍され、米國製自動車を日本に於て全般的に利用せしむる動機を作つたのである。こゝに於て米國の自動車製造家も積極的

に、東洋に進出するやうになり、先づフォード會社が横濱に組立工場を建て日本で組立て、販賣に乗り出し、引續き大阪へはシボレーが来て同様組立販賣を開始し、愈々我國自動車界も百花撩亂時代を迎へたが、其時既に氏は自動車業界の大人物になつていた。人の成功には運と智力と努力が不可缺の要素であるが、決してそればかりでは成功は覺束無い。天の時と地の利と人の和が第一條件である。

我國に自動車が利用せられてから五十年、その草創期から關係せられた人は決して尠くありません。其の數ある業界人の中で自動車王と呼ばれて尊敬せられる人は、梁瀬長太郎さんを措いて外にはありません。氏は上州に生まれ、たしか一ツ橋出身と承つて居る。氏が自動車界に身を投じた時期はまことによかつたことは既に述べた、かくの如き好機をつかみ得たのも進取の氣象に富む梁瀬さんなればこそであるが、氏の發足された場所もまた日比谷といふ日本の中心地であり、新事業に進出するには絶好の地であつた。日比谷公園には現今とは異なり四季の樹木草花が美しく咲き亂れ、人の氣持を自らなごやかにしたことは、當時梁瀬さんの事業發展に大いに力となつた人の和といふことと、此のうるはしい自然とは、何か關係があるように思ふ。氏が人材に恵まれたことは有名であるが、之は一つには氏が人を遇すること厚いからである。常に人には笑顔を以て接せられたが、此の點、絶対に怒つたことのないといふヒンデンブルグと好一對である。

これから私は梁瀬さんの美點について少し述べたいと思ふ。その一つは梁瀬さんが自分ばかり儲け

すに人にも儲けさせるといふことである。梁瀬自動車がビニウツクを日本全国に賣り擴めてくれたので自動車部品商は非常に潤ほひ、一九一六年式より二四年式頃迄の部品を我々輸入業者が米國より輸入して供給した金額は莫大であつた。私もそれによつて儲けた一人である。梁瀬さんは部分品の儲かる事位百も承知されて居つたのだらうが、人にも儲けさせた邊りが、こせつかない立派なところだらうと思ふ。今一つ感心した話があります。

慥しか昭和十二年の頃でしたが、その頃日本が世界中で一番自動車税が高い爲めに、自家用車の賣れ行きが悪くなり、組合で減税運動を私が委員長でやつた事がある。其時私は梁瀬さんに色々相談をして、先づ府會を牛耳る大御所の人たちのところへ陳情することになつたが、梁瀬さんは自分の代理に鈴木義五郎さんを私に付添わしめて其の上自動車を提供してくれ、我々は毎日それ等の人達の邸宅を訪問して頼んだ爲めに、二年間續いて自動車税が減税になつた。是れは全く梁瀬さんの蔭の力が効を奏したのである。かような蔭で身錢を切つてやつてくれる人であればこそ成功もされたのであると思ふ。今から考へて見ると梁瀬さんの足跡は業界にとつて偉大なる功績である。今や自動車はわれわれの經濟社會の生活に大きな使命をもつて居り、自動車の發達は一國の産業開發に絶對的な要素であり又文化のバロメーターであることは今更言ふまでもない。現今自動車の最も高度に發達した、米國が世界第一の文化國家であることに思ひを致す時、我國に於ても一日も早く道路の整備に併行して自動

車の整備充實を圖り、勞働に、事業に、時間を短縮させることが必要である。此の度の戦争では自動車界も致命的打撃をうけたが、之が復興のためにも又、日本復興のためにも自動車の輸入が切望されている。この時に我々は、未だ業界の第一線に立つて働いて居られる梁瀬さんが、我々の此の希望をば必ずや實現してくれるものと信じている。(小林光榮株式會社事務取締役)

梁瀬のおちさん

松 田 慎 三

不惑の年を超えたわたくしにとつて梁瀬のおちさんは矢張り梁瀬のおちさんである。わたくしがおちさんに始めて御目にかゝつたのは大正の中頃であるから、既に三十年の星霜をけみしている。姉の結婚式が日比谷の大神宮で行はれたとき、そのおなこうどが梁瀬のおちさん、おばさんで、當時四十になるかならないかの御年配であつたが、キリツとした風貌は少年の心にも深く印象付けられた。

それから十五年わたくしが學校を出で、職に就き人生の伴侶を求めたとき、今度はわたくし自身の前に梁瀬のおちさん、おばさんが、おなこうどとして出現された。それは一月の雪の降つた寒い日であつたが、その御元氣な朗らかな聲は未だに耳朶に残つてゐる。

また、十五年激しい世の移り變りに伴い、わたくしは奇しくも、自動車の價格統制事務にたづさわることゝなつた。係の者が梁瀬自動車を調査して、その報告を聞いたこともあるし、會社の提出書類

を拜見したこともある。そんなことで会社の營業のある部分がこの統制の影響を受けたことも想像にかたくない。併し、おちさんの姿は決して役所に見えなかつたし、会社の人も出向いて來られなかつた。恐らくそれは拙い、わたくしの仕事を深く理解された結果であつたらう。

おちさんは一昨年古稀の祝いをされたが、その御元氣な姿は三十年前と少しも變らない。何時までも御壯健で、わたくし共、若い者に御指導を賜はりたいと願ふ次第である。(中小企業廳公報課長)

フイアットと私

門 馬 孝 吉

想えば私も梁瀬氏の工場で自動車の手ほどきを受けた一人であつた……

大正十三年に學校を出ると間もなく體を壞して暫く靜養していたが、その間暇つぶしに當時やつとはやり出して來たばかりの鑛石のラジオを組立てたり解説書を書いたり、自動車の本もいろいろ買ひ集めては讀んでいた。もともと卒業の論文も設計も内燃機關を選んだせいか、どうしても自動車の方に強く興味をひかれていたことは事實だが、しかしそれはただ面白いといふ程度でしかなかつた。それが専心やつて見ようといふ確かりした機縁を作つてくれたのが梁瀬の工場であつた。縁といふものは妙なものである。

丁度その頃溜池に店を開いた葵自動車は長兄が關係していたお蔭で出入するようになっていたので

しぜん自動車を見たりいじつたりする機會は多く、従つて自動車に對する興味もますます峻られては行つたが、この時も單に興味が深くなるという程度で、一生涯自動車をやらうといふまでにはなつていなかつた。葵の宣傳部長をしていた増澤頑氏（音樂評論家の増澤健美氏）の紹介でモーターの山本豊村氏と編集長をしていた本間香に會つたのはそれから間もなくで、そんな關係から雜誌に投稿している間に、梁瀬氏にフィアットの新型が入つて賣出すことになつたが、その取扱法をまとめて本にしてみないかといふ話が持ちあがつた。昭和三年だつた。私としては少しでも自動車に接する機會が多くなるので喜んで引受けることになつた。

南傳馬町の梁瀬氏の本社で宣傳係長の飯沼久三氏に會つたのはそれから間もなくで、いろいろ打合せをし向ふから來た英語のパンフレットを借りて來て早速とりかかつた。大體それを譯せばよいのだが、イタリア語からの英譯本であるせいもあらうし、だいいち自動車の性能構造など十分に呑み込んでいない所があるため、意味の通じない箇所が澤山ある。飯沼氏に聞ひてもどうもはつきりしないので、工場の技師長堀久氏を紹介してくれた。そこで早速芝浦の工場に同氏を訪ねて行つた。あの大きなガランとした薄暗い倉庫のような感じの工場の片すみの事務室でナツパ服をキチンと身につけた堀氏は心よく會つてはくれたが恐ろしく無口である。こちらからの質問に對して必要なだけの返答をポツンとする以外、餘計のことは一切しゃべらない。しかし決して意地が悪いとか、威張つているとい

ふのではなく、質問すると幾分ドモリ加減の口調で説明するのだが、その説明が一つ一つ要領を得て居り、ハッキリしていてあいまいなところが全くない。大したものである。さすが梁瀬氏の技師長はエライものだといつくづく感じた。

参考資料や圖面を見せてもらい、現物について説明もしてもらった。工場の規模や設備からいつても葵の工場などは比較にならぬ程大きく且つ整備され、いかにも自動車工場らしかった。こうしたことが二度、三度と重なると、しぜん堀さんとも昵懇になつて、無口な同氏も少しは冗談口をきくようになり、私も自由に工場にも入り勝手にいぢり廻わし、便宜もいろいろ計つてもらえたし、自動車の構造や機能もだんだん分つて來た。面白味もますます湧いてきた。當時市電(都電)を濱松町(?)で降りてガード下から芝浦通りはまだひどい凹凸の道で雨でも降つたら大變なドロッコになつたものだが、少しでも分らない所があると直ぐに出掛けて行つた。當時私の下宿は巢鴨にあつたので工場までは相當に時間がかかつたが、そんな遠いことなどは何とも思わなかつた。別に勤め先がある譯でもなし、私も一生懸命だつた。

日に夜を繼いでのことな勉強が二、三ヶ月續いて漸く原稿がまとまつた時はうれしかつた。それから一ヶ月ほどして本に出來上つた。それが、「ファイアツト五〇三型乗合貨物自動車操縦法」である。昭和三年十一月發行である。奥付の編集人は飯沼氏の名儀になつてゐるが、實際の筆者は前記の通り

私で、校正は本間香氏が擔當した。

菊版六十四ページのこの「操縦法」は今見ると妙なところも澤山あるが、幸いに非常な好評を博して増刷した。各社でも自分のところの車の取扱法を書くのに参考とするから譲つて欲しいといふ話もあり、飯沼氏も大変喜ぶし、私も大いに面目を施した譯だつた。飯沼氏からも續いてスチュードベーカーの取扱書を頼まれた。私自身もオカゲで非常な勉強になり、自動車に對する興味もいよいよ深くなり、自動車とはとうとう離れ難いものになつてしまつた。堀さんにはその後一、二度おめにかかつたきりであるが、親切に指導していただいて自動車に對して一生の機縁を作つて下された御恩は終生忘れられない。想ひ起すごとに感慨の新たなものがある。

梁瀬社長はその頃、既に隆々日本の自動車界の大立物として縦横に活躍して居られた當時であり、技術屋のホヤホヤの玉子みたいな私などには何の用事などあらう筈もなく、そのときはおめにかかる機會はなかつた。従つてファイアット取扱書の件などはご存じないことと思つている。その後私が日刊自動車新聞當時と自動車日日新聞社長時代に一、二度おめにかかつたことはあるが、特に深い知遇を得るといふ程でもなく今日に至つている。しかし氏が自動車界の大御所として業界のために貢献されて來た數々の偉大な御功績に對しては、常に衷心から萬腔の敬意を表している一人であり、更に二十數年の昔、その工場で自動車の最初の手ほどきを受けた私としては常に感謝の念で一杯である、切に

御健在を祈つて已まない。(日刊自動車出版部長)

御 縁

永 田 秀 吉

相縁奇縁と云ふ言葉があるが、同じ日本人と生れても一生の間に物心、何れかで交渉を生じる相手方——例へば血で、つながる父母兄弟妻子其他の親族にしても、學ぶことで、つながる學友にしても職業で、つながる同僚取引先にしても、主義思想でつながる同士にしても、その數は知れたものである。

明治の末、私は田舎からボツと出て來て兜町から神田錦町の中學校へ、電車へ乗るなどの贅澤は許されぬので徒歩で通つた。道順は先づ吳服橋を渡つて、三菱ヶ原を突切り、大手町へ抜けるか、吳服橋の手前を右折、一石、常盤橋を渡つて櫻に圍まれた印刷局の脇を通り神田橋に出た。大手町通りでは時折、其頃、東京で、たつた一臺と云はれた大倉さんの自動車が威風四邊を拂つて滑るやうに走り去るのを見掛けた。

人の乗る車と云へば田舎道をガラ／＼引張る人力車しか知らぬ私は、その自動車の後影が見えなくなるまで口を開けて見送つたものであつた。

兎もあれ、日に二度づゝ吳服橋へ出る私の眼に何時の頃よりか梁瀬商會の文字が恐しい迫力をもつ

て映つた。それは店の看板に書かれて居たのか、板圖に書かれていたのか、記憶がハッキリしないが字が圖抜けて大きかつた。大きいのみでなく、梁瀬と云ふ漢字のキチンとした字劃の興へる感じが如何にも印象的であるし、ヤナセといふ讀音も、美しく韻律的に思はれたからであらう。だが、これがあの天國の乗物みたいな自動車の店だとは夢にだに知らなかつた。

電車賃も持たぬ田舎者の中學生にとつて自動車などは恐らく縁なき品物だから無理もないと御容赦願ひ度い。

さて大正六年に學業を卒へて證券の實務に就いて間もなくのこと。私の同郷、且つ一ツ橋の大先輩なる陸井幸平氏が神奈川の肥料貿易商から株屋に轉じておられ、梁瀬さんも其店とは普通の顧客以上の密接な間柄なることを誰に聞くともなく知つた。株式相場の變動に興味を持たれたゝめか、友を思ふ同窓愛に出たものか、ビジネスマンとして證券市場の實際に觸れる必要ありとせられたか、日本の兜町も幾年かの後には、必らずあのアメリカのウォール街と米國實業家との關係の様に唇齒輔車的にたか、將又、資本主義の發展は結局、今日の様な株式民主化の時代を出現すべきことを先見せられたか、その何れなるを知る由もなかつた。

學校出たての若僧にとつて、大先輩であり、また此の大先輩の客筋であり、貿易界に活躍するビツグマンは依然として、私等の近づくべくもない高嶺の花でしかない。

だが、第一次大戦で急膨脹した株街にもソロソロ乗用車を買ふ人が出来、私の勤めている山二の主人片岡も其一人であつた。値段やら型の眞實用性なども考へた結果ビュイックと決めた。勿論、梁瀬商會の手からである。それからは私も急用の場合などチヨイ／＼乗せて貰つた。そして此時が初めて梁瀬さんの肌を手を觸れた思ひであつた。

關東大震災の際は私のとこの親爺さんも組合委員長かなんかで忙しく、此頃は車はカデラックに出世をしていた。

その御蔭で、あの危急と混亂の裡に在つて、重要品の運搬やら怪我病氣で路傍に行惱む人々を助けて上げて感謝され、車を持つことの有難味がシミジミと判つた譯である。

風雨幾年、世の中はスツカリ戦争の渦中に陥入つていた、或日勤めから歸へた私に妻が一葉の名刺を渡した。此方が角に移つて來られましたとの話、名刺の主は御子息次郎氏である。角と云ふのは半藏門のお濠端で、正面に皇居の翠緑を望み、左に英國大使館を控え、右に水光の彼方、日比谷、銀座の雲烟を見晴らすといふ景勝の地である。

それからは角へ、お訪ねしたり、陋屋へ御見えになつて戦争の前途觀やら、文學談やら、財界の情勢やらに就て話は盡きず、然乍ら交遊十年の感があつた。

然し、斯うした時でも、世間は戦争騒ぎに血眼になつてゐる或日、番町の父が夕食を共にしたいと

のお話だつたので、此日始めて梁瀬邸にお伺ひをした。

そして初めて銀髪豊眉、名匠の利刀もて一氣に刻んだかとも思はれる力強い線で圍まれたお顔の梁瀬さんに御目にかゝつた。當時既に戦争も經濟界も下り坂で敗色、蔽ひ難きものあり、自づと話題はその等のことから、やがて過ぎし日の思出に移つて行つた。舌頭に上る人々は何れも知名の士のみで内容は經驗に基く示唆に富んだ事柄が多かつた。

夜間空襲が激化した一夜、番町界限も愈々危くなりましたとて、老奥様の手を引かれて自分達が避難して居た防空壕へ立寄られた。空には煌く閃光と爆音、あたりは一面に立こめる火煙の渦の中で、お見掛けした、凜として優たるお姿は今も尙、一幅の繪卷として私の眼底にある。

終戦後はビジネス的な用も幾分あつて、度々高濱町や芝浦へ御伺ひしている。お話の中には必らず海外のことが含まれ、別れてから話の筋などは忘れても、瞑目一番すれば、太平洋の浪の音が響いたり、ヒマラヤの雪峰が眼前にチラついたり、ブロードウェイのペープを踏む靴のステップが耳を離れない。

梁瀬大人は私にとつて、そんな人である。中學生時代の梁瀬商會の四文字——株屋の番頭時代のビユイツク、關東大震災のカデラツク、令息次郎氏との交遊、空襲の夜の想ひ出、そして今、私は、國敗れて山河在り、その山河には石灰石、充ち満ちたれば、これによつて日本再建の一助たれかしと、

懸命の努力を拂ひ、大人にも種々御相談を申上げている。

佛者は觸合ふ袖にさへ一脈の所縁を觀んじた、大地に委する一片の落葉にも、絶ち難き宿世の因縁が宿るとか、梁瀬大人と私の、つながりに投じた一塊の石灰石、果して、どのやうな模様を織出すかそれは明日の課題である。(山二證券株式會社取締役)

ゼスチュアの自然な梁瀬さん

中 島 亮

私が梁瀬氏を親しく識つたのは昭和十五年の頃、東京自動車加工修理工業組合の理事長をして居られた時で、福島氏が専務理事で、私は理事として其の任にあつた頃と思ふ、それからと云ふものは、修理組合のことに就き、それやこれやと親しくする機会が多くなつて、いつも私は梁瀬さんは、自動車に生れて、その自動車と終生を共にする人だと、云ふ感じを深くしたものである。随分我々の業界には此の道の達識者も居るけれど、恐らく梁瀬さん程、自動車を愛撫する人はないやうに見受けられる、そして其の風格と云ふか、梁瀬さんには常時、自動車が付き纏つてゐるやうに見受けられるのである

それに梁瀬さんは、世の中のあらゆる事を充分に識り盡して、その表現が、組合の理事会とか何んぞの會合に、如何にも自然に出て來て、組合員の中で、或る猛者などが急所を突いて來ても、そ

れを軽く受け流す手練の技と云ふか、あの態度には、梁瀬さん以外には出来ない藝當と感心することが多い。

即ち、こうしたことは世の中の事は勿論、業界の甘い辛いことも充分に身につけているか、出来ることで、いつも其のゼスチュアは子供に嚙んで言ひ含めるやうに納得させることなどは、私をして、あすこまで人間は出来なければならん、我々はまだ／＼子供だと、自身深く感ずる譯である。

それに仕事の面で何時も感心することは、梁瀬さんの持論には必らず相手をして、なる程そう云ふこともあると云ふ事を、よく呑み込ませると云ふことである。

週れば古いことだが、嘗て統制時代、役人は統制のためのにする統制を常としていたが、梁瀬さんは「我々民間人は商賣のためになる統制をして貰はねばならぬ」と、飽迄これを主張したことなどは梁瀬さんだから出来た藝當で、そのことは反対せんがための反対ではなく、梁瀬さんの喋られたことには、慥かにもつともなアイデアが含まれていた。

これは例の修理組合に對する企業整備で主務官廳では、なんでも、かんでも一本になることを主張して企業合同を指示したところ、梁瀬さんは「同じ集るなら中心を先づ決めて、それから部門々々で専門にやる様な方式を取つたら如何」か、と説明を試みたら、集つていた人々は最初は、この案を笑つたけれど、成程これは一つの行き方であると感心をしたことがある。

即ちこの説明は圖解の如く、中心を決めて周圍に夫々の専門業が、これを擔當したら、ホントウの企業體としての意義があると、云つた譯で、斯うしたことは業界人に委せて貰ひ度いと、言ふことで、たしか、これは東京都に於ける企業整備に關する説明會の時と記憶している。



斯うして自動車の整備工業も今日では相當内容も充實して昨年は認定工場も決まり、整備業者はたゞ認定された丈ではプラスにはならない、仕事の面も必然的にプラスにならなければならぬ、悉くは商賣になるやうにと、梁瀬さんが往年努力された事業を引繼いで仕事を今日進められているのは何よりも業界のために感謝に堪えないことと思つてゐる。

それから、これは日本經濟復興協力會の専務理事が言はれたことであるが、「大きな會社を辭めて後、個人の方で成功したのは三井出の梁瀬さんしかない」と言はれたが、此の言葉には慥かに私はうなずけるものである。

想えば梁瀬さんは、我々業界の偉才であると共に殊に整備の面には努力を終始された方と云ふことが明瞭に判る。(東京日産自動車株式會社専務取締役、全國自動車整備工業組合連合會長)

梁瀬學校の思ひ出

西 山 東 治

去る日、山崎氏より梁瀬長太郎傳を書いて見たいから、賛成して貰いたいとの申出であつた、それには梁瀬學校の在校生も卒業生も中途退學生も放校生も皆んなでつち挙げ様との事だつた、小生は其の中でも落第生だから其の語る資格なしと斷つたが、落第生の資格で書けと云われたので快諾した。落第生でも最初に自動車學を授けて貰つたのは、何と云つても、梁瀬學校である。之れは今以て感謝して居る。

大正十三年四月以來今日迄、二十六年間自動車で飯を喰はして貰つて居るのも、梁瀬學校の御蔭である。今でも七、八人の卒業生、在校生、落第生取りまぜて「つらぬき會」の名稱のもとに年に一、二回の宴會を催して、當時を偲ばせて貰つて居る。何回、會つても當時の話しで持ち切りである。つい先達も或る場所で催して面白かつた。先づ老校長の話題は何時も斷然トツプである、老校長と云ふのが適當かどうか判らない、と云ふのは二十六年前と殆ど感じが變つて居ない。濃い眉毛、白髪童顔、私は大正十一年學校を卒業と同時に、横須賀海軍工廠飛行機工場に約一年を勤務して、其の年の十二月一日仙臺工兵隊へ入營した、翌十二年九月一日は御承知の關東大震災であつた。其の爲め横須賀に歸れなくなつたので、田舎の小學校の代用教員を十一ヶ月やつた。其間、同窓の鈴木徳捷君が

梁瀬學校の在學生だったので、鈴木君を通して入學願書を提出したら、無事許可があつた。翌年（十三年）四月目出度く入學した譯である。其の時の入學生で現在校生の田島要次郎君が私より一日遅れて入つて來た、一日でも早く入學したので今でも先輩顔をして居るのも右様次第である。入學當時は震災直後の事とて非常に多忙であつた。私の自動車は此の時からである。梁瀬はG・M系統の車、カデラツク、ビュイツク、或はスチンドペーカー、アースキン、ファイアット等であつた私として始めて自動車に觸つた。取り分けビュイツクは有名であつた、ビュイツクの梁瀬か、梁瀬のビュイツクか、と云われた程である。私は約四年半位御世話になつた譯であるが、私が大阪のG・M會社へ就職した時、ビュイツクは神田の山田自動車へ肩替りした事があつた、然し其の賣行きは餘り香しからぬ様に記憶して居る。其の後再び梁瀬へ戻つて來た梁瀬がビュイツクをやれば元通り賣行きが旺んとなつた所詮此のビュイツクは梁瀬のビュイツクである。どうしてこんなにビュイツクと梁瀬が離れられないものか、終戦後も既に戻つて來て居る、誠に不思議である。それで老校長の顔は何んと云つてもフォア・ビュイツク時代から一九五〇年型迄の歴史である、不思議なビュイツクの顔である。

私はこのビュイツクの顔から賞められた事がある、確か大正十四年か昭和三年頃かと記憶して居る芝浦工場の火災の時であつた。いち早く馳けつけて車輛の搬出をやつた。それは同僚の鈴木君と山崎氏（現東港園支配人、元細川力藏氏の運轉手の方）と三名は必至になつて搬出した、勿論他の人も居

たが大部分は此の三人であつた様に思ふ。吾々の活躍によつて可成り車輛が難をまぬかれた。そのため、賞められたのはこの時である。慾を言ふと賞め方が少々足りなかつたと思ふ。人間は大人でも子供みたいなるものである、賞められると嬉しいものだ。

又私は老校長の話しの上手な事には感心している。何時だつたか、原乙壬生少將が獨逸より歸つた時の話しを電気俱樂部でやつた事があり、其の時の司會を老校長がやつた。態度と云い要領のよい紹介の言葉と云い實に静かなものであつた今でも忘れられない。

昭和二年頃だつたと思ふ。軍納入の探照燈の車でスベリーデュプレツクスの公式試運転で芝浦工場より國府津迄の往復運行を行つた。往路は無事だつたが、歸路に田町驛附近で自分の全然知らない事故を起した、之れが原因で私は爾今運轉する事を諦めた。其の後大阪の日本G・M會社へ行つた、勿論田中常三郎氏のもとで、約四年半位勤めた。昭和六年吉崎良造氏のダットサン商會で田中さんと二人で御つかえした。此處で田中さんは技術面を擔當され、私はサービスをやつた。ダットサンの設計變更をする爲めに、芝浦の工場に御世話になつた。結果が非常によろしいので好評を博し賣行きが凄かつた。それでこれが現在の日産横濱工場の建設の因をなしたものと思ふ。

どう考へて見ても、梁瀬自動車は日本一の自動車會社であり老校長は日本自動車界の最大の重鎮である。一昨年古稀の祝をされたのであるが吾等若者を凌ぐ程元氣である。益々御健康で御活躍され在

校生、卒業生を御指導される事を御願ひ致す次第である。(自動車再生協會専務理事)

吾が國自動界に於ける梁瀨長太郎君の業績について

尾 花 信

梁瀨君が我國自動車業界に君臨されて、盛運隆々たるものあるは、一朝一夕にして成つたものではない。その間幾度か、起伏、波瀾重疊、時に隆替なきにしも非らざりしが、君は何時如何なる難關に遭遇しても、隱忍自重と、不屈不撓、寧ろ、勇氣百倍、積極策をとり、能くその荊棘を開拓し、その障碍を克服突破し、以て今日の大成を齎らしたものと信ずる。

君が頭腦の明晰、意思の鞏固、熟慮斷行力とを兼備せる商才を、山本条太郎氏に認められてから同社輸入の自動車と共に、ベルヴォリン油の販賣を委囑されたのが、抑々の濫觴であつて、之が君の今日自動車と油類販賣に關係せられた因縁である。

君が斯業界に船出された當初は、前大戰の初期、然も、我國の自動車數は僅々二、三百を出でざる頃であつたが、君の慧眼よく自動車の將來に矚目して、M・B・K輸入にかゝる米國製の優秀車の販賣方を、M・B・Kから繼承して、大正四年五月梁瀨商會を創立し、完成車の輸入と、併せて寧ろシヤシー・オンリーを輸入して我國技工の技巧を利用し車體の國産に着想、その製産を企圖して、之が

實行に直進した事は、當時としては猪突の嫌なきにしも非らざりしを、君は斷然之が實現を敢行せられた勇氣は嘆賞すべきものなり。

斯くて君は本據を丸ノ内呉服橋際にトし、本店と工場を併設し、一方發祥地の日比谷に分工場を存置し、又、他方大阪、名古屋、博多、横濱、京都、大仁、仙臺、松山、及び京城に支店、出張所を設け、大支店にはサービス工場を併設する等、全國に亘り、堂々たる店網を張つて、兼て夫々の方面に囑目しおきたる練達の士を抽き、スタッフに据え、之に元氣潑刺たる青年社員を配し、君は席暖まる暇なく、東奔西走して、彼等を手足の様に驅使して、君がM・B・K時代、多年體得せる商戰場裡に於ける商略と戰術を遺憾なく實踐したるため、赫々たる戰果を擧げ得たるは當然のことなり。

隨つて當時、なを幅を利かしていた、自家用馬車や、お抱ひ人力車などは、輕快滑るが如く街路を疾驅する自動車に置換えられ、馬車も、人車も程なくその影を消したことは、如何に世人が自動車の利便に目覺めたかを知るに足らん。この文明の交通機關を發達擴充したる功績は君も亦其一半を負ふものと云ふべし。

あ。ら。ゆ。る。方。面。に。精。力。絶。倫。で、古稀を超えて、尙ほ矍鑠壯者を凌ぐ、元氣もて戰後混沌たる斯界のため、縦横無盡に活躍され、聊も疲勞を覺えざるやに見ゆる君の比倫稀なる氣力は、正に驚嘆に値するものあり。我自動車業界に斯る非凡の偉才長老の存在して、大正、昭和を通じ、常に先達を買つて

號令され居らるゝ事は誠に力強き限り、君は實に我業界の至寶と謂ふべきものなり。

尙、最後に君が我國自動車普及に擧げられた功績と同時に、その製造に先鞭を付けた元祖なることを見通すことが出来ない。この車體製作に、直接工場擔任者としての私は、三十餘年前の當時を回顧して感無量のものがある。

抑々車體製造の搖籃地は、日比谷公園正門前帝國ホテル隣接地に、簡易な木工場で動力は單に木工機械二、三を動かしたものと申せば大體想像が出来る、工員は大部分大工、指物師夫れに銅壺や膳椀塗師や、宮師、馬具などを寄せ集めたもので、現今の如く機械加工、プレス加工や、流れ作業によることなく、加之、塗裝は吹付作業とは兎と龜、以上の遲速ある漆仕上、又ヴァニス仕上で、悠悠工事を進めながらも、箱型幌型を合せ月産二十臺以上を産出したの、は全く夢の様な心地がする。特に驚嘆すべきことは、君の獨創になる車體を木骨木皮で構成し、且つ塗裝は美術學校の六角教授の指導を受け、漆施工の磨出仕上をしたことで、車體は外國製のものはその構造鐵骨で組成し、プレス作業による金屬板を張るものとは異り、木骨（用材は主として樺材と鹽地材）、木皮（主として桂材朴材）を使用したので、惡路を疾驅し、風雨日光に曝されては、骨組は弛み、側板は披裂し、天井板は雨漏する始末で、工場は新造と併行してその修繕で大多忙を極めたことを記憶する。關東大震災後、乗用車（軍用の幌型は相變らず國産）は輸入に仰ぎ、國産車體は、バスとトラック、並に特殊車丈けが繼

續されて、その構造仕上も大に進歩し、今日輸出にも耻かしからぬ域に達したのは喜ばしい。

今や高濱工場の充實と戦災から復興せる芝浦工場や、各支店の新装成つて新進氣鋭の方々の經營によつて、益々發展し社運の隆昌期して俟つべきものあるを確證す。

君も壯年期活躍時代には、時々胃腸病に苦しまれたこともあつたが、今や全く健康を恢復し、社長の激務を後継次郎君に渡して第一線を退き、幾分身邊餘裕出來たのだから、今後は悠々晩年を楽しみ餘生を送らるゝ様希望に堪えない。

M・B・K以來四十年の知己、加之、商會から會社と三十餘年君の傘下に終始した自分は、老いて益々元氣な君を祝福し今度君の傳記刊行の舉あるを聞き茲に梁瀬君と君の事業に對して敬意を表し一言を呈す。

以上は君の廣汎なる事業中大部については他に其人あるべく自分は自己關係の車體製造についてのみ所感を披瀝するに止めた。(株式會社田尻特殊車體製作所社長)

所 感 片 々

小 川 菊 造

多年世の爲、人の爲に盡瘁され、今日の梁瀬自動車株式會社を築き上げた梁瀬長太郎氏が功成り名遂げて世人の信望を一身に集めつゝ、茲に古稀の壽を迎えられたのを契機として惜氣も未練もなく其

事業の萬般を嗣子次郎君に譲られたことは言ふは易いが、仲々出来るものではない、茲に氏の人格と御家庭の圓滿さが窺へるのである。

氏は識る如く信念の人であり、奮闘努力家であり、又温情豊かな人でもある。即ち、これがあつたればこそ、梁瀬のビユイツクかビユイツクの梁瀬かと、人にうたはれる様に成し得たのである。

それに氏は各般に亘り目先の目える方で、此の點では我々同業者でも第一人者と言ふても敢て過言ではあるまい。

これは一つの例であるが、去る頃の話に、「梁瀬さんは自動車の商賣も上手だが、仲々不動産で儲けることも上手で、寧ろ自動車よりは不動産で儲ける方が多かつたらう」と。

それから地方樞要の地には大抵目抜の場所に巨費を投じて立派な支店出張所を設けてあつた。これは如實に、その業を立證して居るものと思ふ、且又、東京本社にしても、芝浦の廣大な工場其他を觀ても、^{ひと}一手、^{ふた}二手、否十手、廿手の先を見越して諸設備をしてる事には誠に敬服に堪へない。

今や、一念發起、會長となつて第一線を退かれ大乗的見地に立たれて業界の發展に寄與したいと言ふ素志は洵に以つて吾人の學ぶ可きであり、又眞に茲に梁瀬長太郎氏がある所以である。

幸ひ氏は古稀に見えぬ若さと健康矍鑠として壯者を凌ぐものがあるから、一層の自愛をされて益々國家再建の爲め奮闘される事を願つて止まない。(日本自動車株式會社々長)

其の先見と英斷

岡野悌 二

今回、梁瀬長太郎氏傳刊行會より、其の趣意書を送られ熟讀して大いに同感共鳴此の舉のあるを喜ぶ所である。

回顧すれば、老生は、同氏が明治三十七八年頃に東京高商を出られて間もなく、三井物産會社へ入社せられた時、同社名古屋支店長をして居た時で、同氏に初めて面識を得たのは、其後十二、三年同氏が、梁瀬自動車株式會社を創立せられた前後であつたが、其の以前、大正四年頃に氏は三井を去られ、獨立して吳服橋畔に梁瀬自動車商會を開かれた事を聞き驚嘆したのである。

所以はまだ自動車が東京以外には一向見られ無かつた頃なので、其れも其の筈老生が三井倫敦支店から本店に轉ぜられた明治三十二年暮、歸朝の半年程以前に、倫敦でも初めて實用せられ構造も運轉技術も幼稚の爲か、所々の街中で「エンコ」して居たのを目撃し、且つ馬車に慣れた倫敦兒は、其の形貌を評して首なし車などと嘲り居つた程であつたが、其翌年夏頃、時の専務益田孝さんが或る日、岡野君一寸と麾かれたので、後に附いて「ペランダ」に行くと言ふと益田さんは、下の車を指してあれを知つてゐるかと言われ、はい、あれは昨年私が倫敦出發前に初めて見ました、何と云ふかと問はれ「モーターカー」と申しますと答へたら、實は横濱の商館主が乗せてやると言ふて待つて居るので、之か

ら一緒に行くと言われた程で、明治三十三年に初めて日本へ来た位で、未だ十二、三年経たぬに東京以外日本の狹隘な都市道路では其發展程度が疑問であると思ふて居る際に、同氏が三井を去つて獨立營業される、其勇氣に驚いた次第である。後にて山本条太郎さんの賛助後援もあつたとの事を聞いたが、今日になつては、其の先見と勇氣英斷に敬服する所である。

大正四年の末老生は東京に來り山本条太郎さんの御手傳をして居つたが、大正八、九年頃、梁瀨自動車株式會社の設立せらるゝや、山本さんは大株主となられ、老生も僅かの責任株を持ち、監査役となつて、茲に親しく梁瀨君と識ることが出來たのであるが、氏の溫厚にして、而も勇氣先見の明事に確實熱心なる性質が總てに顯れ、今日の成果を擧げられたるものと信するのである。

事業の變遷成果等の一々に就ては、氏の口述並に氏を最も知れる世話人諸君が記述せらるゝ由なるを以て重複を厭ひ老生は贅筆しません。

本書は存生の氏が傳記なれば今後の春秋に於て尙ほ國家に貢獻せらるゝ事業の多々ある可きを想ひ氏の健康を祈る者なり。(元、梁瀨自動車株式會社監査役)

「ひぐらし」と綽名つけられる努力家

岡

壽

今度、梁瀨會長の傳を刊行すると云ふことで、私にも昔の想出話を寄稿せよとの世話人各位より御

申越ですが、私に向つては實に感慨無量、今より三十六年前、三井物産自動車部當時よりのエピソードが澤山ありますので、是非此際其一、三を御披露したいと思ひます。

私が梁瀬會長に隨身したのは、大正二年で、當時會長は三井物産株式會社の自動車、並に礦油部の主任で、會長が三十五歳、私が三十三歳の時でありましたが、此の自動車部並に礦油部が、誠に成績の揚がらない處から、遂に物産會社も匙を投げ、大正四年、此の自動車並に、礦油の仕事を買却すると云ふことになり、茲に梁瀬會長が大英斷を奮ひ、主任の位置を放棄し、直接物産會社より此の仕事を受け持つことになりました。

店舗は日比谷公園前三信ビルと愛國生命の間でありまして、一階が自動車部、二階が礦油部で、梁瀬商會として開業しました。自動車部は相良亮吉氏と私が擔當し、外に工務員職工が十人程、又、礦油部に五、六人の職員が居りました、それが今日の梁瀬自動車株式會社の昔の發足であります。會長が、當時、三十代青年の美望の的たる、物産會社の主任と云ふ位置を放棄して、當時全く見込の無い仕事を以て、獨立すると云ふ大膽なる決行に對しては、世間では寧ろ暴計の様に考えられ、非常に驚いて居りました。然し此の自動車の商賣に就ては、私は明治三十五年に米國に参りまして、自動車の非常なる發展振りを體驗しましたので、會長の獨立に對しては双手を舉げて賛成した次第であります。物産會社も非常に同情して、自動車並に礦油の輸入も薄利で引受けて呉れるし、一方會長の非常なる

努力により、案外、好成绩を揚げ、三年目に築地精養軒で盛大なる祝賀會を催することになり、之れと同時に（大正九年）梁瀬自動車株式會社並に梁瀬商事株式會社（鹽油部）創立の運びになりました。當時世間では、會長は、只、幸運で成功した様に申しましたが、私は、會長は勿論幸運も伴ひましたが、當時非常な努力家であつて、其努力が幸運を生み出した譯であると思ひます。會長の努力に付ては、面白いエピソードがありますから、御披露致します。

梁瀬商會當時社員が會長のことをいひと云ふ^{あだな}綽名を付けました。いひと云ふ^{せみ}蟬は日中は決して鳴きません、暮方午後五時頃になると御承知の通り、カネカネカネと實に美音を出して鳴きます。何故、彼様な綽名を付けたと申しますと、梁瀬商會當時會長は、梁瀬商會の興廢の分かる、一六時期でありますから、非常な努力で、日中は各方面に活動せられ、店に見える時間は毎日同じ様に、午後五時頃で、其れから職員に向つて、A會社の金は未だ入金せぬか。B會社の金は届かないかとか、あの金、この金、と云ふ具合に、夕刻五時頃に見えて、カネカネ、カネ、カネと云はれるので誰云ふとなくいひと云ふ綽名を付けることになりました。此の綽名が、當時の會長が如何に、努力せられたるかを證明するに足ることと思ひます。其れから會長は店の要談が済みますと、自分の室に入り、夜十時頃翌日の作戰計畫を考へるので、時には十二時頃になることもあります。之れが毎晩のことですから、今の人には、とても、想像が出来ることではありません。會長の今日の成功の裏には、以上の様な梁

瀬商會時代の會長の努力があつたことを知る者は、私以外に二、三の人が知る位のものにて、特に今日私は特筆大書して御披露申上げたいのであります。

扱て自動車部が大正四年梁瀬商會創業と同時に、物産會社より引取つた品は、ビュイック一、一九一三年型約五十臺、一九一四年型約六臺の在庫品がありまして、之等の處分に非常に困難して居る際であり此の持越品が澤山ある爲に、一九一五年の新型は注文臺數僅かに二臺と云ふ悲惨な時期でありました即ち一ケ年に僅か二臺注文してビュイックの代理權を確保した譯であります。處が當時歐洲に於ける第一次世界大戰が大正四年頃より始まり、大正六年には非常な物資缺乏を來し、従つて當時アメリカと日本は物資供給の立場となり、各會社増資増産成金續出と云ふ有様で、従つて自動車の賣行一時に激増し、大正六年には一九一六年型ビュイックを百臺づゝ、三、四回注文すると云ふ好景氣に相成り此の景氣が五年も續きましたのですから、當時、既に梁瀬自動車株式會社も動かす可からざる大木の如く發展したのであります。

昔の想ひ出話はまだ澤山ありますが、此の邊で筆を止めて置きます、終りに望んで會長の長壽を祝し事業の益々發展せられんことを祈ります。

吳服橋時代の想出

折 橋 勇 治

私も月給を貰つて自動車屋に育てられた一人である、大正七年から關東大震災にかけ、八年間初めは修繕係から新車組立係、後に販賣係に勤めた。

此の時代の梁瀬サンはこんなに長生きされる程の健康體とは思へなかつたが、古稀になるも、尙、業界の第一線の御世話されるとは全く芯が御丈夫なのだと思心させられる。又事業に對しては時に盛衰あつたが、實に先見の明あり、且、大膽にて而も粘張り強いので、よく今日の足蹟を印せられたことは業界の偉人と思はれる。

吳服橋々畔鐵道院と向い合つて博覽會式の建物（屋上に電飾にて自動車とヤナセの文字輝く）ながら、隣の本建築の高田商會と並んでビュイツクとチャルマーの競争（此の高田商會は數年ならずして没落）一九一八年ビュイツクの赤のワイヤーホイールにカットアウトの雄姿は此の頃の想出の一なり。永樂町倉庫の増築後茲でクライスデルやオールアメリカンの組立や、修理の苦心も想出の一つ。それから芝浦工場完成の一大躍進、此の工場が彼の大震災に残つて大活躍しシボレー車等の豫約受註で御客の手で開函から組立迄やつた。あの張り切つた往時のこと。又、二十四年式四氣筒幌型ビュイツクの物凄い賣行きも忘れ得ぬ想ひ出である。第一次世界大戰の佛國野戰病院自動車隊の組立納入車や

シベリヤ出兵時代、輸入のホルト・カタピラー・トラクターの組立試運転も今昔の感に耐えぬものである。

麻布の假宅での新年子供會や、逗子の納涼會や、芝山内紅葉館の夜宴等は、在社時代の何れも楽しくも懐しい思ひ出である。退社後の山王幸樂の招宴及び最近古稀の賀筵に御招待は共に社員に對する温情の現はれにて、深く感銘する所で、心から私は會長の天壽の永からんことを希ふ次第である。

(折橋商會主)

初代店限雇員？

大 井 壽 郎

昭和の初めの頃あこがれの自動車。ヤナセ自動車會社芝浦工場を訪ねた、別段喰ふに不自由もなかつたので、現管理部長の仰せのまま一日一圓の日給で入社「爾今日給金壹圓也ヲ給ス」と云ふ短冊を貰つた、勿論この時の喜びは大變で、自分自身では、この日から大ヤナセの職員と自負していたので夢中で働いた。友人先輩の指導は常に感激していたが、當時この會社の階級的色彩の濃厚なことにも驚いた、入社して間もなく店限雇員なる名稱がついていた、これは讀んで字の如く、店限りの雇員と云ふ意味で、會社の見習でも、社員でもなく、一つの小部門の雇人にすぎなかつた。これは小生の如き大きな希望を抱いて入社したものには一大鐵鎚を受けた感じだつた。處でこの文字は誰れが考へら

れたものか、未だ調べてもみないが、現會長か、當時の工場長尾花さんか、何れにしてもこの語源は三井物産であると思ふ。特別芝浦工場扱ひの者に對してのみの代名詞であるが、ヤナセ在學中相當優秀な成績を修め様としても、この代名詞が随分禍ひもしたことは事實だつた。

ことに面白いことには、昭和七年だつたか、偶々、小生に縁談があつて、ある日相手方の伯父なる人が（田舎では有名の人）はる／＼田舎から當人の現地調査に知人である、元大澤常務を日本橋の本社に訪ね、小生をどんな人物かと尋ねたが、常務はそんな人は居らんよと云ふ譯、いやそんなことはないと云ふので、當時の職員録をあさつたが、更には何處だらうと云ふので芝浦に電話され、漸く部品係に居つたと云ふ様な次第で、随分恥しい思ひもし、屈辱も感じたが、當時を偲び荆妻と共にほゝえましい思ひ出のひとつまにもなつてゐる。この店限雇員も馬車馬式によく働き滿十ヶ年にして學校を出して貰つた、今にして會社の達令に此の肩書に依る後續者のあるやなきや、何れにせよ、會社を卒業した後、會長の小生を認めてくれたのも非常に嬉しかつたが、それにも増して、砂ほこりで有名な芝浦の母校が、名實共に一新された事を考へて、益々盛んな會長の元氣な姿をより、一層喜ぶと共に、その力強さを感じ、愈々多幸をお祈りしたい。（株式會社エービー商會社長）

會社在勤三十餘年の感想

大原 當一郎

一日、社長梁瀬次郎氏より「僕と會長（梁瀬長太郎殿）より部長（私）と會長の方が永いんだから何か書け」とのお話があつた。全く自分は大正六年の春、今の會長殿に御採用願つてから今日まで三十餘年の永い間會社に御厄介願つて居り、今では會社の役職員を通じ勤続年數の上では最古參者となつてゐる。

然し自分は梁瀬商會入社後月餘ならずして大阪支店に轉勤となり同支店に十數年、續いて横濱支店に數年といふ具合に地方勤務が割合に永かつたので、自然會長殿のお膝下を離れていた期間が多かつた爲め知らぬ事柄も多いのであるが、斷片的に思出の二、三を綴つて責をふさぐことにしたいが、此の拙文或は却つて會長殿の徳を冒すことなきやを慮れるのである。

社長はよく人に言はれる、「自分の會社には三つの誇るべきことがある、その一は會長が健在で居られること、その二は永年勤続者が多數居ること、その三は若手社員中に優秀な人材の多いこと」このお言葉は實にその通りであると思ふ。會長殿は既に昭和二十三年古稀の壽を迎えられたのであるが今尙矍鑠として元氣壯者を凌ぎ毎日會社に出勤せられて重要なる社務を總攬されているのである。

會社は社長の非凡なる才能によりうまく經營されてはいるが、一面會長の存在は對外的には會社の

絶大なる社會的信用を高め對内的には全従業員の結束と安心感とを齎している。

又、今會社の二十年、三十年といふ永年勤続者は皆會長の薰陶を受けたもので、いづれも會長のためにと忠勤を勵んでいるのであつて、これは世間にも珍らしいことだと思ふ。

會長の商會主並に社長時代を通じ一貫したる社員の訓育方針はたといお忙しい中であつても業務に關する事柄については如何なる下級社員の話と雖も丁寧にお聞き下さつて御意見をお聞かせ下さるので、皆敬意を表して居つた。去りとてさて仕事上の命令をお出しになる場合とか又は仕事上のことをお尋ねになる場合には決して下級社員直接にはなされず必ず當該部長になさるのが例でそのため部の秩序も亂れず、責任者を尊重なさるといふ點誠に敬服に値するものあり、よき御方針であつたと思ふ。會長は又自分の會社であつても、公私を混同せず總て會社の規則に従つて事務處理をなされている旅費其の他の引當の假拂をした場合爾後一週間以内に整理することゝなつてゐる會社の規則に従い直ちに精算をなされ、決して所定期間以上に放任されるやうなことはなかつた。これらは多數社員に範を示された譯である。

昭和五、六年頃會社はゼネラル・モーターズとの間に意見を異にし、永年取扱つて來たビユイツクカデラツクをすてて新らしいスチュードベーカー、レオ、ファイアツト等を扱ふことになつてから毎期收支償はず加へて財界不況となつたため當時大阪、名古屋、福岡、横濱、京都、廣島、松山等に支店

出張所があつたのを會長は斷然整理の方針をきめられ、大阪、名古屋、福岡の三支店を残して他の店は全部一齊閉鎖をなされた。これは世間體を飾つては到底出来ないことで、會長の果斷よくこれをなし得たのである。同業中にも不振のため同様整理を要すと思はれた會社もあつたが、此の英斷がなかつたため後に相當痛手を受けたとのことであつた。

會長は運のよい人だと世間に言はれている。シベリア出兵、關東大震災、滿洲事變、大阪風水害等何か事件の後には必ず自動車が飛ぶやうに賣れたり儲かつたりしたので左様言はれたのだが、必ずしも運のみではなく、會長の精魂込めた努力のあつたことを思はねばならぬ。

第二次世界 戰の時、戰局の進展に連れて自動車の輸入は止まり、ガソリンの消費規正は強化され會社も重大時期に直面したが、會長は率先工場技術者を督勵して天然瓦斯、メタン瓦斯による代用燃料装置の完成に成功しその代燃装置の宣傳賣込にはこれ又、會長自ら御得意の勸誘に出られる等並々ならぬ努力の甲斐あつて會社の營業不振もこれにより救はれたのである。

又、終戦後會社は平和産業に轉換したもので、高濱工場に於ける自動車ボディの製造、芝浦工場に於ける一般自動車の修理は相共に微々たるもので辛じて會社經費をカバーするに過ぎず每期無配の状態であつたが、機を狙つて居られた會長並に社長は遂に昭和二十三年九月、ゼネラル・モーターズの代理權獲得に成功せられ以來、月を逐ふて自動車の輸入數量も増大し昭和二十四年下期には二割配當を優

に断行し得た程、會社は隆盛となつたのである。そして此の輸入業務を行ふために必要なので、芝浦工場に接続して一部二階建の五百餘坪の新サービス工場を建築完成を見た。

此の華やかなる輸入業務の蔭にはまた權利獲得に至るまでの會長の御苦心がある。會長はその契約が調印となるまでの數ヶ月間、更に新サービス工場建設資金の劃策より工事竣工に至るまでの數ヶ月間、相當に永い期間御老體而も不自由を意とされず芝浦の梁浦寮（會社寄宿寮）に起臥され、休日以外は自宅にもお歸りにならずにこれらの仕事に専念されたのである。今や數百名の會社従業員が世間に比して割合安泰に勤務し得るのは此の會長の隠れたる御努力の賜物で感謝せねばならぬ所以である。（梁瀬自動車株式會社取締役經理部長）

どんな時にも梁瀬の商魂

鈴木 義 五 郎

震災のあつた、その翌日の九月二日もお晝に近かつたと思ふ。丁度其頃私の家は田町にあつたので芝浦工場が近かつた。それで私はあのドサクサまぎれの最中、會社に行つて居た、然し多くの會社の人々は肝心な乗物が止まつて仕舞つたり、家が焼けたり壊れたりして殆んど出て居なかつた。

朝から歩いて來たと云つて梁瀬會長と、ふだん別懇にしている前山久吉氏（たしか此の方は當時内國貯金銀行や徴兵保險會社に關係があつたと思ふ）が芝浦の工場の方へ訪ねて來て、「梁瀬君のここ

ろに自動車があるだらう、あつたら、どうしてもビュイックが欲しいのだ」と、然し乍ら藪から棒のやうな言葉であつた。

私は「ありますけれど、御存知のやうな騒ぎで職工も運転手も誰も出ておりませんから、今すぐと申されても差上げられません」と、大變味氣ない言葉だが、そう御返事申上げると、大變な見舞で「俺と梁瀬君の關係位は君だつて識つてゐるだらう、俺は今、とても忙しいのだ、君にそんなことが裁量の出來ない筈はない何んとしても都合してくれ」と、たつての頼みなので、私は内心これは相手が悪いと思つて、工場を見渡して居たら、丁度其處に居合せたのは、當時會社の品物を汐留驛で荷扱ひをしていた「久さん」をみつけたので、それでは、お伴しませうと、ビュイックには前山さんを乗せて私が運轉し、シボレーは久さんが運轉して、麴町下二番町の前山さんの御宅に出掛けて行つた。

そして早速、お金を頂き度い、と申しますと、「冗談じゃない、君の會社の梁瀬君と僕は別懇ばかりでなく、君等の識らぬ關係もあるのだ、それに此のドサクサの最中、第一、銀行をたつて、あいて居ないじゃないか、話はあとでつけるから車は置いて行き給へ」と、叱られるやうな始末なので、私も敗けて居ず、「然し私は會社の者で、梁瀬長太郎でもなければ、従つて社長でもありません、私共の會社のものは、どんな場合でも品物を御客様にお渡した場合は其の代金を頂戴するやうに躰けられておりますから、そのお金が頂戴出來なければ、自動車は持つて歸る丈のことです」と申上げたら、前

山さんは、しげく私の顔を見られ、因つた奴だ位には御感じになつたことでせう。「それなら三井銀行の小切手を書いて遣るから、それを持つて車を置いて行き給へ」と、奥の方に行きかけたので、私はまたすかさず、先きの言葉の云ひがより上、「冗談じやありません、あいても居ない銀行の小切手を頂いたところで、紙切れ同様です、キヤッシュを頂きますせう、現金揃えて頂ければ車を置いて行きますよ」と、云つたら、「一體ビュイックはいくらなのだい」との間ひ方です。「五千五百圓です」と返事をする、と、「致方のない奴だナ」と云ひ乍ら大變に困つた顔をされて奥に這入つて行きました。

應接間であつたと思ひます、玄關先からのぞくと、前山さんと幾人か會社の方が大聲で喋つている聲が聞えます、金庫に現金はいくらあるか、君はいくら持つているか、百圓だとか、たつたそれ丈か、……斯うした言葉が切れくりに響いてくる裡に、前山さんは兎も角、茲に二千九百圓の現金を持つて私の前に現はれて來ました。

そして此のお金を私の鼻先に差出して「これを持つて歸り給へ、ビュイックは置いてけよ」と言ひ棄て、又奥に這入らうとしましたから、私は「これは二千九百圓ですね、これ丈のお金ではビュイックは置いて行けませんからシボレーを置いて行きます」と、車の方へ行かうとしたら、また偉い叱り方です。

それでスツタモンダの揚句漸く「お金が出來ましたらビュイックと何時でも交換する」と言ふ堅い

御約束をして前山邸を辭去したのが、午後七時頃でした。考へると、たしか午後二時頃から五時間も此の一臺の車を取引するのにかゝつた譯です。

それで、此の前山さんから頂戴した二千九百圓は會社に持ち歸えつて、焼跡にある金庫が開けられず、それに現金も足りなかつたため、早速社員の小拂に廻して、みんなが現金のない時に非常に助かつた譯でありました。

それから此年の十二月の或る日、其頃日本橋の方にベラツク建の事務所があつたので、其處に居た私を前山さんが訪ねて來られて。

「いや、あの時は随分怒つて君を困らせたが、あの自動車のお蔭で自分はエライ儲けをしたよ、如何にも自動車を持つて居ることは、たいしたもので、鎌倉の別荘の方に移してある事務所へ行つたら、東京の方へ出掛けるのに、どの位助かつたか判らなかつた、それに商賣屋の車を仕立てると、鎌倉へなんか送り放しでタツタ一回で百五十圓も取られるのだ、お蔭で重寶しているよ、今頃僕の友達は三千五百圓出すから譲つてくれと、たびたび頼み込むが、あれは僕の大切な記念品だからネ、

それに君、今度ビュイツクがアメリカから來たら早速賣つてくれよ」と、大變な御満悦で御禮を云はれたことを憶えて居る。(元梁瀬自動車株式會社取締役自動車部長)

恩情の人、梁瀬會長を思ふ

柴田 瞭 三

始めて梁瀬會長様に御目に掛りましたのは、約三十二年前の大正六年九月、私が梁瀬商會に採用せられました時ですが、爾來前後約二十年間同社に御厄介になりました、當時の梁瀬商會は創業後日尙ほ淺き時でしたから、會長様もまだ不惑の年に達せられず、社員連中も皆青壯年の元氣潑刺の人ばかりでした。仕事の方も自動車の輸入販賣と云ふ當時の日本では最新事業の一つでありました、私が入社の際の憧がれとも申しますか希望と申しますかは、實に同社の事業が吾國最新のものであり、其の指導者が新進の會長様でありました。

入社後直ちに大阪支店に参りましたので、日常直接の御指導を得る事が出来ませんで多少残念でしたが、會長様御來阪の折、私が上京の時には常に親しく御目に掛り何かと御鞭撻御指導を得ましたので、追々と人並に成る事を得まして誠に感謝に堪へません。

會長様が如何に商才に優れられ、如何に全般の指揮統制とか、社員に配置に、非凡の腕を揮はれたるかは、三十有餘年に亘る同社發展の跡を回顧しますれば一目瞭然にて皆様の良く御存じの處です、戦前永く日本自動車界の中心として斯界に絶大の貢献を爲されし事は皆等しく認むる處であります、以上公の面に於ける會長様の御活動の事共を申しますのは此の邊で止めます。

それで、以下私が在職中は勿論其の後に於て最も感激しました事の、一つ二つを申上げて見たいと存じます、第一は會長様が稀に見る温情に富める人格者であると云ふ事です、數多き社員の一人一人につき良く面倒を見られました事は實に想像以上であります、一例ですが多くの青年社員に對し御多忙の處を會長様御夫妻自ら媒酌の勞をとられ社員の生活安定の基礎を固めしめられました、私も其の一員であり成家三十餘年の今日も、尙ほ、御目に掛る機會ある毎に色々と處世上の御指導を賜はり深く感謝して居ります。又此の様の例もあります、其れは梁瀬會社には永年勤続の社員が非常に多數居らると云ふ事です、移動性の多いのが一般社員の常ですが、會長様の温情ある人格を慕いて一生を會社の爲に托するの氣持になりし爲と思ふのであります、梁瀬會社では退職後の舊役職員の多數が在社當時と同様常に同社の隆昌發展を祈り、何かの機會には共に喜び共に憂を分つ事、即ち會社を思慕する情は、所謂母校たる梁瀬學校を思ふ梁瀬學校卒業の同窓生の感あるのも、皆會長様の徳に依る處と深く信ずるのです。

以上申述べました事共は、私の如き古き世代に屬する者の言葉ですから、或は現代の如き勞資對等の時代の若き人々の中には一寸受入れられないかも知れませんが、私は只自分等の時代に於ける最も進歩的温情的の人格者として尊敬致します會長様を思ひ、其の一端を申述べさして頂きましたに過ぎませんから、何卒此の點は御諒解を願ひます。

一昨年秋、梁瀬會長様の古稀の祝と共に御奥様の御還暦の祝のありし日、多數の參會者の中に於て特に私共梁瀬學校同窓生が如何に感激と喜びに満ちて參列し、心から御祝申上げました事でしたか今其の喜びを新にして此の拙文を書きました處です。

今や梁瀬會社は御令息様が社長となられ、昔し私が始めて同社に御厄介になりました當時の會長様の如く、新進の良き指導者として元氣いつばいに活躍せられ居り、其の御事業も終戦後、いち早く従前の米國ゼネラル・モーターズ會社との關係を復活せられ、有名なる「ビュイツク」自動車を始め各種自動車の日本總代理店として、着々戦前に數倍する規模に進められ居らるる現状を見らるる事は、會長様としての御喜び如何ばかり大なるかと御察し申して居ります。

どうか會長様御夫妻に於かせられましたは、益々御健康にて長壽を重ねられます様に、梁瀬會社としては、益々御發展御繁榮にて永く吾等の母校としての思慕の中心として榮へられん事を切に御祈り申上げます。(五輪商會社長)

梁瀬學校の追憶

會

根

貞

今回、梁瀬長太郎傳御刊行の盛學に當り、所謂、梁瀬學校出身者の一人として數へられました事は誠に光榮に存する次第であります。

往時を回想しますと、餘りに數多き事共が交々浮び上り、何から筆を染めたら宜しいかと取纏めに困難を感じる程であります。

何分にも私にとつては社會生活の第一步を、梁瀨自動車株式會社（株式會社に改組直後）に振り出しましてから以來、ズツト自動車界に祿をはんで居りますが、實に基礎教育はこの梁瀨學校で受けたわけでありまして、未だ前途にもえた一介の青年の頭には好いにつけ、悪いにつけ初めて接するものめづらしさに充滿し、是非選擇の暇等あらう筈がありません丁度白紙がいろいろな色に染まつてゆくやうなものでありまして、考へますれば梁瀨社長はもとより部課長並に先輩諸氏より受けた御薰陶には唯々頭が下るばかりであります。

中でも終生忘れる事の出來ないのは、彼の大正十二年突如として起きた關東大震災火災のとき、折柄米國よりの歸途にあつた社長の英斷により、いちはやく手配されて幸にして厄を免れた芝浦工場に揚げられた、G・M・Cトラックの大群が復興院その他の復興再建事業に大活躍をした事でありましてG・M・Cの性能の優れていた事にもよりませうが、貨物自動車の重要性が現實に立證されて自動車販賣上に大きな役割を占めるに至つた一のきつかけとなつた事は争へない事實でありませう。

これも梁瀨さんの業界に盡した功績の一つだと考へます。（日産自動車販賣店協會事務局長）

待望の會長傳記に寄せて

齋藤 央

終戦四年、ぼつ／＼色々の事が軌道に乗つて來た事は、當時のあの苦惱混亂から何時立直りが出来る事やら、豫想さへつかかなかつた事を思へば、誠に有難い事で、明日に希望を持つて努力する張合がついた事は結構な事と存じます、幾變遷の自動車界も戦前に増して華やかな展開がある事容易に想像される所です。

今回業界に大きな足跡を残して居られる、梁瀬會長の傳記刊行せらるゝ事は誰もが知りたい、所謂日本自動車發達史であり待望のものであらうと思ひます、誠に時宜を得た結構な計畫を喜びます。

梁瀬學校出身のO・Bとして思ひ出は數多く盡きないのですが、今尙、忘れられないのは、十年前の愈々ビュイックが來なくなり、三八年式で終始符を打たれた事です、何としても残念な事でした。

然し今日再轉、G・M社とのつながりが成立し、此の間、長足の進歩改良をなし、流麗全く目を奪ふG・M社自動車の數々が再びショウ・ウインドウに飾られる事は、色々の約束がある由乍ら、夢よ再びてふ感です。何としても嬉しい限りです、それから、亦會長の社員教育も忘れられません永い間實によく注意指導されました。

其の中に特に、身嗜について、八釜敷く云われました、若い頃の工場生活時代は、誠に苦手でした

が、段々之がよく分り、私の處世基本の一になつた事は、之亦、忘れ得ぬ有難い事で、最近は特に列國環視の申で動いている、私共の日常には特に留意せねばならぬ事と思ひます。

昨年目出度き古稀の壽を迎へられた時、久方振りでお目にかゝりました、永年之を實行されてる會長の誠に壯者を凌ぐ健康と、何時に變らぬ瀟洒な身ごしらへは壓巻でした。

到底古稀を迎へられた御年配とは見えぬものがありました、亦其の節久々で御世話になつた多くの方々にも御目にかゝる事の出来て、珍らしい和やかな空氣の中で人々と共に御多幸を祈る事が出来ました事は忘れ得ぬ喜びでした。一層御自愛下さる事御願申上げる次第です。

最近國民待望の平和條約の話も、ぼつ／＼出て今年あたりは可成り具體化されさうにも見えます、仲々大變とは思ひますが待たれるものゝ一です、業界も一段と活氣加はる事でせう。終りに世話の方々に今回の計畫の御禮を申上げ、皆様の御健闘を祈つて私の想出の一節御送り申上げます。

(新國産自動車株式會社社長)

梁瀬校長の話

齋 藤 淳

昭和十年頃であつたやうに記憶するが、赤坂の幸樂で梁瀬學校の卒業生(?)の集りを、今は亡き吉崎良造氏等が主催されて開かれた事があつた。

其の時、梁瀬さんはとうとう校長先生にされてしまつて、困惑されたやうでもあり、又一面嬉しさに、生徒の一人々々を眺めていた光景を今も忘れる事が出来ない。その時は、總勢百名近くも集まつたやうであつたが、一人として満足に卒業したものはなく、いずれも中途退學或は落第生であつた筈である。然し、校長先生だけはすつかり板についた校長然として、みんながそれ／＼社會的に地位を築きあげてる様子を満足さうに眺めた、あの顔は終生忘れる事が出来ない。やはり梁瀬さんは我々には、いゝ校長であり、親爺であつたと、其の時つく／＼考えたものである。

其の後、私は日産の神戸へ勤務を命ぜられ、梁瀬さんとは會う機會もなく過ぎたが、今こゝで改めて梁瀬さんの人としての思い出をさぐり出す時、何んといつても自動車界の第一人者であり、我國自動車界の開拓者であるといふ事は、私が今更云ふ必要もない事と思ふ。

私、個人として梁瀬さんを尊敬する所以は、一貫した信念を持つて、飽迄これに向つて進んでいる事である。つまり販賣業者としての所信を、何時如何なる場合に遭遇しても、これを變へなかつた事である。梁瀬自動車と肩を並べた日本自動車にしても、製作の面に入り、（註、聖自動車を始めしことならん）あの當時、梁瀬としても必ず製造方面に入る事を、同業者は殆んどそれを信じていたであらう。

戦時中は老齡であり乍ら、いつもの元氣なあのキチンとした容姿であの熾烈な爆撃下に、あの廻町

の本邸も、とうとう焼出されても、猶ほ屈せず、遂に東京に頑張り通して、整備方面に全力を傾注した事は、終生我々が忘れる事は出来ない大きな功績とも云えるし、あの當時も、遂に整備面から一歩も出ずに製作方面へ、わき道をそらさなかつた事が、今となつてハツキリと梁瀬さんの所信の一端が窺はれるやうな氣がする。

現在は此の基磐にものを云はせてゼネラル・モーターズとの代理店再契約が結ばれて、着々として販賣方面に飛躍されんとする態勢下にあるを識つて私は、つくづくその感を深くするものである。餅屋は餅屋と云ふ信念を、曲げなかつたことを、私はたゞ敬服している一人である。又これは私の想像だが、梁瀬さんが三井物産に入り、自動車部を受持された當時から、此の信念があつたやうな氣がしてならないのである。

その當時は、おそらく梁瀬さんも、三十代であつたらうか？ あの當時、我國の自動車というものが、おそらく企業として成立つかどうかと云ふ事は、誰しも疑念を持つていた事であらう。それを敢然として引受け、そして異常な好成绩を挙げ、三井物産と分離して梁瀬自動車を作りあげてしまつたやうに聞いているが、此の度胸が今日の大梁瀬を築きあげた基盤といえよう。

俗に謂ふ、人をくつた、此の度胸は、他の面にも幾度か表はれている。然し、人一倍、自動車に熱意を持つた人だけに、これに眞向から取組んだ時は、どんな役所の偉方（五らがた）であつても、一應は梁瀬さん

の所説に、うなすくものである。尤も、間違つた筋を通されるのでなく、其の語るところが、いつも理論整然としているので、やつぱり、こんなところは校長先生としての面目が躍如として浮び上るやうである。

正直のところ、梁瀬さんのやうに、多年の経験を重ね、事、自動車に就ての内外の事情に達識の方に對しては、如何に役人が、所謂文切り型のことを言つても、所詮、實際には適用は六ヶ敷しかつた譯である。

終りに、のぞみ私は梁瀬さんは終始業界のため先驅者となり勇氣と英智を傾け自動車界に貢献した事に對し心から敬服するものである。(日本自動車整備協會専務理事)

梁瀬長太郎氏の寫眞額

佐々木弘之

交詢社ビルの三階にあつた東京自動車商組合の會議室に代々の組合長の寫眞額が掲げてあつた。石澤愛三、中谷保、柳田諒三、清水新作、小川菊造と云ふ業界の長老連である。

當時石澤愛三氏は日本自動車株式會社の社長、中谷保氏は安全自動車株式會社々長、柳田諒三氏はエンバイヤ自動車商會店主、清水新作氏は清水商店主、小川菊造氏は日本自動車株式會社常務取締役である。

關東大震災を契機に一大飛躍を遂げた自動車界が一昔と云はれた時機であり、關東大震災後の飛躍した自動車界の各種の情勢に應じて生れ田た東京自動車商組合であるから、既に同年數の歴史を持つていた。

この組合長の任期が一ヶ年となつていたので、當時としても十數名の組合長の寫眞額が懸かつてもよかつた譯であるが、組合の權威を誇るために、大物主義の組合長選衡事情が嚴然たる傳統となつて居り、組合定款の中の重任を妨げすと云ふ條項に物を言はせて、十數年の任期を五氏が勤め上げた形となつた。

ところで、この中に梁瀬長太郎氏の寫眞額がないのが不思議とされ、種々話題に供されたことを記憶している。

この組合の組合長が嚴重に選衡され大物主義で一貫してただけに、梁瀬長太郎氏の寫眞額が上らなかつたことは納得のいかぬことである。業界を語る者があつて、日本の自動車の草分と言へば、ヤナセと答へ或は日本自動車と言ふものがあつたかも知れぬが、ヤナセを無視した者はあるまい。然るに、東京自動車商組合は梁瀬自動車株式会社々長梁瀬長太郎氏を無視しているから不思議であると云ふより致方ないのだ。

東京自動車商組合は梁瀬自動車株式会社を除外しているかと云ふとさうではない、立派に自動車部

會の一員として登録しているのだ。

當時の組合書記長進藤定夫氏がこの種の質問を向けられると、必ず困惑した顔で應答するのが常であつた。理由としては、この組合は東京自動車用品商組合と云ふ名儀で發足し、途中、東京自動車商組合と改名した。そのために梁瀬氏が未だに用品商組合であると見ているようである。

勿論、自動車部會と云ふカーディーラーで組織された部門があり、また發足當時からの用品部會もあり、製作部會、ボディ製作部會と云ふ部門まであるが、生立ちを考へていて、私はカーディーラーである。用品や部品を賣つて商賣をしているのではない、と思つてゐるらしい、組合に関心を持つてくれぬと云ふことであつた。

更にも一つの説として、この東京自動車商組合の結成前に東京自動車販賣業組合と言ふ團體がカーディーラーによつて作られていて、その當時、梁瀬氏は連續組合長を勤め、相當の名譽税を拂つて來たと云ふことである。

ところで、東京自動車商組合は當時の同業組合法と云ふ法的根據に立つて結成を急ぎ「東京府認可」の金看板がつくと言ふので、矢も楯もなく舊きを捨て、先へ先へと進んで行つてしまつたらしい、勿論この組合もそんな事情の前に解消して、何一つ新組合に遺産を残さなかつた

さて、東京自動車商組合は東京自動車用品商組合の名でスタートし、當時、既にカーディーラーと同

様に獨立して商賣の出来るようになった用品商が、その新しい商賣だけに各種の問題があつて、組合の中心議題は用品商に占められると云ふ形になつて改名して自動車商組合となつても、根本は用品商組合ではないかと考へられ勝であつた。随つて梁瀬長太郎氏が比較的この組合に超然とした存在になつたことは争われない。

所謂、用品商が社會的に進出した頃、梁瀬自動車は、用品の部門も相當手擴く取扱はれていたが、主力は、カデラツク、ラサール、ビニツク等々の豪華車を擁してカーディラーとして面目躍如たる活動をつゞけていた頃である。

東京自動車商組合は前述のように、用品商を中心とした組合の觀もあつたが、他面圓タクが社會的に進出した時代で、圓タク自動車の稱があつた、シボレー、フォード、プリムス等々の大衆車デイト筋には、共通して月賦販賣問題などがあつて、不良購買者の對策とか、車籍登録とか云つたような問題が論議されていた。

ところで、梁瀬自動車は、客筋から言つて全く圓タクに關係なく、當時のデイトラーの惱み抜いていた問題とは全く無關係の位置にあつた。そんな點からも梁瀬自動車は東京自動車商組合との關係が深まることなく、全く特異な存在として立ち、その結果、組合長の寫眞額が掲げられないと云ふ事情が出来てしまつたらしい。

然し、自動車界は梁瀬自動車の嚴然たる存在を無視し得ない、梁瀬長太郎氏の業界長老としての貫録識見を仰がねばならないと云ふことは、この東京自動車商組合に同氏の寫眞額が掲げられる機會が生れたことで證明される。確か、柳田諒三氏が二度目の組合長を勤め、それも重任すると云ふ頃であつたと思ふが、當の組合長自ら、梁瀬長太郎氏が一度も組合長を勤めていないこと、従つて業界の大御所、業界の長老をシンボルするような寫眞額が組合に上らないことから考へ出したことであつたかどうかは知らないが、梁瀬氏は吾々の大先輩であり、自動車界の先覺であり、また吾々を啓發指導し業界に對する貢獻は絶大である、と云つた譯で、同組合の名譽顧問に推舉した譯である。之に對して組合評議員會も異議なく承認した。

同組合の名譽顧問と云ふのは、組合長を勤めて辭任した時に推舉される慣例によつていたが、梁瀬氏の場合は新しい事例を開いた譯だ。

ところで申し落していたが、例の寫眞額は、組合長を勤めたと云ふ意味よりも名譽顧問に列した記念に掲げたもので、従つて名譽顧問になつた以上梁瀬長太郎氏の寫眞額も掲げられる事情になつた譯である。

これは、柳田諒三氏の政治力だと云ふ評もあつて八面玲瓏の同氏の面目を躍如させるものであるが同氏は、先輩梁瀬氏の加はつていないところで、吾々が名譽顧問でもないだらう、と云つたことが

ある。

梁瀬長太郎氏の寫眞額が實際掲げられたか如何かは、はつきりした記憶を持っていない。

その後同組合も移轉したり、タイヤ販賣業組合や、部品工業組合がそこから巢立つて行つたり、商業組合となつたりして、發展的に解消してしまつたので、今から確める譯にも行かない。機會があつたら當時の進藤定夫書記長に訊ねて見るつもりである。(日本經濟新聞社勤務部長)

事業家として嘆服

左 部 陸 男

自動車界の大御所、梁瀬長太郎氏について私は全然語る資格のない人間である。直接には殆んどお目にかかつたことがないからである。ただ、生れが同じ群馬縣だといふことで、非常な尊敬と懐しさといふものは感じてゐる。それに、亡くなられた柳田諒三氏などから間接にいろいろお聞きしてゐるし、それに、もう十年以上も前になるが、日本橋や芝浦の工場の方へは、時たまお邪魔して、色々お聞きしたこともあるので、間接にはいろいろ感じてゐることはある。第一に感じたことは、日本橋にしろ、芝浦の方にしろ、その當時は、實におつとりとした、老舗といふ感じが、全體的に流れてゐたことである。このような氣品は、扱つてゐる自動車が、カデラックとか、ピュイツクとかいふ高級車を扱つてゐたことにもよるのだらうが、單にそればかりでなく、社員の一人一人にギヤラントリイと

いふべきようなものが深い、外來者に感銘を興えていたことを忘れることは出来ない。そこには單に老舗といつたものゝほかに、梁瀬氏の優れた事業家としての事業家魂が凡ゆる職場の隅々にまでゆきわたつていたからであらうと思ふ。

事實、事業家としての梁瀬氏は、私などが喋々するまでもなく、三井物産から獨立して、今日を築くまでの、歩一步と地歩を固められ、事業を擴げてゆかれ、不況時にも微動だもしなかつた梁瀬自動車を中心とする此の事業がこれを何よりも雄辯に物語つておられる。

私には梁瀬氏については是れ以上何も語る資格はない。只優れた事業家として嘆服しているといふ一句が、凡てをつくしているといえる。(日本石油株式会社調査部長)

靜かに匂ひ起つ梁瀬長太郎氏

柴 田 勝 助

國產自動車の出現するまでの業界は、また自動車界の草分け時代であつた、梁瀬自動車とか、エンパイヤ自動車が一貫して指導的位置に就いて居たのも又當然で、従つて業界の大御所とか先覺者とか云ふやうな要素を多分に必要とするこの業界に表面切つての公職には梁瀬自動車社長梁瀬長太郎氏と私共の親會社とも謂ふべきエンパイヤの柳田前社長等の名前が是非共なにかにつけて必要であつた。

生前に於ける柳田社長は其生涯の過半数以上を車輛及部分品の販賣界、運輸界、製作界等極めて多方面に、然かも派手に自動車街道を驀進し、凡そ業界で、これと名のつく會合とか催しに就て柳田諒

三の名前が出て居ないと、不思議と思はれる程の風格を示していた、然し乍ら、梁瀬長太郎氏は獨りコツコツ地味に一足々々を堅實な歩みを續けて行き、そして今日ある梁瀬自動車の基盤を据えられたと謂ふのであつて、此の對照は極めて妙味のある現實である。

それに梁瀬長太郎氏と柳田前社長との關係は極めて舊いことであつて、抑々、柳田前社長が自動車に觸手を伸ばし始めた動機が、梁瀬氏にビュイツクを提供されて貸自動車業を始めたことに素因がある譯で、それも大正初期に遡ることである。それから萬歳貿易に於て自動車用品を商ふことになり其前後の兩者の關係と云ふものは全つたく唇齒輔車の間柄とも云ふべき状態であつた。

又、これについても今度、萬歳貿易の方でG・M社のオートライズド、デストリビューターとしてA・C製品やデルコレミー製品等を従前通り取扱ふやうになつたが、あの様な自動車用品類は凡て、かつては梁瀬自動車で取扱つて居たものを讓渡されたものである。

従つて柳田前社長の許に在つた私にしても梁瀬氏との御交誼は今日と謂共深く、殊に往年、今から二十年位にもなりません、整備工業組合時代から、それやこれやと御指導を受けたものである。

其處で私は何時も梁瀬氏の、あの態度に敬服する一人であつて如何にも板についた英國的な紳士のスタイルと、何處から押ししても、すきのないビジネス・マンと云ふことである。然かも商才にすぐれ物の見透しが機敏で、斯うした事には妙からず啓發されるところが多いのである。それから常々感服

して居ることは如何にも梁瀬氏は演説が巧みで、氏獨得のユモアを聴き、またどんな長い話でも少しも飽きの來ない、話のツボをチャント心得られ、殊に最後に結論を出されることには全く妙を得て居られ、又時折の座談などの時には實に、これ氏の獨壇場で何時も其の言葉の裡に玩味を見出して非常に得るところが多い譯である。

一昨年、私がニュー、エンバイヤとしてO・A・Sを始める様になり、其後、此のビジネスを爲す受託者も増えては居るが、殊更ら最近は安全自動車社長中谷保氏と共に、O・A・Sビジネスの打合などのため會合する機會も多いので、いつも此の道の達識者であり、思慮分別も極めて慎重な梁瀬氏から御指導を受けることが多いのである。(ニュー・エンバイヤ・モーターズ株式會社社長)

ビユイックの梁瀬

田 所 鷹 一

日本の自動車業界の元老としての、梁瀬長太郎翁の存在は仲々大なるものがある。梁瀬翁は一昨二十三年十月古稀の壽を迎へ今尙元氣旺盛で意氣高いものがある、誠にお目出度い限りで私達は翁の活躍を心から祝福している。翁はその昔、三井物産の機械部の一部門であつた自動車部を繼承して今日迄約三十餘年間一貫して自動車の販賣に従事し常に業界の尖端を走り自動車業界に益するところ大なるものがあつた、更に翁は業界に於ける人望家であつただけに翁のもとに馳せ集る者非常に多く、從

つて翁の指導を受けた業界人も相當數にのぼつてゐる。

翁が三井物産から自動車部門を繼承した當時の熱烈たる努力、眞面目と眞剣な態度は現在の自動車業界人の大に學ぶところがある、梁瀬翁が米車ビュイックを販賣していた當時、世間は梁瀬のビュイック、ビュイックの梁瀬といつていたが、いまだにその聲は耳に残つてゐる、これは正に自動車を賣る梁瀬翁がビュイックの中にとけ込んでいたからである、云はばビュイック自動車を賣るのに徹していたからである、私はこゝにいふ點で梁瀬翁に敬服している一人である終戦後の今日再び立ち上つた梁瀬自動車の會長として老體をひつさげ現社長梁瀬次郎氏の最もよき指導者となつて米車ビュイックを始め、G・M社系の諸車の販賣に活躍していることは、只々、感服の外はない。願はくは今後も一層健康に注意され世界の水準に邁進しつゝある我が自動車業界の爲め御活躍あらんことを祈つてゐる。

(日本ビュイック株式会社専務取締役)

梁瀬さんと國産自動車

田 中 常 三 郎

梁瀬さんは私に取つては無二の恩人です。私が今日の自動車マンとして、些かなりとも、國産自動車工業の發達に、盡すことの出來たのも、梁瀬さんの御力であつたことを忘れることは出來ません。梁瀬さんが大正五年に、日比谷に始めて梁瀬商會を始められた年に、先輩の堤氏の御世話で入社し、

昭和二年に日本G・M社に轉する迄、十二年間御世話になり、その間ボデーの研究のために、渡米の機会を與へて下さつたのも、梁瀬さんが私の將來を考へられての舉であつたし、深く感銘して置くところであります。

そも／＼自動車にはボデーは附物ですが、我國に於けるボデー製作は、梁瀬さんが最古の一つであることは、間違ひのないところであります。私が梁瀬商會に這入つた當時のボデーは馬車のボデーを造つた、所謂、馬車大工や、塗師屋さんが、その多年に亘る馬車造りの經驗を以て、自動車ボデーを造つた時代でありますので、室内の内張や、シートを造る職人は、馬具屋と云つたものです。當時のボデーは總て木製で樺、桂等と云つた、高級の材料を使い、二尺角位のブロックから、其の器用な大工さんの手斧チヨウウナ一丁で造り出すと云ふ様な具合で、その板廻りは枹の板をカクシ、釘で打付けた上に漆で釘跡を埋めて仕上げる、極めて丁寧な恐ろしく時間のかゝつた仕事であつて、塗料などは英國製のワニス塗装をするので、非常な時間がかゝりました。

その後、芝浦に數千坪の地所を買收されて、當時としては實に思ひ切つた、車體工場と修理工場を創設されたのでした。間もなく大正十二年の大震災が起りましたが、幸ひこの工場は残つて、この時代を劃して自動車の需要が本格的になつて社運に役立つことになりました。

梁瀬さんは勿論、歐米の自動車の輸入販賣をされることが主でありましたが、國産自動車のことに

も、早くより着眼されて、我々技術屋の意見を篤く聴かれました。そして確か、大正十年頃ですが、堀氏がエンジンとシャシーを、私がボデーの設計を擔當して、約十臺のヤナセ號の試作をやりました。そして當時、山階宮同妃兩殿下の御試乗を賜はつたのでした。引續き改良型を以て、商品化を計ることになりましたが、其頃自動車鋼の入手難、その他の事情と、堀君の外遊等のため、それ以上の發展を見なかつたのは残念でした。

ボデーで今一つ思ひ出されるのは、これも大正十年頃と思ひますが、東京に始めて乗合自動車會社が出来た時の、最初の乗合自動車は、梁瀬さんが米國のクライスデルと云ふトラツクシャシーを使つて、ボデーは私が設計したものでした。その當時のバスボデーは、電車の車體を参考にしたものですから、重量が非常に重くて、閉口したものです。何しろ東京で始めての大型乗合車だと云ふ譯で、假ボデーを造つて、市内を實地に動かしてから許可すると云つた騒ぎでありました。バスの女車掌さんを使ふことになつたのも、たしか此の當時が初めてと思ひます。

梁瀬さんとは昭和二年に御別れして、將來の國産自動車を目指して、先づ日本ゼネラル・モーターの大阪工場に入り、五年を経て、現在の日産自動車會社の創立と共に、これに参加してダットサン小型車なり、ニッサン車の完成に従事し参つたのですが、此間の経緯についても、梁瀬さんには或る場合には、非常な迷惑をかけた事もあります。結局、今日の國産自動車の地盤を築くための一齣と

して、梁瀬さんも御許し下さることゝ思つて居ります。斯うして現在の國産自動車の完成の蔭の力として、梁瀬さんの足跡と功績に對し深く敬意を表し此の一文を謹んで呈する次第です。

(日産自動車株式会社取締役吉原工場長)

機キヤンズ會を逃さぬ、あの意慾

竹 内 光 秋

關東の大震災の時、私は丁度會長御夫妻が歐米旅行中、麴町五番町の留守居として御屋敷を御預り致して居りましたが、不幸にも、あの震災のため御屋敷は遂に焼失致しましたので、止むを得ず、現社長(當時五、六歳と思ふ)を始め家族の皆様を引き連れて、難を一時、會長の御郷里である、群馬縣の高崎在の豊岡村へ向け、あの混亂の東京を二臺の自動車で避難を致しました。

そこで豊岡に到着くと、すぐ高崎市に走り高崎郵便局から紐育の會社の出張員氣付で、會長宛、家焼失せるも家族皆無事の無電を打ちましたところ、家族さへ無事であれば、そう急いで歸國するにも及ばぬと御返事を頂きました。

それで會長は先づ震災のため數多くの自動車は焼失し、又破損も甚しだいと御想像なされ、殊に復興には自動車は缺く可からざるものと御見透しをつけられ、暫時紐育に御滞在の様子でしたが、果せる哉、御歸朝の時には一時に何百何十臺と云ふ自動車を積荷して直ちに陸揚げをされた、あのアザヤ

カな御手腕には私達は勿論、業界の人々も驚愕した次第であります。

當時、會社は注文殺到で社員はテンテコ舞ひの忙しさに追はれたのも事實ですが、私は久しく會長の許にあつて、いつも感ずるところは會長は、物事をなすのに、いつも順序がたてゝあり、第一段の仕事の次は、その第二段と少しも、それに無理がなかつたことです。

震災で、てんやわんやと人々が騒いで居る時、大抵の人であつたら歸心矢の如く、母國に必らず何事を楽しめても、一日も早く歸るのが當然なのに、御身内の安全を確認されるや、モウ立派に御商賣のことに心身を打込んで行く、到底これは普通の人には氣のつかぬことと、思はれます、奇智と申すか大膽と云ふか、先見の明のあるには驚嘆の外はありません。

斯うしたことは商機ばかりではありませんので、私は會長の、そうした意慾を、いつも習得したいと想ふものであります。(元梁瀬自動車株式會社自動車部販賣掛長)

燒電柱の一片が置物

館 野 松 十

茲に一九五〇年を迎えて、梁瀬自動車株式會社取締役會長殿の、自動車界に於ける追憶を綴る事は私達社員の誠に喜びとする所であります。

私も引揚げ以來、會長殿及び社長殿の御厚情を蒙り、名古屋支店長の大役を戴き、社長殿の積極的

御方針の下に、着々販賣經營兩面共に充實し、近く修理部門も發足する運びとなり、日々躍進の一途をたどつております。そして今後も、會長殿及び、社長殿の高遠な御理想達成のために、努力致す積りであります。御依頼の趣旨により、會長殿の輝しき業績を偲びつゝ、追憶の斷片を記する事に致します。

あれは多分、大正の末期の頃だつたと思ひます、日本橋に近い呉服橋際に、新たに前後ブレーキとなり、ラジエターにバツカード型をとり入れた、ビエイツク號が陳列場に列べられて、梁瀬自動車が野心的な販賣に、乗出した當時の事であります、私はある日、社長室（現在の會長）を訪れますと、社長室の一隅に、見なれないそしてこんな部屋には全く不自然な、焼けこげた、一本の小木が、臺にのせて、飾りつけたものが目にとまりました、私は不審に思ひまして、早速社長にお尋ねしますとそれは、大正十二年の關東大震災の折に、燃きこがされた電柱の一片だと云ふ事に驚き、そんなものを大事に置物に迄されたのですかとお聞きしますと、

「これはあの時の記念です、大東京から通信、交通機關のすべてを失つた、苦しい時の思ひ出です、そして、これを眺めながら、一日も早く東京の交通機關を正常に復舊しなくてはと思ひます。それには出来るだけ早く、米國より自動車を輸入して、市民に交通の便を與えなくてはなりません、私はこの焼木をその目的達成の糧としているのですよ」。と云われました。

その時、私は社長の社會福祉に對する、貴高い御決意に心を打たれました。

そして社長のこの御決意は、その後、旬日を入れずして實現して行つたのであります。芝浦工場には、多量のシボレーとビュイツク號が入庫し、これを箱積みのまゝ、引渡すと云ふ盛況を示し、大東京の焼ヶ野原には、新しいG・M社の車が風を切つて走り、復興は日を追つて進んで行きました、大東京の復興が、あれ程早かつたのも、社長の自動車事業に對する、この様な貢獻の一助があつたればこそだと、今さらながら思ひ起されます。

又、これは御承知の通り、梁瀬がG・M社と契約を取りかわしたのは、今より三十年前で、東京に僅か自動車が三百臺程しかない當時の事であり、そして日本全國の重要都市に支店出張所が出来て、全國的機構が完成したのであります。

その頃でした、社長は外地に飛躍を考えられ、朝鮮に代理店を設けられ、その上當時は満足な道路とてない、臺灣にも代理店を設置する事を計畫され、營利の面を考えられずに、唯、自動車事業の開發と云ふ事の上のみで、この無謀を敢行されました。そして私がこの代理店を經營すべく渡臺したのであります。その時、臺灣には自動車が十臺程しかありませんでした、處が社長の慧眼は見事に當り梁瀬の代理店が出来ると、シボレーが一ヶ年に五百臺の販賣成績を挙げ、それにとまつて道路は擴張され、島内の交通事業も着々と開發されて行きました。

又、こんな事もありました、それは大阪に日本G・M社工場が出来た時の事でした、その開會式には私も一デエラーとして出席致しました。

當日、式に先だつて祝賀のケーキを切るのは、日本で一番古いデエラーが切る事になつたのであります、その時には會長のお顔は拜することは出来ませんでした、愈々その祝賀ケーキを切る時になりますと、靜まりかえつた場内の此處彼處より「梁瀬」「梁瀬」と云ふ聲が起り、それが次第に大きくなり、それが一つの要望となつてわき上つてまいりました。そして遂に梁瀬總代理店である、私が會長の代理を致しまして、ケーキを切つたのであります。居列ぶデエラーの注視の裡に、會長の代理を私が果したのであります。これはすべて會長の御徳のしからしめる處だと、感激の内にこの大役を成し遂げたのであります。今迄、日本の自動車事業のために貢獻された、會長を全國の自動車界の人々が御慕ひ申して居つた現はれでありました。この御徳と御信用の故に、今日早くもG・M社の代理店として、再契約を成し、あらためて茲に日本全國に梁瀬の機構を逐次充實させる得るを何より業界のため嬉しい事と存じます。(梁瀬自動車株式會社名古屋支店長)

自動車王

高城彌太郎

彼の雄大なる、上毛の三山に圍まれ清き流れの烏、碓氷兩川の合流點の、一農村より笈を負ひて、

東京に學び自動車界に身を投じ、現在の我が國自動車界を、今日在らしめた偉業こそ、國の誇りであり、我が村の誇りであると共に、村一番の成功者であります。

私も昭和十年より約十年間、會社に御世話になりましたが、社内の空氣は非常に家庭的でありまして、勤務の點に就ても、嚴格にて、残業して居る時等、時に私の様な若輩者にまで、氣を配られ指導、激勵の言葉をかけられ有難く身の引締る思ひが致しました。

番町宅へ御伺ひ致しました折等、昔話の中にも創業當時は、歸宅は殆んど一時、二時だつた由、當時の奮闘努力の程が察せられます、私が小學校在學當時、その頃どこの學校にも無かつた、黒光りする立派な大きなピアノが寄贈されました、朝禮の時、校長先生より本村出身の自動車王梁瀬長太郎氏の徳を稱へ、皆さんもしつかり勉強して、自動車王の様な立派な人に成つて村の爲、御國の爲に盡して下さいと訓示があり、當時既に小さき者の頭に自動車王の名は滲透して居るのであります、業務繁忙の内にも右の様に後進者の爲にも盡されて居るのであります。

今や、戦後四年、平和日本建設に各自邁進しつゝある秋に當り、益々御壯健にて我が國自動車界を負つて、斯界發展の爲、第一線に御奮闘の程心より御喜び申上げると共に、會社の御發展を衷心より祈るものであります。(群馬縣碓氷郡豐岡村)

側近者から観た私の綴方

高階孝道

大正十四年五月、私は通學するには絶対必要條件として屋根の下、食事が規則正しくあらねばならない事に思ひあたつて、梁瀬邸の庇護を受ける事が始まりで、今日も尙、御世話になつてゐる有様ですが、玄關番、書生から三十年に近い今日までの長い年月は主人の身近かに訓育を受けてゐる果報者であります。

人の一生は短い様で永いものです、また永い様で短いものです、一刻の長さと十年の短さと云ふ諺があります通りです。

一昨廿三年秋、古稀の御祝ひが盛大に行はれましたが、未だ嬰孺、若者を凌ぐ健康さであります事は自分達としても、これに越す嬉しい事はありません。此の世の中に七十幾星霜、尙且つ盛んなりと申上げるならば、世人の美望の的である計りでなく、主人は自動車界に於ける長老ですと申上げても決して阿諛した過言ではありません。

世間では「梁瀬さんは運が、いゝ方だからな」と、よく言はれますが、今日の梁瀬自動車株式會社なるものは、生立ちから然乍ら波亂重疊、苦節克く今日を成すに至つた事を記したいと思ひます。然らば運に弱い方かと申しますと、飛んでもない、運は確かに御強い方で、この運強い事と共に、終始

一貫、自動車の業界から離れずに努力された事であつて、此の努力こそ、我々の大いに學ばねばならない事と思ひます。

主人の人となりを、私が事あらためて書くのも如何かと思はれますが、永い間、御身邊から洩れ聞いた幾つかを集めて茲に記述するのは、正直私への教訓ともなり反省ともなる爲ですから、若し萬一間違つている事を書きましたならば後日御教示願へる事だと安心して書かせて頂きます。

皆様も御承知の様に、主人は高崎在下豊岡村の御出身で前橋中學校から東京府立一中、（當時は尋常中學と稱した）へ轉校され一ツ橋高等商業學校（現在の一ツ橋大學）を昭和三十七年卒業されましたが、青雲の志を抱いて上京されてからの學窓は世に云ふ茨の道であつたのでした。

終戦一寸前から信州へ疎開して居ります私は、足掛け五年間、毎日曜日毎に東京から一泊歸へりを續けて居りますが、車中食糧移動の話しから、夏の季節、輕井澤の外人客や避暑客目あてに、新鮮な野菜等を賣りに行く、板鼻邊の老人連に會ふ事があると話しますと、「僕もやつた事があるが元祖かな」と笑ひ話しになつた事があります。性從商賣の事に關しての主人の目の付け處は、凄いい程良いヒントを教はる事が多く、あとくされのない事、又、何處までも紳士的である事等は、生ひ立ちから商人として起られた百戦練磨の集約であります。

三井物産株式會社を辭して、自動車業界に入られるについては、自動車が好きだからとか面白いから

らとか云ふのではなくて、この業はきつと將來大きくなる業だと、思はれたからであつて、善い後援者もあり、非常な果斷をもつて、好機を掴んで業界人となられたのであります。

高商卒業後一ケ年間大阪商船會社へ入社されていましたが、根が商人ですから熟考の上、三井物産會社へ入社されて色々の商品を手かけられて居られた譯ですが、自動車に目をつけられた理由は、自分の綺麗性の性格と、自動車そのものの將來性と、時機がピタと合つたから始められたものと聞いて居ります。印度ボンベイで綿花の方で活躍されて居た事もあり、經驗も深かまりつゝあつた種々の商品の中での自動車と云ふものは之れ即ち縁と云ふものでせう。

自動車販賣に關係ある方は、若ければ若い方程、自動車運轉をして見たいものですが、主人も御多分に洩れず宮城前に引張り出したのはいゝが、楠公銅像前で見事操縦を過まつて溝に落して仕舞つたこれはいかぬと思つた最後、ハンドルを持たなかつたが、十年程前輕井澤で家族總動員同乗の折、時々運轉してこれも又、大失敗で膽を冷やしたとの事でした。

會社設立頃一ケ月に一臺の自動車が賣れたと云つて大酒盛りをした頃から、次の時代には若人を歐米に盛んに派遣して自動車技術導入に努力され、續いてバス交通界の早期經營者としても、埼玉縣川越生越路線を始め、朝鮮まで十七、八ヶ所を經營されました。當時の笑話の中で大仁修善寺間の路線では乗合馬車が巾をきかせて居て仲々道を除けてくれないので、馬の尻を眺めながらついて行くより

仕方がないものですから、えらい時間かゝつた話や、濃美路線等では飛驒の高山方面に通じた爲、奥地で魚の古いのが賣れないから困ると苦情が出る有様で、今から考へるとバス事業が早かつた丈に面白い逸話が残されて居ます。

自動車界に入られた時は霞町に住ひがあつて、其後赤坂檜町、麴町五番町、震災で一時材木町に、そのあとすぐ麻布富士見町から一番町邸が竣工したのが一九二六年であります。

檜町時代は自動車意慾に燃えた少壯家の集まつた邸であります、花岡柔吉、堤七郎、堤一郎、梁瀬喜作、泉藤吉、堀久、梁瀬正壽、庄司農四郎、新貝英治の各氏、亦、故人では種邑馬之助、鈴木武平、肥塚七兵衛、各氏等の外書生として久保田清氏がよく話しに出ます、今は既に不歸の人と否とに不拘多くの人々は何れも隆々と自動車業界に立派な足蹟を印されて居ります。次に五番町時代はやはり青壯年連中が修業された時代と云つていゝと思ひます、梁瀬喜作、羽鳥哲夫、黒澤彌助の諸氏と、今は亡きあの有名な清水雄太郎氏は此の頃邸内から會社へ通つたものであります。

關東大震災のあつた大正十二年は梁瀬邸及梁瀬自動車會社に大變化を招來した年であります。夫妻は當時世界漫遊の途上にありました。而も歸國途上にあつたのであります、即ち、大西洋上の船中であの關東大震災の報に接しられたのであります、再び上陸された米國で萬般の準備を了つて一望焼野原の東京へ十一月頃歸京し、取敢へず麻布材木町の假住ひから勸銀總裁高橋新八郎邸へ翌年移轉され

たのであります、これを富士見町時代と云ふならばこゝで梁瀬自動車會社の基礎が強固になつたのであります。

御長女文子様が青山で御次女綾子様が霞町で誕生されましたが、同時に梁瀬商會が日比谷で創立し檜町時代に現社長次郎様が生れ同時に梁瀬自動車株式會社が誕生したのであります、一人息子の現社長が次郎様と云ふのは御長男が生後六十日で夭折されているからであります。三女明子様が五番町で四女照代様が富士見町ですから、御子達はそれぞれの時代を背負つて生れられて居る事になります。

高商同窓會三七會は近頃あまり會合がない様子ですが、學友の一人故陸井幸平殿は一番町に梁瀬邸が竣工されてからよく訪問され、あの落付いた書齋でのんびりと日曜日などを楽しんで居られました以前から株の話はよく聞いて居りましたが、此の方も兎明では當時第一人者でありましたので、相互の取引は頻繁でありました、いづれの事業家も、財界の地歩を持ち、見解も擴まり、自己批判が狂はなくなるにつれ、興味は一段と増すものらしいですが、主人の株の場合は性質から精算を綺麗にし大穴ねらひはあまり望まないやり方なので、かへつて仲介人から受けとれない勘定があつて結局總じて大儲けされたとは思へません。

主人はいつも自分平は凡に過ぎして來た凡人だと云はれますが、どうして、どうして、多分に特異性を持つて平凡街道を経て來られた事は特筆すべきだと思ひます、はげしい氣性をかみ殺していら

る事はありありと見受けられる。時たま人に意見をされる時など、大きな聲を出されなにかわりに、深刻なグツと胸に迫る言葉を使はれる爲めに、叱られた人、意見された人が、往々逆効果になる例があるが、その言葉は年とともにあゝそうだったかとうなづけられます。

一九二七年、八年頃の千代田館苦況時代を過ぎて、一九三二年から再びG・M車の販賣に戻り、戦後再びG・M社の高級車を取扱つて居られますが、ビュイックのヤナセか、ヤナセのビュイックかまで、顕著な業績を挙げられつゝありますに就て「ローマは一日にして成らず」の感がひとしほ深く思はれます。記憶力の強い事は自他共に許す事であつて、而も緻密であり、きちんとした状態が念願であり、行ひであります。かゝる優れた平凡人の一人息子が、現社長であつて、新態勢のきびくした發展をされつゝありますが、敗戦後の日本の六ヶ敷しい時代を悪戦苦闘されている姿は、これまた世に云ふ温床育ちの若旦那社長などと暖氣にも云へたものではありません。大物の後釜もまた難いかなであります、時折自分は三代繼續される事を目標にしていると云われる事がありますが、二代の健闘をほゞ笑ましく眺めて居られます。近頃の主人の御歸邸はお早い様であります、従來の様に激務に居られた頃、夜は非常におそかつたので、此の點は御令夫人もお樂になられた事と思ひます、妻としては糟糠の妻であり、主婦としての努力は業界長老の蔭にこの妻あり、この母があるのであります。

戦争の爲、新車を使用されなまことに御不自由な永い期間、此の程、四九年型のビュイックが會

社として許可された第一の報告は郷里への御幕參が其のドライブであつて會長御夫妻の御感慨は如何ばかりかと推察されます。

從來三十幾つかの建築をされた中での一番町の邸宅程御自分の性格を現はした建物はありません。木口といひ仕事といひ、裏表のない豪壯な邸宅でありましたが惜しい哉、二十年五月二十五日の最後のあの大空襲で、あたら灰となつて了ひました。一人一人の名人氣質の職人の手によつて出来上つたものでしたが、今日では到底望むことが出来ないと棟梁がよく愚痴を云ふ程であります。焼け跡に出来上つた小ぢんまりした、御住ひは何處かに前の大邸の面影が残されて居りますが、苦境を押しきつて三年がかりで出来上つたものであります、これだけの偉業を建てられつゝある會長として、苦境とはうなづけない事ですが、事實、金と云ふものは個人的には持ち合せが少ないのであります、一にも仕事、二にも仕事に打ち込まれますので、戦後の様な財界の大變化に直面された場合でも、無理をしないで出来る範囲で工事を進められるが爲め、長年月を過するのであります、眞似の出来ない堅實さと忍耐を窺ふ事が出来ます。鎌倉の別荘が出来上つたのは渡邊華山の「蜘蛛」の茶掛が身代はりになつたのであります、番町と一脈通ずる建物であります。熱海山王ホテルにある別荘は、あの有名な遠藤殿の設計になつたものであります、此の家のよさはいずれ御解りになる時があるでせうと云はれた程で、圓熟した方の住ひとして好事家の間に有名になつて居ります、塵一つない磨かれた室に、

垢抜けのした姿で煙草を嚙ゆらしながら何か考へていられる間が、一番楽しそろに見受けられます。我々ならばチビリ〜とやり度い處ですが、酒はつとめて呑まない様にされて了ひましたが、近頃は保温の爲めに極くいゝ日本酒を一、二杯傾けて眞赤になつて居られます、坐談は巧みな話術に傾倒させられますが、歌といふものは銀婚祝ひの宴席で、空前絶後の只の一回聞きました、歌を教はる機會は數多いのに何故覺えないかと聞きますと、上手に聞かせるには、もと〜下手な者には大變な時間と努力とを要するので、自分にはそれが出來ないので、上手な方の歌を聞いて居る方がましたと云はれます、山陽風の筆致は仲々達筆であります、又、大觀、雅邦、栖鳳等の畫は特に喜んで居られます

初冬、碓氷峠をめざして走る信越線の車窓には、遠望白皚々たる淺間山は巍然として聳え、その立昇る噴煙を後にして、スチームにむれる暑い車内で此の稿を綴りました。

日頃思つて居ります事に、年をとつての味と云ふものは、人生の極致です、甘味、から味、にが味すつば味等種々雑多の世俗を友としての味合ひは年とともに夫れは深味が増すものと思ひます、ですから眞の人生を味ふならば、年長者程味へるのであります、四季の風物に接し、又時々刻々に動く世相に面して、あらゆる物をかみしめるならば、かめばかむ程、甘味にかわるいゝやうのない味覺に到達するものと思ひます、折角の自重と御健康を祈つて、七十からの人生を味はれん事を御祈りしてい

る次第で御座います。

自動車大學の校長先生

辻 靖 剛

梁瀬長太郎翁は元氣だ、全く元氣だ、昨年（二十三年十月十五日）古稀の壽を迎へた翁とは思へぬ程、元氣潑刺たるものがある、まことにお目出度い。

私の知る範圍で翁が今日迄に残された事業のうちで、自動車の販賣と幾多の自動車關係の人材を世に送り出したことは、餘りにも有名なことである。自動車の販賣で最も名聲を博したのは、米國G・M社のピユイツク車の販賣であつた、ヤナセと言へばピユイツクと答へ、ピユイツクと打てばヤナセと響く、G・M社のピユイツクと云ふより、ヤナセのピユイツクと言つた方が通りが早い、それ程ヤナセとピユイツクの關係は深かつた。

又業界へ幾多の人材を送り出している、中にもピストン製作で國寶的存在と云はれている、泉自動車工業株式會社社長泉藤吉氏なども、翁の門下生の屈指の一人である、この二事を以つて見ても、翁が如何に奮闘努力の頑張りやであり、又人材を養成するところの大人格者であつたか、と云ふことがうかがわれるのである。

梁瀬翁は熱心な研究家であると聞いていた、一昨年（二十三年）十二月五日、私は翁と山本惣治氏

の鎌倉の別荘で、三人で心ゆく迄で話したことがあつた、山本さんは今日の事業に取りかゝる迄で（追濱の工場建設迄で）の苦心談を話された、その間約三時間、翁は一言も發せず黙々として聞いていた、話し終つて翁は一言「ウーム」と力強くうなり、いかにも満足したらしく顔面にはニコニコした笑ひさえ浮べて、山本さんを激賞していた。

大先輩の翁が日産建設の智者、業界の英雄とも云はれた山本さんとの會見は實にすばらしいものがあつた、此の三時間の話しに何を研き何を究めたか、兩雄の會談、私は只感激に時を過した、かくべしを走らせてくると限りなく翁を語る材料が浮んで来る。要するに梁瀬翁は現代の自動車業界の各角度から見た、所謂、自動車大學の校長先生である偉大な存在であることを申し述べておく。

（自動車交通新聞社々長）

私の識る梁瀬長太郎氏

植原悦二郎

私は凡て人の傳記と云ふものは、只單に、其人を禮讚するのではなく、其人の眞實の姿を録して、後の世の人の人生行路の標識たらしめ得るものでなければならぬと思ふています。先づ之れが、私の傳記に對して抱懐している觀念であります。

私が、自動車業者梁瀬長太郎氏の名を知ることとは久しいものである。恐らく數十年にもなるでせう

自動車と云へば、梁瀬、梁瀬と云へば、すぐ自動車を思わしめた。それで梁瀬と自動車とは、切つても切れない縁あるもので、我國の自動車業の發達に就ては、イの一番に梁瀬氏を語らねばなるまい。梁瀬氏は我國に於ける自動車業の先覺者であつて、其開拓者でもある。従つて同氏の我が自動車業の發達に貢献した功績は、實に偉大なものと謂ふべきであらう。

私が、梁瀬氏と直接個人的に相識るに至りしは、十數年以前のことであつた。其仲介者は、自動車業界の優者、中谷保氏であつた。そして私の識る梁瀬氏は明晰な頭腦の持主で、洗練された教養ある實業家である。氏は頗る潔癖で、おしやれで、几帳面で、此面から云ふても、よい現代實業家の素質を具へている。

私の目に映する梁瀬氏は、實に堅實な人で、緻密で、打算的であるから實業家としては、申分のない性格を有している。従つて如何なる事業に従事しても、或る程度の成功は疑いなしと云ふところである。氏が逸早く時代の趨勢を洞察する明を有し、世人に先じて、最も將來性に富める自動車業を開始し、輸入自動車業者中の王者の地位を占むるに至りしは、決して偶然ではない。實業家としての氏は、必ず到る所、可ならざるはなしであらう。

私が實業家としての梁瀬氏を最も高く評價し、推賞したいことは、氏が數十年餘所目もふらず、自動車業のみに一意専念されたことである。多くの人は、少しく金でも出來れば、色々の事業に手を出

したがるものだが、斯る人は金儲けが主で、事業中心ではない。梁瀬氏は數十年一日の如く、自動車事業に専念せられた。これは事業家として尊いことである。

只惜むらくは、此人自分の事業の範圍のみに閉籠り、一層廣い社會との接觸を作り得ないことである。極めて緻密でもあるが、遠大な思索に乏しい、健實ではあるが、積極性がない、守るのみに心を奪はれ、延び行く心懸けが足りない。とは云ふものゝ、人を想ひ己を守り、大膽にして細心なる人は世間廣しと雖も、容易に存在するものではない。(衆議院議員)

思慮周到な梁瀬さん

梅 村 四 郎

昨年の秋、梁瀬さんが、古稀の齡を迎へられ、吾々同志がその祝賀會を催したが、多數の參加者を見、非常に盛大であつた、ところで本年は傳記を編纂すると言ふので、結構な企てだと喜んでいたら私にも何か梁瀬さんに就て、逸話か秘話を書けと、刊行會の方からの話だつたので、さてペンを取つて見ると、元來この方は苦手だし、殊に梁瀬さんのお傍にあつたのは、何時も限られた時間であつたので、特別にこれと云ふエピソードも浮んで來ない、併し私には私なりに語り度いと思ふ節もあるから、せめてそれでも述べさして貰らつて責を果したい。

大正二年の初夏だつたと記憶しているが、當時梁瀬さんが三井物産株式會社の日比谷出張所の責任

者であつて、私が同社大阪支店に居たが、新たにバルボリン會社製の礦油販賣を擔當することになつたので日比谷出張所へ見學に行き礦油に就ての教を受けた、この時初めて私が梁瀬さんの知遇を得たのである。

之れが契機となつて其後、梁瀬さんが梁瀬商會を設立して、獨立して間もなく、大正四年末に大阪支店を開設することになり、私が其責任者となり入社したのであつたが、大正九年財界不況の爲め社員の整理を餘儀なくされた時に、辭任したので、僅か五年間在社したのみで、其上東京と大阪とに離れていたのも、日々梁瀬さんの聲咳に接し得なかつたのは残念であつた、併し私は退社後、三十年間を顧みて日増に敬慕の念を増したのを欣んで、之れは全く、梁瀬さんの非凡なる人格に依るは勿論であるが、私は何よりも典型的眞面目な事業家である點を強調したい。

我國自動車販賣業の草分けは、梁瀬さんであることは、何人も異議の無い所であるが、半世紀にも近き年月、不屈不撓其の一途を守り通して、今日の隆盛を導いた事業眼と、熱と粘りは、他人の追隨し得ざる所である、最近米國輸入車の販賣權を獲得したのは當然のことである。

さて終戦後は、特にひどいが、大正、昭和時代に事業界に活躍した人の多くは、政界に首を突込んだり、或は業界の音頭取りの如き利權に絡んだ、名譽慾に走つたものだが、流石に梁瀬さんには、微塵もそんな氣を起されなかつた、戦時中の時局便乗による事業慾や、蓄財の如きにも一顧もされず、

また終戦後の混沌たる世情の中では、益々それから遠ざかつて、極めて謹厳であつた。

この様に、梁瀬さんは稀有の思慮周到で、困難に遭つて聊かも動搖せず、好況に際して驕傲でなく常に身を持するに質素勤儉で、事業に對しては不斷の信念を持ちて、實踐躬行して居らるゝは讃嘆に價すべきもので、實に世の事業に携ふるものの、以て範とすべきものであると思ふ。

終に私事に亘るが、大阪に支店を開設した頃は、大阪で動いていた自動車は十臺位であつて、今から考へると、嘘みたいの状態であつたが、私が一生斯業に身をおいたのも、全く梁瀬さんの御指導の賜であり、又、私が嘗つて少しでも事業に成功らしいものがあつたとすれば、それは正しく家内の「内助の功」による、この良妻は梁瀬さん御夫婦の媒酌によるものであるから、私が今日迄、幸福に暮して來たのは、結局、梁瀬さんに負ふ所、頗る多大であると思ふて感謝している。

以上、私の感想を生來の拙文で綴つたのだが、近々發刊される傳記を精讀し、梁瀬さんの人生觀の一斑でも知り得たいと、其の日を楽しみにしている。(元、豊國自動車株式會社々長)

石橋を叩いて渡る人

渡邊勝

この度梁瀬長太郎傳發刊に際して心から御祝ひ申し上げると共に會長に就ての事どもを想ひつくまゝこゝに記し、なにかと御參考に供する事が出来ましたら望外の喜で御座います。

私が未だ若かつた頃、會長の邸と拙邸とは畑一つ、へだてた御隣りに住んで居りましたので、家内

や子供等はちよい／＼奥様や會長のお母様にお招きされたものでした。

當時御元氣だつたお母様がよく家内等に會長の幼ない頃の逸話や性格を話して下さつたさうですがお母様の仰言るには「子供の頃の長太郎は極く普通の子であつて世に言ふ神童とか、秀才、天才とか言ふ風には見受けられず地味な大人しい性たちであつたが、只親の口から變ではあるが正直な點と親思ひの優しい子であり又、實に念には念を入れる即ち石橋を叩いてから後渡る程の思慮の深い子であつた」と家内が家に歸つてから私に話して呉れたものでした。

私も過去三十有餘年往時から現在迄、成る程注意深く石橋を叩いて云々の一言は、全くその一言で會長を髣髴させるに充分な至言と思ひます。想ふに、現在の人々は餘りに目先の事物に捉はれ現實を直視する眼に缺けるのではないでせうか？ 石橋を叩いて渡る程の要心深さ、この心掛が今日の梁潮を築き上げたと申しても決して過言ではないと想ふのであります。然し乍ら世には一朝にして名を喧傳され、夕には全く忘れられてゆく幾多の迷士？ のなんと多い事でせう。

又、親孝行も衆知の通りの事實であつて、全國に涉り支店が開設された時時年老いた母堂をいたわりつつ支店巡りをされた事等も誠に心暖まる美しい人間會長の半面を物語つて居るのではないでせうか、ビジネスマンとして丈でなくアツトホームも又よき夫、よき父、よきお爺様、そしてよき會長としての尙一層の輝ける明日を祈つてこの稿を終ります。

顧問に推薦する梁瀬會長

渡 部 治 一

梁瀬自動車株式會社取締役會長梁瀬長太郎氏の今日あるは、何んと云つても第一は人を見る目が高かつたこと、其次は誰よりも先の見通しが早かつた、と私は思ふ、然しそれ程の梁瀬會長にも、萬事抜目なく遣つたものゝ中にもエラーがある、こんなエラーは恐らく私が識つて居る位で、そう餘り外の人々は知らないことだと想はれる。

梁瀬會長は人を、ひと度信賴したら絶対に、これを第三者が見ると恰も放任主義ではないかと思はれる位である。それであるから——まさか忠告を申上げたことを中傷したと受取られた譯ではなかつたことと思ふけれども——最後には何十萬圓かの缺損を御自身で負擔なされた、なんてことは一寸呑氣過ぎると云へば、それまでであるが、妙くとも、あの往年の修理組合のことでは、さぞかし會長御自身も後味も悪かつたことと思はれるし、我々としても、あの事に關しては必ずしも慧眼を以つて居られた梁瀬會長にも似合はなかつた、所謂、見る目がなかつたと思つて居る。そして、あれはたしかに見損ひで、あれ程の見損ひは後にも先にも會長御自身にはなかつたと思つて居る。あれは會長の今日までの名譽職中の稀有のエラーではないかと思ふ。

それから梁瀬會長は何處から批判しても、あの方には人を陥し入れるやうな悪いことの出来ない人で、寧ろ會長は絶えず人様に迷惑をかけては、いけないと云ふことを絶えず念頭に置いて居る方である。それから前述したやうに、一度仕事を委せると絶対に其の人を信任する方で、人使ひの上手な、そして喋ることに、そつのない方である。それで、此のそつがないと言へば、嘗つて組合の總會や理事會などで、どんな攻撃の矢表に起つても甘んじて之を受け、實に大きいところが自然に備はつた方で、大抵のものなら辯解がましいことを辯解するのが常であるが、梁瀬會長は相手がどんな強く出て來てもこれを寔に済みませんと、軽く受け流す、老練と云つてよいか、何んと云つてよいか、決して感情に走つた言葉を以つて、これには答へていない。

たしかに梁瀬會長は長老である、自然備はつた風格と云ふものは争はれぬものと私は思ふ。私は斯うした會長の動作を今日まで身近く見聽きして來た丈に敬服している一人である。

それから今日でこそ、三萬軒整備と云つて大騒ぎを運輸省あたりが始めて居るが、それよりも前も前、あの支那事變も始まつた、あの頃、輸入車も止まり、國産車も軍部重點主義となり、一般民間用には新車の希望が薄くなつて來た時、既に自動車の修理加工と云ふ點に力を入れて、殊に代燃自動車も天然ガスに囑目して、あの頃三千本ものポンペを用意したなんてことは、到底普通人の考の及ばな

いところであつて、如何に先々の見通しに就いてハツキリしたものを持つて居たかゞ判る。

又、戦時中は、あの統制強化で御他聞に洩れず修理組合も役所の指導理念で、すべては實行させられて居たため、梁瀬會長の抱負の何%しか實現は出来なかつたけれど、決して會長は役所に盾をついたことなく、あの圓滿な性格を以つて事に處し、既にこの時早く、時代の波に逆つては駄目だと達感して居た點などは、やはり備はつた會長だから出来たことであつて、普通のものではあつたら相當な摩擦を起して取捨のつかぬ事を仕出かしたかも知れないと思はれる。

それに全國の修理組合を連合會に纏め上げて置いたことは何んと云つても會長の偉さである時、商工省から所管が離れて運輸省に移つた時、若し今日ある全國統制の連合會がなかつたとしたら、恐らく運輸省では喜んで、これを引受けてくれなかつた様にも思はれる。

梁瀬會長にお伴して私は戦争中、名古屋で開かれた修理加工工業組合の總會に出席した時に、面白いエピソードがある。

名古屋驛頭で輪タクをとめて私が「會長どうぞ、これにお乗り下さい」と云つたら、ふだんあのビュイックに一人乗りをして居られる會長、しげしげ輪タクを見られ「これに二人乗るのかい」との如

何にも不思議をうな、いぶかしい顔の質問である。私は笑ひ乍ら「いゝやあとからモウ一臺参りませぬ」、すると、會長はやつと安心した様な面持をして輪タクに乗られて同夜の宿舎観光ホテルに向はれた、想へばあの時の會長の當惑したお顔が思ひ出されて今でも微笑を禁じ得ないものがある。

それから観光ホテルで食事の際、大切に持参された林檎一個を半分にかけて私に下さつた時、會長は「私は食事のあと林檎を喰べるのが習慣でね」と、申されたので、私は何んとかして會長の今迄の勞を、ねぎらひ度いと心掛けて居た時でもあり當時、林檎の入手困難の際であつたので、歸京後、早速、青森縣組合の小石理事長に頼んで本場物の林檎を送つて頂き、これを御届けしたことがあつた。それにつけても如何にも義理がたい會長に恐縮したり有難く思つたことがある。

やはり此の名古屋の總會の時、観光ホテルでスフのタオルを私が使つて居たら、此のスフのタオルが水に漬けて搾ると一握となる様な代物で、大變不便をして居たら、これをチラリと見た會長は「渡部君、ゑらいものを使つて居るネ、たしか宅には、それ程でもないタオルがあつた筈だよ、歸京したら差上げやう」と言はれたことがあつた。

兎角、人は旅行先で話をしたり、約束をしたやうなものは怠り勝ちのものであるが、會長は此時を忘れないでビュイック自動車の染抜きタオルを半打私に下さつたことがある。

斯うして計らずも林檎の御禮が純綿タオルとなつて私に返へつて來た譯で、如何にも几帳面な會長

の風格がうかがはれるのである。又その親切に感激した譯である。

それから、これは、極く最近のことであつた、東京の我々の整備組合も改組の時となつて役員投票と云ふことになり、會長の御子息の現社長次郎氏に役員立候補の御承認を求めべく御伺ひしたところ、御當人非常に躊躇せられて受諾せられないので推薦代表の者も再度に涉つて懇請致しました處、丁度居合せた會長は「折角、皆さんが斯う御推薦し下さつて候補者にして下さる好意に對して辭退することは失禮になりますから、せめても其の御好意に酬ゆるため、名前文でも組合にサービスをしなさい、そして萬一、當選をしたら御用を務めたらよいでせう、又辭める時が來たら辭めたらよいでせう此際決して昔に、こだはることはない、凡ては時の流れに従つて行くものです」と、若い社長を、たしなめられているのを見聽きして、何んだが自分が教へられて居る様な氣がした。

十二月六日の理事會では満場一致で梁瀬會長を當組合の顧問に推薦し、此の交渉には中島理事長が當ることになつてゐるが、今日に到つて、眞に會長の識見が判つたと云ふ譯で、當組合としても愈々これからホントウの働きが出来るのではないかと思はれる。

記すところ、斷片とはなつたが、私と梁瀬會長、何も書くべきことが無いやうで、書き出せば、い

くからもあるものである。(東京都自動車整備工業協同組合専務理事)

異彩を放つあの白髪童顔

山崎 秀太郎

梁瀬長太郎君は、我等三七會々員中異彩を放つた一つの光である、明治三十七年同じ一ツ橋の學窓を出ると、各自思ふ方面に進路を開拓し、幾年の後には、夫れ〴〵各界に名をなしたのも妙なくなかつたが、多くは確固たる基礎の出來上つた會社とか、銀行に入り、成功したのであるが、梁瀬君に至つては、少し違つて居る、即ち同君は學校を出ると直ぐに三井物産に入つたが、餘り永く居らず、退社して梁瀬自動車會社を創設し、自力獨行能く荊の途を拓き、幾多の艱難を排除して、自動車王と云はれる迄に成功したのである。此行き方が他の會社とか、銀行に終始した連中とは、趣を異にして居るので、此意味に於て私は同君を異彩を放つた光と云ふのである。

尙一つ同君の異彩を放つて居ると云ふことは、其風采である、白髪童顔人に接して、好感を興ふることである。從來我等同人相集まり、三七會を開く時には、大概同君には出席せられたが、何時もニコニコとして、其溫容を我等仲間に見はし、會合に和やかな空氣を興へて呉れたのである。一昨年、同君は古稀の壽を重ねられたが、仲々以て元氣旺盛、古稀の人とは見えぬ位である愈々自重加餐、我が復興日本の爲め最後の努力を拂はれんことを希望して已まないものである。(元横濱正金銀行重役)

活かして使ふお金の教訓

米 山 良 吉

過去十年近くも、梁瀬自動車株式會社に御世話になりました私には、會長に對する思い出は、多々あります。我國敗戦後物價は暴騰し、世はインフレ時代となり、人心もまた甚だしい變化をいたしました。殊に青少年の貨幣を無駄にする方が、非常に多くなりましたのには、實に驚くばかりであります。五拾錢、壹圓の紙幣などは、紙屑の如くで道路に落ちて居つても、拾ふ人もなし、却つて踏みつけて行く様な仕末です。誠に勿態ないことと思ひます。

私は曾つて、會長の御旅行に度々御供をいたしましたので、特に記憶に残つて居りますことの、一つを記させて頂きたいと思ひます會長位平素御錢を大切に扱はれた方は少ないだらうと思ひます。

大正六、七年頃、會長は當時（註、大正六、七年頃）五錢、拾錢と云ふ様な、些少なお錢でも、一々御記憶に止め、決して無駄には御使ひにならなかつたのです。併し事業に關するものや、理由のあるものや、社交等のためには、少しの使ひ惜しみなどは、なさらなかつたのです。同じお錢でも、實に良く活してお使ひになつた方だと思ひます。今は亡き佐々木、左右田氏などと良く話し合つたものですが、當時、私達は社用で度々地方へ出張いたしました其の都度旅費の外に、數百圓の社交費の精算書を差出すのが普通でした、時には自分達乍ら出し過ぎる様なことも度々ありましたが、會長には只

の一度も苦いお顔もなさらずに、心良く御承認になり、只々熱心に業務報告をお聞きになるのでした。只今なれば百や千のお錢などは何んとも思はれぬでせうが、當時はお米一升が參拾錢、東京大阪間の汽車賃が、拾圓未滿の時ですから、なか／＼大したものでした。

又、私が在社當時、約一ヶ年餘り病氣のため會社を缺勤したことがありました、當時の社則では三ヶ月も缺勤すれば、月給も停止になるものでしたにも不拘、會長は御自分のポケットより、一ヶ年近くも皆に内々で月給としたものを、私にお届け下さいました、私はお蔭で本當に助かりました。そして安心して療養することも出来ました。私としては此の御厚志は終生忘るゝことが出来ないものであります。

會長は常に私達にお錢は國の寶だ、粗末にはするな、無駄使ひするなと、良くお教へになられました。之は誠に簡單の様なことで實はなか／＼に出來難いことだと思ひます。會長の様な人格識見の高い人は容易に實行せられ、活模範を私共に示されて居るのであります。今日の様に一弗が俗に五、六百圓（換算レートは三六〇圓）する様な時になりますと、特に會長の平素のお教へが一層痛切に思ひ出されてなりません。

又、一面私は最近會長及び社長に度々お目にかゝりましたが、御親子間の御圓滿なること、會長は社長を輔佐いたされ、又、社長は會長、會長と尊敬され、共に日々業務に御精勵の有様は、實に美し

く又美ましい限りで御座います。會長も本年七十歳、益々御壯健に一に壽齡を加へられ、永く私共をお導き下さる様、切に御祈りして私の筆を終りたいと思ひます。(三和自動車株式会社取締役)

私の觀た「梁瀬長太郎氏」

柳 本 光 三

日本に自動車の歴史が始まつて「ヤナセの自動車」は「自動車のヤナセ」と云ふ言葉にまで變つた程に、古い經歷を持つた梁瀬さんの一生を通じての自動車事業を觀る時に、茲に私は過ぐる昭和十三年の梁瀬さんの還歴の御祝で東京會館へ招かれたことを思ひ出す。

たしかその時の挨拶の言葉の中で「If I were Boy again——」と云ふ英語を喋られ、還歴とは齡を返すと云ふことであるから此の Boy では聊か困るが、せめて三十歳位の若さに齡を返して貰つて、今後に於ける私との御附合は三十歳になつた梁瀬長太郎として御引き廻しを願ひます、いや私は此の三十となつた積りでスタート・ラインに立ち、大いに若返つた積りで、張切つて仕事をして行きたい。と申された事を憶えている。

それから年移り世は變つて戦禍の中に、凡ては統制時代となり、自動車界も斯うした氣運に乗つて來た時に、嘗ては御自身の會社とか、それらに關係以外は決して重だつた會合にお顔もおも見せなかつた梁瀬さんが、自動車の修理組合が出來れば、その理事長となられて奔走し、また外に幾つかの斯うし

た業界の團體關係にも極めて積極的に出られ、つぶさに、あの還歴の時の言葉通り若返つた働き振りを觀て、私は成程と思つた次第である。

これは或は古い語り草として仕舞ひ度いことであるが、昭和十八年八月二十日、地方自配に於ける所謂六十九品目の部品問題にからんで、需給協議會が京橋の明治屋八階に開かれ、一紛争を起した時角川新一郎氏が時の東京地配社長小野悟式氏（註、昭和二十三年七月六日夜輪禍で急逝した）と一騎打の論戰を展開しその嘯鳴り振りと云ひ、そのゼスチユアを見て、他の人々は其の會場の空氣が、どのやうに、なるのやら不安の顔色でいる時に、私の傍に居られた梁瀬さんは、靜かに「柳本君、あの角川と云ふ男は喧嘩の商賣人だね」と云はれたのであるから、私は「それ程でもないでせう、今日は彼は相當興奮しているのです」と答へた。すると梁瀬さんは「いや、並なみの人だつたら、一階から八階まで嘯鳴り乍ら然かも防ぐ者を排しては、あの勢ひでは、やつて來られぬものです、第一に馳せ上つて來て一時間以上も一氣呵聲に喋りまくり、少しも聲が衰おとろへていないのは、たしかに商賣人の證據だよ」と、云はれたことがある。

私は其時は、それで過ぎたものゝ、あとで思ひ當ることがあつて、梁瀬さんは、如何にも人を見分ける力の偉大なものを持つて居るかゞ判つて愕いた次第である。

又、梁瀬さんと、時折の會合とかで御逢ひしたり、人々の觀た話題で、その風格を觀ていると、實

に几帳面な御方で、健康にも充分に御注意され、立派に御攝生なされていることを観る時に、あの御長命も、うなすけることであるが、それと同様に、ふだんの御生活振りが、如何にも合理化したビジネス、オンリーに見られ、恐らく自動車にあれ程身も魂も打込んだ人は極く稀れだと思ふ。それであるから誰彼の差別もなく、殊に其頃威張つていた軍部方面とか、官廳の、お偉ら方を相手として遠慮もなく素直に語られる、そんなことなどは如何に人となりが然らしめたと云へ、實に立派な態度で、自然備はつた貫録と言ふものは慥かに争へぬものと深く思つたものである。

それ故、戦争前も現在も變りなく外國の方々と何等の隔たりもなく、よく理解して、よきにつけ、悪しきにつけ、これを呑み込んで然かも英語を流暢に喋られる、そして日本が戦争に敗けて誰一人として對等に、お話しの出來難い時に、殊にアメリカと我々の業界が切つても切れぬ深い關係を必要とする時に、然かもG・M本社あたりとは特別な親密さも伺はれる時に、斯うした生字引のやうな、日本の業界を代表して少しも恥かしくない梁瀬さんに、より以上積極的な働きに、充分の期待と信頼がかけられると常々思つている。

それから、これは幾年か前と記憶するが、御自身の乗られる自動車のタイヤのことで、とある日、私を訪ねられ、「タイヤが無くて自動車が活用出來ない、闇では一本二萬圓もすると云ふが、これは私の良心が許さない、聞けば柳木君、君はタイヤの仕事をしておられると云ふが何んとか方法はあ

るまいか」と相談を受けたことがある。

私は長老の顔を見て、勿論嫌とは云へず、いつも重要な時には必らず御自身で出掛けられる梁瀬さんを識つていたので「よろしゆう御座います。御引受け致しませう、然し正式な書類を出して下さいそれに依つて善處致しませう」と答へ、後日、これを御用達したことがあつたが、普通の人であつた電話一本で間に合せるとか、或は他人を遣はして用を達するのが當り前なのに一ツのことに當つても、物の見方が普通の人と相違して、事はこれに依つて幾人かの人、斯うすれば迷惑するとか、これが遅れれば困るとか、と云ふ大切な時には必らずその究結を見分けて公平な判断の許に行動をせられる梁瀬さんを識つている私は、斯うしたつまらないことにも決して人だのみをしなかつた、梁瀬さんの人柄に教へられるところがある。

梁瀬さんは、それから何時何處で御會ひしても小綺麗で、無性髭もはやさず、戦争中の、あのさ中でも垢の着いたものを身に、まどつていなかつた、いつもキッチンとネクタイを付けて居るのを御見受けした、たしかにモダンな、好いお爺さんと云ふ感じである。従つてゼントルマンとは梁瀬さんにピッタリと當てはまる言葉ではないかと思ふ。

これも梁瀬さんの還歴のお祝ひの時、安全自動車株式会社々長中谷保氏が祝辭を述べられた言葉に「兎角自動車に携はる者は世間から色々な意味でハンディキャップを持つて見られ人柄が少し品位が

落ちる様に思はれ勝ちであつたが、吾々の業界に梁瀬さんのやうな紳士が自動車の先鞭を付けられた事は對外的に非常に心強い限りである」と、云はれたことを憶えている。それから日本橋の梁瀬自動車の本社が進駐軍に一番早く業界から接收されたが、これも一番早く解除になつたことなどに思ひめぐらすと、これは慥かに梁瀬さんの人格が内外ともに立派に表現されたことではないかと思はれる。それで、これから愈々業界も、今迄より一層多事多端の時が來ることを豫め覺悟しているときに、梁瀬さんを、自動車會議所あたりで、モウ少し或る程度、強引に働いて頂くやうにすることが極めて必要ではないかとも思ふ。

仕事をしたがつたり、何かの役付になりたい人は澤山ある、けれど、あの様に先々の見透しをチャント、わきまへた人に指導を受けること丈でも是非必要ではあるまいか。

そうしたら、若返つてゐる現在の梁瀬さんは、吾々業界のためキット何事か爲になる形を現はして下さる大先輩である事を私は堅く信じて疑はない。(東京自動車タイヤ株式会社々長)

梁瀬長太郎氏の横顔

吉 田 政 治

自動車界に於ける梁瀬長太郎氏は、業績他に例なく押しも押されもせぬ長老である。

私が昭和六年、日本ゼネラル、モーターズの販賣店の者となつて、自動車界に這入つた時に始めて

氏を知つたので、今から考へると遂ひ此の間のことのやうにも想ひ、事實は相當古い話になる。

古い話と云へば、私が業界に這入る前のことは委しくは識らないが、當時吳服橋際に聳え立つた、あのイルミネーションの自動車廣告塔の「ヤナセ」の文字は今日でも明瞭に私の記憶に残っている。

それから幾年か経つて、我々G・M系の会社のものは勿論、日本中の業界人から、氏が「ビュイツクの梁瀬」か「梁瀬のビュイツク」かと、云はれるやうに有名になつた。

業界人のみが、よく識り、理解の出来るあの積年の勞苦を思ふと、克く斯くも、ねばり強く頑張られたものかと、敬服に堪えない。

それに氏の、あの白髪が、二十年前と、今日は少しも變化なく、又同時に往年の元氣が少しも衰へて居られない。それに氏、獨得の話し方も諧謔まじりの御上手な話し方で、會議、其他の席でのテールスピーチも、なか／＼味のあるものである。

特に私の印象に残るのは、よくゼネラル・モーターズの會合で酒氣が廻ると Silver and Back シルバー、アンド、ブラツクと御自分の頭髮と眉と髭を指さされて云はれた事である。御存知の如く氏の頭髮と髭は白くても眉は眞黒であられた、（然し此頃御見受けすると眉も幾分か白くなられている様子である）たしかに、斯うした雰圍氣に居られる氏を思ひ浮べると、自然備はつた風格と云ふものは不思議なもの、全つたく魅せられると云ふか、此の老紳士に、あの血のにじむ様な笑の道があつ

たとはどうしても受取れないやうな氣がする、そしてあの鬪魂が何處に秘められていたかと思ふ。しかし、どう見ても濃厚な好々爺たる感は失はれない。

自動車界は兎角、アブノーマルのことが多い。そのアブノーマルを充分に識りつゝ、これをノーマルに切抜けて往ける人は、そうザラにあるものではない。然し氏は、面倒な外社のシステムも、小六ヶ敷しい嘗ての軍や官廳へのセールスにも、又會社の經營面にも、事に處して殆んどスムーズに運ばれた器量と云ふものは、言はず語らずの裡に我々に教へられるところがある。即ち、そうした現實を見、又その現實に自身ぶつかつて成程と氣付くことがある。

これもあれも、やはり同じ業界にあつて同じ仕事にあるから判ること、其都度、氏のプロフィールが映じてくるのである。

自動車界に、今日の基礎を築かれた氏も一昨年は古稀を壽がれた、俗に古來は稀だと云はれた御年齢でも、あの元氣潑瀾たる容姿に接すると私共の指導者未だ健全なりと、いつも心強く感ずるものがある。

私は氏を業界の長老として尊敬してやまぬ次第である。(東京日産自動車株式会社々長)

私の言葉

梁 瀬 喜 作

梁瀬會長が、その公的の生活に、たゞ自動車を唯一の對象として、多年吾が國の業界に貢獻され、そして今日在る會社を築いたと云ふことは、それは不斷の努力であつた。

朝に星を戴いて夕べに月影を踏んで歸る、あの精力的な鬪魂とでも云ふか、活躍振りは、やはり現社長にも受繼がれて、これが、今日ある會社の、經倫となつて現はれ、いつも、それが私達の明るい希望となつている。

古い話になるが、梁瀬商會として獨立してから、あの檜町時代の働き振りと云ひ、また吳服橋時代となつて、それから日本橋の本社時代、みなこれは懐しい思い出ばかりである。

全つたく、あの頃の會長は寸暇もない程で克くも働き續けられて來たものと想ふ。それにつけても會長御家族と會社と云ふものは、いつも渾然一體となつて融和し、それが或時は子供會となつたり、家族慰安會となつて、今日まで、温かい家族制度と云ふやうなものが續いて來ている譯である。

故に私は斯うした事をもつて梁瀬自動車は全つたく文字通りの家族的な會社であつて餘り他所に、この例を見ない會社であると思つている。

今日、O・Bメンバーの方々が、會社に對して、いつも懐舊の情を抱いて居られるのは、やはり、

茲には何處にでも見られない無形の、何物かがある。と云ふ譯で、それもこれも會長御家族の俗に謂ふ陰徳が然らしむるものではないかと思ふ。

私は人一倍、舊くから會社に勤めさして頂いている關係上、斯うしたことの幾つかを書き度いのであるが、たゞ一つの例として、茲に會長御家族と會社との關係は、いつも深い、つながりがあることを記して置き度いと思ふ。

それは昭和十六年十一月の事であつた、時の海軍航空本部から日本内燃機株式會社を通じて特殊自動車の大量の注文を受けたことがあつた。

その頃、私は高濱工場長であつたので、如何にも其の數量が多いので、果して納期までに夫れが完成するか、どうかと云ふことが、氣になり、種々最寄の關係者と何邊となく打合せをしたのであつたが、どうしても其の納期までには間に合ひそうもないので、獨り、その工夫に頭を痛めていた。

そして、それは或日のことであつた、他のことで番町の會長邸を訪れた時、こんなことが頭の中にモヤ／＼して居たと見えて、遂ひ心ならずも私の悩みを會長夫人に打開けて仕舞つた。

すると「夫人はそれには、よいことがあります、私が工場へ往つて、夜を徹して働く現場の人々のため、夜食を作りませう」と云はれ、その夜から會社の食堂に白いエプロン姿も凛々しく、近山夫人

の綾子さんと尾澤夫人の明子さんを伴はれ、それに女中二名を手傳はせて、まる一ヶ月間、毎夜十時ともなれば或は、お汁粉を、また或夜は、あたゝかい牛うどんを、人もてなして頂いたので、この御馳走に預かつた工員一同は感激をして、一躍その能率は倍加し、到底その年内は完成も六ヶ敷しいと思はれていた仕事は、その年の十二月二十日に見事完成をして、航本から感謝状と共に金二千圓也を日本内燃機の常務取締役蔭田鐵司氏を通じて頂いたことがあつた。

そして此のお金のごことに就いて、夫人に報告申上げたら、夫人は「それは働いた工員達に頒けてやつたらよいでせう」と申されたので、早速これを一同に頒けてやつたことがあるが、たしか、これが梁瀬の會社に於ける能率給の事始めとなつた次第である。(梁瀬自動車株式會社取締役管理部長)

刊行會世話人としての謝辭

大 澤 喜 市

「日本自動車史と梁瀬長太郎」と題する傳記を刊行するに當り、刊行會の世話人となつたことは、私の最も光榮とする處であります。

刊行を企てたのが昨年十月下旬で梁瀬會長の誕生日十二月十五日迄に完成の豫定なので、日數は僅かに一ヶ月有餘の短期間にも拘らず、自動車界を始め、實業界、政界其の他多方面の諸賢より、玉稿を賜はり數百頁に亘る大書となりました、是れ畢竟、梁瀬會長が我が自動車界の長老として、多年に亘

り、業界に盡瘁した、偉大なる功績と、そして高潔な人格とを、物語るものに外なりません。玉稿を賜はつた各位に對し、世話人として、茲に深甚なる謝意を表し、厚く御禮を申し上げます。

又本書編纂を擔當された、前、株式會社自動車交通弘報社編集長（現在、株式會社オートモビル社代表者）山崎晁延氏は本書刊行の計畫の當初より、東奔西走晝夜兼行寢食を忘れて資料の蒐集、編輯事務の處理を爲された、その勞苦に對し感謝の微意を表する次第であります。

1. 梁瀨會長の性格の一端

梁瀨會長の自動車界、實業界に於て傑出せられたる事績に就ては、各方面よりの御寄稿に依つて盡されて居るので、私の冗辯は省略させて戴き、會長個人の性格の一端に就て、少しく申述べること致したいと思ひます。

- 一、 思慮周密にして、物事を苟しくも、等閑に附することを好まない。
- 二、 計數に明るく、算盤が早く、數理に精密した頭腦で計畫を立てるから、確實で間違ひがない。
- 三、 構想遠大で、大膽の企業を樹立するが、之れが實行に際しては、細心の注意を以て處理する。
- 四、 難局の打開に當つては、勇敢果斷で、獨特の粘りと、不撓不屈の精神を發揮して、其の結果、禍を轉じて福とする、妙技を有つて居られる。
- 五、 先見の明と、決斷の迅速は、天稟の長所で、常人の追従を許さない。

- 六、友情、信義に敦く、情誼濃やかに、後進を誘掖される。
- 七、演説、談話が巧みで、温顔、微笑、明朗にして、悠揚迫らず、其の蘊蓄が深く、識見が該博、高邁で、津々として盡くる處を知らず、聞く者をして恍惚たらしめるものがある。
- 八、人の言ふことを、よく聞く雅量がある、善い話は勿論であるが、どんな詰らない話でも、熱心に傾聴する襟度を持つて居られる。
- 九、育英に就ては、深く關心を持たれ、平素青年學生などを非常に可愛がられて、在學中の援助や就職の斡旋等もなされたことは、夥たゞしい數に上つて居る。
- 十、義理人情に敦厚で、人の世話を厭はず、縁談、結婚の媒酌等、誠心誠意を込めて御世話して下さる、其の恩義に浴した者は實に枚擧に遑ない。

2. 梁潮會長と私

一ツ橋時代

會長は群馬縣の御出身で、夙に東京築地にあつた、尋中（東京府立第一中學の前身）を卒業、明治三十三年、一ツ橋高商（今の一ツ橋大學の前身）に入學せられました、私が會長の知遇を辱ふしたのは此時からです。會長は秀才で殊に英語は群を抜き、當時一ツ橋名物の英語舞踏會には選拔され出演されたことも屢々でした。其後實業界に進出、英米人を對手に巧妙なる折衝をされるのも、其の基礎

は一ツ橋時代に涵養された語學が與つて力があつたと申されましよう。

明治三十七年に一ツ橋を卒業、會長は大阪商船へ、私は三井物産へ入社しました。天性商賣堅氣の會長は、商船の仕事は、自分には不向と云ふので、間もなく三井物産に轉じ、孟買支店詰となられました。此、孟買赴任に就き一逸話があります。當時一ツ橋出身のクラスメート數人が同時に赴任、而かも一騎當千の勇士揃ひなので、到る處で豪遊を試み、出發前に東京本店より貰つた、旅費は、内地に居る間に使ひ果し、囊中無一文で乗船、上海、香港、新嘉坡等各支店より遊興費を借入れ、其の額が多額に昇つた爲め、本店ではびつくりして、其れ以來、赴任者には本店より發行した信用狀を限度とし、之れ以上前貸しは罷りならぬと云ふ、嚴達を發せられたのも此豪遊の産物でした。

三井物産機械部時代

會長は孟買在勤二年有餘で、明治四十年東京本店機械部へ轉勤せられました。當時、私は機械部に居つたので机を並べて働きました、丁度其の時分、物産で機械油（礦油）の商賣を始めることになり會長が礦油係を擔任せられました、商才に秀いでた會長の努力奮闘に依り、成績顯著、重役より認められるところとなり、後ちに、物産より自動車と礦油の販賣を委嘱されたのも、此の手腕に胚胎するものと信んじます。

機械部在勤時代の秘話を一、二拾つて見ましよう。

私と同僚の者とて、正月に會長の御宅（品川と記憶す）へ、年賀旁々飲み荒しに伺つた時、近所の者に御宅を聞いたら、あの炭屋さんですと、教へられ、伺つて見ると、庭中に炭俵が何百俵と一杯に積んである、之れは上州から仕入れて卸賣りをされるとの事、又其の當時、餘り人の目を付けない懷中電燈の卸賣りなどもやつて居られるとの事、又タンダステン山の山にも關係されて居られるとの事、等々伺つて流石は商賣に卓見を持つて居らるゝと敬服して辭去しました。

次は或る昇給の時期に、當時吾々の機械掛主任の岩崎武治氏（今は故人）が、今度は諸君の昇給は思ひ切つて多額の申請をして置いたと自慢話を聞かされたが、辭令を貰つて見ると何んと月並の上り方であつた、其れでも皆は主任の前に行つて御禮を言ふたが、獨り會長は何の挨拶もしないので、岩崎主任が「梁瀬君プロモーションはどうだつた」と問ふたら、會長の返事が振つてゐる「ほんの鼻糞程上りました」と、平然たる態度で答ふるので、主任も苦笑しました。之れを見ても、當時、既に會長は單なるサラリーマンから逸脱して、獨立自營の霸氣が横溢して居つたことが察せられます。

又、機械部時代には、よく柳橋で遊んだものだが、會長は喰ふ方と、藝者の方を獨占し、飲むでもなく、歌ふでもなく、女の手を握り、喃々喋々と冗談を言ふて、興味に耽つて居られる、私は飲む方が専門で、酩酊して會長の介抱を受けたことも一再に止まらなかつたが、其の都度厭な面一つせず、恰も慈父の如く懇切に始末をして下さつた。

梁瀬商會と梁瀬自動車會社時代

大正四年、會長は素志を貫徹して、梁瀬商會を設立し、三井物産より自動車と礦油の商賣を譲り受け、目出度く、獨立自營の旗揚げをされました。

私は大正二年、機械部から三井物産佐世保出張所長へ轉出し、暫く會長と御別れしましたが、二年程で再び東京へ歸り、今度は三井の傍系會社、日本製鋼所會計課長を勤めて居ました時、突如、會長より招待を受け、席上「自動車の商賣が忙しくなつて人手が不足で困つて居る、氣心の知れた、君が來て手傳つて呉れば何より仕合せだ、御互に協力して自動車の發展を計らうではないか」と、眞に友情溢るゝ熱誠と懇請とを賜はり、人生意氣に感んず、とは此の事でしょう、衷心より感激して、遂に犬馬の勞を盡さんと心に誓ひ傘下に馳せ參ずることになりました。之れが大正六年のことでした、爾來三十有餘年間會社に勤績して、今日も猶ほ、老骨菲才の身を以て、相變らず恩顧を辱ふして居りますことは、誠に感謝感激に堪へざるところであります。

終りに臨み、會長は古稀に達せられたが老いて益々盛んで、健康も精神も矍鑠として壯者を凌ぐものがあり、誠に慶賀至極に存じ上げます、何卒層一層自重自愛せられて、前途多端の自動車界を指導鞭撻、之れが再建の爲め、御健闘せられんことを衷心より祈願する次第であります。

(梁瀬自動車株式會社常勤監査役)

編集を了へて

山崎 晁 延

ジョン・ルイス氏がマツカーサー元帥に呈したメダルの裏に、次のことが彫刻されていた。「青年とは生命のある時期を云ふのではない、それは精神の状態を言ふのだ、たゞ年を多く経たと云ふ丈で、誰も老いて行くのではない、人はたゞ、その理想を棄てた時にのみ老いる」と。

梁瀬會長が古稀を経た方と誰が思へやう。あの若々しさは、なか／＼そんな感じを興へない。昨年も暮近く旬日に涉つた毎夜、番町のお宅に菊池洋四郎君と共に訪れて、本書に蒐録された、此の龐大な口述速記を得た時のことを振り返へつて見ると、當夜每一時間半を豫定して置いたのに、二時間も二時間半にも所定の時間はオーバーして仕

舞ひ、會長の語る事どもは、恰も滾々と湧き出る泉の如くで、そのつくるところを知らぬと云ふ名調子振りであつた。それ故、時には幾度か相當腕達者を以つて任じて居た、速記の名人菊池君も今晩は此の位でピリオツドを打つて貰ふやうにしてくれと、悲鳴を擧げて私に囁く様な始末で、その會長のエネルギーな熱を帯びた迫眞力に幾夜かは押され氣味のこともあつた。

それにつけても編者として、茲に豫めお断りして置き度いことは、この口述速記は務めて會長の個性を、言葉から文字に、具現出來得るやう、編者と速記者が打合せをして、故意にした箇所が幾ヶ所があるのであつて、或は記事中、文字の配列とか、ピリオツド等に常道を逸した箇所もないではないが、斯うしたものゝ裡にも、その文字の上から會長の風格に、より深く接して頂き度い願ひ

であつた。

然し、會長は人様に讀んで頂く本であるから、不親切であつてはならない、どうか話の辻褄や語呂には、くれぐれも注意して欲しいとの再三、再四の御指示があつたので、何ヶ所は速記全文を編集の都合上それを改訂した箇所もある。

それから會長は其都度、此の本には虚偽がないから、みな有の儘の事を書いたのだからキツト誰かのために御役に立つに相違ないと、これを繰返して云はれた。

想へば最初これを企畫してより約半歳、私の受けた教と、その時間の尊さは千金にもかへ難きものがある、而も獨り得た此の幸福は、必らずや今後に於ける私の精進によつて業界の何邊かに、よりよく活用され得ることを今日の深き感激の裡に茲にハツキリ銘記して置きたいと思ふ。

それから愈々、本年に入り組版も出来、その初校や再校を持参して御指示を仰ぐ可く、その都度會社に足繁く訪れるやうになり勢ひ會長に御逢ひする機會も多くなつた最近は、克く定められた其一週間のスケジュールの中にも、その大切な時間を割愛されて、心よく引見され、都度慎重な御注意を承り、尙且つ「御苦勞様」と丁寧なる御挨拶を頂く私はたゞ恐縮する許りで、泌々と會長の人となり、今更乍らに偲ばれるのである、慥かに會長は何處から推しても、圓熟なさつた御方でいられると私は思ふ。

「日本自動車史と梁瀬長太郎」本書のこれまで記録し來たことを茲に翻つて見れば、日本の自動車業界五十年の過去と、たゞ會長が、ひたむきに自動車を愛し、自動車と共に生活をされて、その

踏み越えて來た數へ切れない程の受難の足跡が窺はれるのである。従つて私の業界との脈絡も既に烏鬼匆々廿五年を経て居る、想へば徒勞いたづらに早くも經ちし過越し方である。然るに會長は今だに、自動車と云ふ無心の器物に親炙してこれに全生涯を賭け、今日も尙健全であることである。

吾が國は戦後、日尙淺く内外の狀況は沈澗を極めている、此時斯うした記録の刊行されると云ふことは、今後將來の吾が國自動車業界を擔ひ得るに足る豊かな人間を作りあげるために、必らず夫れは寄與され得ることを私は堅く信じて疑はないものである。

即ち本書に斯く蒐録されたる如く、この記録を辿れば、慥かに梁瀬會長は時と所と人と三者、誠に見事なる好條件に恵まれた方である、しかもそ

の根幹をなすものは會長の健康である。健全なる精神は健全な身體に宿る、また宜なる哉ではある然し、識者は漫然と會長を幸福の人と云ふ、されど此の幸福とは結局、自身の手で闘ひとつたものを云ふのではあるまいか、習俗に媚びず世間に阿らず、主義を頑張り、その所信に生きて來た、そして物の見透しが卓拔であつた會長の精神は、實にトルストイの「信仰なき處に人生なしと」云ふ言葉につきるのではあるまいか。

然らば斯く程までに自動車を愛し、自動車を生かし、いや多くの人をして自動車で活かした會長は、蓋し、また此の本書を以つて自動車人に汎くリバイバルの息吹きをなす、業界唯一無二のリバイバリストである。

今や、將來ある自動車こそは、喋々するまでもなく吾が國、基礎産業の動脈として國民經濟の安

定確保に、その原動力となつてゐる。以つて日本再建と云ふ重要な役割に於て、自動車に課せられた、その擔ふ可き使命は、またとなく大きなものである。車輛、燃料、タイヤ等あらゆる耐乏と累積する悪條件を克服するに或は創意工夫なども必要とされ、自動車の今後の在り方とその自動車人の使命達成に進み行く途は、また多事多難である。

終戦後の開放氣分から懐古趣味も又甦り、記録文學なども關心を、そゝる時、敢て「日本自動車史」をとの嫌ひなかりしも、會長の四十有餘年の公生活の中、所謂、梁瀬學校にて教を受けし人の數も幾千にも、のぼるであらうことを想ひ、また其の中から少からざる人々が其の一生を自動車に捧げて、過去に現在に從事するを、見、聞きするにつけ、會長の多年其の周圍に及ぼせし、その教

育の如何に大きかつたかを充分に識ることが出来た以上、私も其の私淑者の一人として、茲に本書刊行に誠心誠意を傾注して、これを後世に残すべく努力をしたのである。

故に本書に收むるところの諸篇は、いづれもかゝる意味に於て極めて貴重なる文献であり、會長に依つて生きた日本自動車史を知るに缺く可からざる内容を備えているのである。然らば會長を知る者はこれによつて、その畏敬を新たにすべく、又未知なる人々には會長への接近のすぐれた手引として役立つであらう。即ち畢竟するにこれは在來日本の有りの儘の自動車史を究めると云ふことである。

梁瀬自動車株式會社も創業三十五年の榮ある記念日を迎へんとしている。かゝる時に際し茲三十

有餘年の歲月を隔て、會長に對する尊敬と思慕の情は愈々新たなるものあるを覺えざるを得ないのである。もとより梁瀨會長の如き大人物は今日既に我々自動車人にとりて蓋し共有財産である。尤も爾今幾久しく或は側近に親炙し、親近の關係にありしものゝみによつて私有さるべきは當然でもあらうが、それ丈に斯かる多くの人々の會長に對する渴仰は、この共有財産の内容を、恐らく本書によつて一層豊富にすることと思ふ。

それから本書刊行が企畫より遅れて遂に半歳を闊して仕舞つた事は御寛恕を乞ふ次第である。

本書の表紙と見返しは極めてクラシカルに装幀してあるが、此の構想は新鮮な社長より指示を受けたものであるを御披露して置く。

又本書刊行のために又其の編集に、當然此の任にあるべかりし二人の先輩は今やなく、吉崎良造氏、山村豊村氏の在りし日のことなどを想ひつゝ、不肖、私が、その責を果させて頂けることを、こよなき機会とも思ひ、これら先輩二氏の靈に對して心よりその報告の出來得ることを満足と思ふ。

末筆に本書刊行に際し最初の企畫より最終の段階まで、一方ならぬ御指示と御援助を得た梁瀨自動車株式會社々長梁瀨次郎氏並びに同社最寄り各重役諸賢と、本書の編集に關して、その取材に御高配を得た梁瀨學校出身のO・Bメンバー各位に深甚なる謝意を表するものである、又會長の口述速記をせられし友人菊池洋四郎君、挿畫を擔當されし五十嵐平達君に、その勞を謝するものである

二十五年春

下丸子にて

人名索引

(ABC順)

人名に就ては、主として本書に出て来る、當時の代表的職名に據りましたが、中には現職もありません。尙、著名な人の説明は省きました、それから會社の名稱と餘り關係のないものは省略してあります。

A

参照頁

有栖川宮威仁殿下

二三

アンドロリー 殿下歸朝時隨行運轉手

二三

安樂兼道 警視總監

二四

明石元次郎 男爵陸軍大將

六〇七〇

相羽有 日米スター自動車社長

一〇九二四七

甘粕憲兵 大尉

一三〇〇

鮎川義介 日産自動車社長

一八二八四一九六

秋口久八 秋口自動車社長

一九二

B

ボッシュ アンドロニュース商會技師

二三

ブラオン 日本G・M社サブライ部長

一六八

バンボーリス G・M社東洋代表

一七五

E

エペリー・ハイム

オリエント號 蒸氣自動車の輸入者

一

遠藤新

ライト式建築の權威者 工學博士

一五九

F

福澤桃介 自動車運送會社々長

二四

フレージャー 外國商館主

五三 一六六

藤原俊雄 三和自動車社長

五三

福井菊三郎 三井物産常務

一八九

福井孝一 高速機關常務取締役

一八九

フエアリン將軍 元憲兵司令官

二八五

G

後藤新平 内務大臣

四三 二九

H

橋本増次郎 一五三七

橋戸義雄 梁瀨自動車元工務部長 六八二〇三三

原安三郎 梁瀨自動車元、監査役 七九二〇〇

原稜威雄 梁瀨自動車芝浦工場第一代工務部長 三三三

花崎謙 元東京道路局技師 七〇

早川吉治 前梁瀨自動車取締役芝浦工場第五代工務部長 七三二六
三三三三

配川政雄 昭和自動車社長 一四九

林邊賢一郎 大多喜天然ガス社長 三三四

平出圓一 梁瀨ガレージ支配人 二四九

星醫學博士 警視廳衛生課防疫官 一〇二

保坂萬一郎 梁瀨商事礦油部勤務 九

細川力藏 雅叙園主 七三

堀内良平 東京市街自動車常務取締役 一〇六

堀久 梁瀨自動車技師長 一〇〇一七九

I 石澤愛三 日本自動車社長 一五五三二五二

石原技師 警視廳 三九

飯沼久三 梁瀨自動車宣傳係主任 一七四

泉藤吉 現、泉自動車工業社長 六三二〇〇一〇三

井上馨 公爵 一三四

井出鐵藏 陸自校長陸軍中將 一七三

K 數見周穂 自動車興信所長 一〇八

久保田清 現、貝島炭坑秘書 七〇

倉持陸助 運轉手 六

小林房次郎 初代運轉手 一四

小林喜三郎 小學校々長 二〇二〇九

小林久平 早稻田大學教授 二〇七

小島財治 ファイアット會社販賣員 七三

鴻濃晋 元梁瀨自動車社員 二六

M 黑澤茂雄 元黑澤商會主 八五

松井民次郎 モーター商會主 二二

松方五郎 東京瓦斯電社長 三七一八四一九四

松本慶弘 梁瀨取締役大阪支店長 二六

丸茂藤平 愛知縣警察部長 五

丸山代重郎	梁瀨芝浦工場工務部長	二六三三
三輪公	梁瀨自動車監査役	二六七五
三井高保	オートファン	一三
宮本富三郎	宮本ラッパ主人	一〇五
メ	日本G・M社専務	一六八
ミスター・ボーイ	デニボン會社技師	一〇二
陸奥慶吉	伯爵桑港領事	一一
村谷九一	元梁瀨福岡支店長	七三
ムーニール	G・M輸出會社々長	一八四
茂木惣兵衛	横濱茂木商店社長	六六
三笠宮殿下		二八八
N		
中島春之	初代運轉手	一一四
中丸一平	三井物産監査役	三三三二
中島亮	全整連合會長	一九三
中島玉置	梁瀨、取締役總務部長	二六七
中谷保	安全自動車社長	一九〇二七八二八〇
中山信市	梁瀨、福岡支店顧問	二二三
中村種太郎	元梁瀨、大阪支店長	二二三
中村長五郎	伊東の有力者	七

長森藤太郎	帝國運輸社長	一四
長澤元七	長澤商會主	九
南條金雄	三井物産當務	一七
西村教官	陸軍幼年學校	一一
丹羽義次	愛國自動車社長	一〇
沼賀茂助	土地の素封家	二〇
野坂光雄	梁瀨取締役芝浦工場長	二五
O		
大倉喜七郎	男爵	一三一六五三一九
大隈重信	前内閣總理大臣	四八
大杉榮	社會主義者	一〇
太田祐雄	太田自動車製作所主	一五一九〇
大澤喜市	梁瀨自動車常勤監査役	一〇三三三六七
大久保正二	日野ヂーゼル社長	一五
大原當一郎	梁瀨、取締役總理部長	三三二六七
小田萬	故京都帝大教授	三三
小田技師	後日曹當務	一〇一
小野寺季六	内務省技師	二九
尾花信	梁瀨、元、當務取締役	三三

鳥羽 惣治 三井物産機械部長 一七二
 富安 良三 梁瀨、自動車副部長 八九一〇〇
 豊田利三郎 初代トヨタ自動車社長 一五〇一七三
 豊田喜一郎 現トヨタ自動車社長 一五〇
 高松宮、同妃兩殿下 二八八

U

内山駒之助 初代業界技術者 一一二二
 内海徳太郎 梁瀨自動車車輛主任 八九
 梅村 四郎 豊國自動車社長 六九一〇〇一五〇
 一五〇二七八
 上野造酒三 梁瀨取締役福岡支店長 二六二六七
 漆山 一 梁瀨自動車専務取締役 二二三三二六七
 二八五

W

和田 豊治 富士紡社長 四八

Y

山本条太郎 梁瀨自動車相談役 三三三三三八七九
 九三九七 一三六
 一三三三三四二〇七
 山本 惣治 日産自動車社長 一五三
 山本 善敏 自動車塗裝組合長 一〇一

山口 勝藏 自動車輸入者 一五五四七
 山田 忍三 山田自動車社長 一六七
 山縣 政夫 梁瀨自動車海外留學生 三三二〇〇
 山羽 虎夫 初代國産自動車技術者 一一三
 山川 良三 陸軍少將 一五五
 野牛 道弘 三昭自動車専務取締役 一七三
 柳田 諒三 エンバイヤ自動車社長 五三二〇四一九
 安川 雄之助 三井物産常務理事 九二一三三
 梁瀨 次郎 梁瀨自動車現社長 二一五三三三三三
 二六六二七二二八二
 梁瀨 喜作 梁瀨自動車取締役 七〇一〇三二二九
 二二七二六七
 吉崎 良造 梁瀨自動車取締役 九六二〇〇二六
 一五〇二二三
 吉田 眞太郎 東京自動車製作所主 一一二二三
 米山 利之助 初代業界技術者 一五
 芳川 鎌子 芳川鎌正伯令嬢 六六

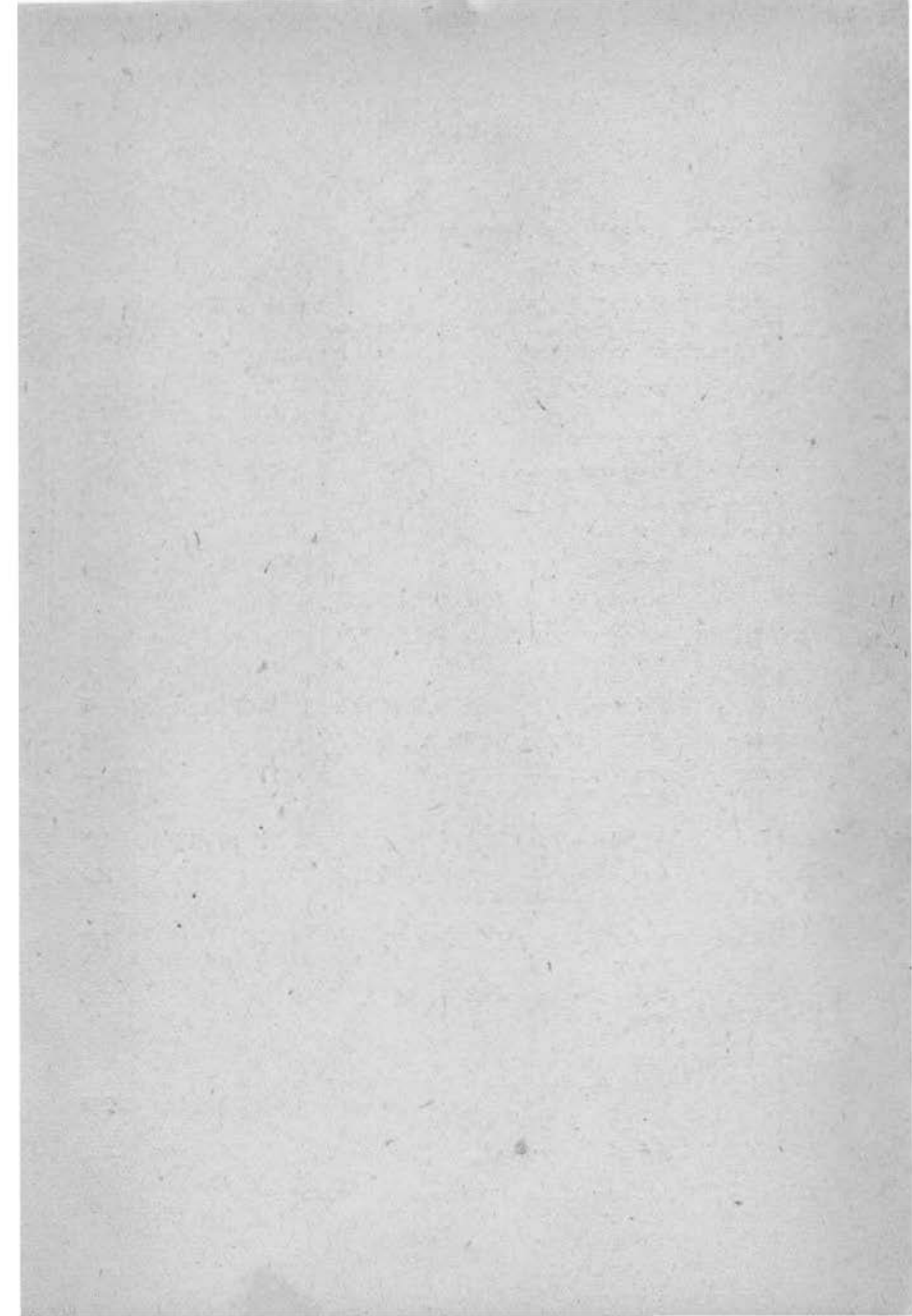
G. M.	ジー・エム (General Motor's Corporation)	ゼネラルモーターズ会社	114、121-2、 147-9、150、161-2、164-170 172-3、214-5、250-1、266、 272-3、275-6、283-4、6
Goodwill	グッドウキル	暖廉料	166
Grant	グラント	許 興	276
Home Delivery Order	ホーム デリバリー オーダー		286
L/C (Letter of Credit)	エル・シー	信 用 状	253
Majority	マジヨリテイ	大 多 數	164
Mercedes Benz	メルセデス ベンツ	獨逸の自動車名	177
No-No.	ノー ナンバー	番號札なし	133
Non-Occupation People	ノンオキユベーション ヨン ビープル	日本駐在の非占領軍	250
O.A.S.	オー・エー・エス (Overseas Automotive Service)	(2)	193、238、251-2 283、286、288
One% Half%	ワン パーセント ハーフ パーセント		一割、五分 133
O. S. S.	オー・エス・エス (Overseas Supply Store)	(3)	252
Popular	ポピュラー	評判のよい	177 .8
P. X.	ビー・エックス (Post Exchange)-Canteen	酒 保	252、275
Selfish	セルフイシユ	我 儘 な	165
Set-up	セツト アップ	完 成 車	164
T. S. D.	テー・エス・デー (Truist and Service's Division)	在留外人サービス部	250、252-3

(説明)

- (1) 主體となつてよそに分ける (配給所)
- (2) 自動車を輸入してバイヤー、一般シヴイリアン、進駐軍に自動車を賣る業務
- (3) 進駐軍以外の在留外國人に物品を賣る店

英 文 索 引

英 文	發 音	邦 譯	說 明	引 照 頁
Accessory	アクセツサリー	用 品	附 屬 品	104
Acceptance	アクセプタンス		月 賦 販 賣	200
A. I. U.	エー・アイ・ユー	米 國 國 際 保 險 會 社		表 No. 7
(American International Underwriters Corporation)				
Assembly	アツセンブリー	組 立		163
Calamity	カラミテイ	災 害		118
Car Wash	カー ウオツシユ		車 水 洗 梁	237
Cheap Price Car	チープ プライス カー	値 安 車		200
Chief	チーフ	士 官	局 長	271
Control	コントロール	管 理 する		164
Commercialism	コンマーシャリ ズム	商 業 主 義		293
Dealer	ディーラー	特 約 販 賣 店	日 本 商 社	287—8
Disappear	デアスアッピア	見 え な く な る		118
Distributor	デストリビュー ター	分 配 者	(1)	163—4
Equitania	エクキダニア		英 國 船 名	115
E. S. S.	キー・エス・エス	經 濟 科 學 局		250
(Economic & Scientific Section)				
Fifty, Fifty	ヒフテイー ヒフ テイー	五 分、五 分		168
Foreign Nationals	フオーレン ナシヨ ナル	第 三 國 人		283
General Motor's Acceptance Company	ゼネラル モーターズ アクセプタンス コンパニイ		ゼネラルモーターズ月賦販賣會社	199
G.H.Q S.C.A.P	ジーエイチキエー スキヤツブ	連 合 國 總 司 令 部	238、250、252、 244、279、284—5	
(General Headquarters of the Supreme Commander for the Allied-Powers)				



に於ける實働車(東日本)の集計表 (昭和24年12月末日現在)

實働自動車一般綜合集計

	旅客用	商業用			合計	
	乗用車	バス	トラック	小計		
A	22,899	2,203	12,057	1,4260	37,159	×
B	9,428	5,374	87,734	93,108	102,536	×
C	32,327	7,577	99,791	107,368	139,695	×
小計	64,654	15,154	199,582		279,390	

備考 × 推定概数

M・G社製各車綜合集計

A	6,432	313	2,717	3,030	9,462	△
B	115	1	18	19	134	△
C	6,547	314	2,735	3,049	9,596	△
小計	13,094	628	5,670		19,192	

備考 △ 登録概数

登録に據るG・M社製各車種別集計

乗用旅客車		トラック及バス		合計
シボレー	3,616	シボレー	1,497	
ボンテアク	636	G・M・C	1,481	
オールズモビル	677	ブリッツ	0	
ビュイツク	1,413	ベツドフオード	13	
カデラツク	93			
ボックスホール	22			
オベル	99			
合	6,559		2,991	9,550

◎ O・A・S 實務受託者名簿

(昭和廿四年十二月一日現在)

〔第1表〕

部門別	型種	國籍	販賣區域	實務受託者名	契約年月日	住所及電話番號
フード		米	東京	ニユーエンバイモーター株式會社 取締役社長 柴田 勝助	二三、五、一	千代田區麴町三年町一番地 芝(43) 四一五五―九
〃		〃	阪神	福田自動車株式會社 取締役會長 福田治三郎	二三、二、一	大阪市福島區福島南一ノ七一 福島三九六二
〃		〃	横濱	ニユージャパンモーター株式會社 取締役社長 須田 忠次	二四、六、一〇	横濱市南區井土ヶ谷中町一五八 長者町(3) 一五七一―三
クラリス		〃	全國	安全自動車株式會社 取締役會長 中谷 保	二三、二、二五	港區赤坂溜池町三一番地 赤坂(48) 一一三六一―九
ゼネラルモーター		〃	東京 神奈川	梁瀬自動車株式會社 代表取締役會長 梁瀬長太郎	二三、三、三	港區芝浦一丁目三五番地 三田(45) 〇六六九 〇九三七 五三四―四
〃		〃	阪神	豐國自動車株式會社 專務取締役 宇澤藤三郎	二四、六、二五	大阪市福島區上福島市中二ノ六四 福島一―五一 二五〇一七
ゼネラルモーター		〃	東京	大洋自動車株式會社 取締役社長 井上 正明	二四、八、三	中央區日本橋室町四ノ一 日本橋(24) 五二〇八一―九
オースチ	小型	英	全國	日新自動車株式會社 取締役會長 長瀬英之助	二四、一、二三	千代田區永田町二一八六 銀座(57) 六六二―四
ウイリス		米	〃	東急自動車株式會社 取締役社長 佐藤 經雄	二四、三、二三	港區赤坂溜池町三〇 赤坂(48) 二二二二二
ファイアツ	小型	伊	〃	日本自動車株式會社 取締役社長 小川 菊造	二四、五、二四	港區赤坂溜池町四 赤坂(48) 三二〇〇四
ルノ	〃	佛	〃	日協産業株式會社 取締役社長 早川 種三	二四、五、二四	港區赤坂溜池町七 赤坂(48) 三三四二六
クロスレ	〃	米	〃	日本アメリカン自動車株式會社 代表取締役 津下統一郎	二四、八、三	港區芝櫻川町二一 芝(43) 〇八二六
ステュー		〃	〃	日新自動車株式會社 取締役會長 長瀬英之助	二四、七、二	千代田區永田町二一八六 銀座(57) 六六二―四
ウイリス		〃	〃	大阪自動車整備交通株式會社		大阪市大正區大正通八ノ四八 泉尾 〇二四六
ルーツ	小型	英	全國	伊東忠商事自動車部 野澤 喜八郎		千代田區丸ノ内二丁目一〇 丸ノ内(23) 一三二一―四
ナディー	〃	〃	〃	日本交通株式會社 取締役社長 川崎秋蔵		千代田區西神田一ノ三 九段(3) 〇五六一―五

G・M社製各種實働自動車概算表

〔第4表〕

	乗 用 車				バ ス				ト ラ ッ ク				合 計
	A	B	C	小 計	A	B	C	小 計	A	B	C	小 計	
シボレー乗用車	1,954	213	1,452	3,619	—	—	—	—	—	—	—	—	3,619
ボンテアク	423	36	174	633	—	—	—	—	—	—	3	3	636
オールズモビル	444	44	163	651	—	—	—	—	—	—	26	26	977
ビュイツク	748	156	485	1,392	—	—	—	—	—	—	21	21	1,413
カデラック	33	13	45	91	—	—	—	—	—	—	2	2	93
ボツクスホール	0	16	5	21	—	—	—	—	—	—	1	1	22
オベル	0	1	93	94	—	—	—	—	—	—	5	5	99
シボレー・トラック	0	0	0	0	—	—	206	206	6	7	1,278	1,291	1,497
G・M・C	0	0	0	0	—	—	107	107	—	2	1,372	1,374	1,481
ブリッツ	0	0	0	0	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ベッドフォード	0	0	0	0	—	1	—	1	—	10	2	12	13
ラ、サー	17	1	28	46	—	—	—	—	—	—	—	—	46
總 合 計	3,619	483	2,445	9,547	—	1	313	314	6	19	2,710	2,735	9,596

○本表は東日本の地域のみを指す。

(昭和二十四年十二月末日現在)

〔第3表〕

自動車登録（東日本）車種別概算表

	乗 用 車 計				バ ス				ト ラ ッ ク				總 合 計
	A	B	C	計	A	B	C	計	A	B	C	計	
北海道	282	0	2,156	2,438	—	—	701	701	—	—	9,894	9,894	13,033
青森	411	1	303	715	—	—	180	180	—	—	2,250	2,250	3,145
岩手	0	1	173	174	—	—	129	129	—	—	2,375	2,375	2,678
秋田	0	0	258	258	—	—	187	187	—	—	6,378	6,378	6,823
宮城	352	7	503	862	—	—	188	188	6	—	2,932	2,938	3,988
山形	18	2	295	315	—	—	200	200	—	—	2,289	2,289	2,804
福島	0	3	454	457	—	—	247	247	—	—	3,890	3,890	4,594
茨城	0	0	521	521	—	—	200	200	—	—	3,886	3,886	4,607
栃木	0	0	522	522	—	—	340	340	—	—	2,920	2,920	3,782
群馬	0	4	639	643	—	—	278	278	—	—	3,743	3,743	4,664
千葉	0	7	522	529	—	—	328	328	—	—	4,533	4,553	5,390
埼玉	180	12	657	849	—	—	298	298	—	—	5,474	5,474	6,621
東京	6,883	1,781	7,708	16,372	—	—	2,131	2,131	—	99	25,651	25,750	44,253
神奈川	4,065	216	1,141	5,422	—	1	635	636	—	9	9,270	9,279	15,337
新潟	0	0	442	442	—	—	441	441	—	—	2,860	2,860	3,743
長野	0	1	560	561	—	—	396	396	—	—	3,697	3,697	4,654
山梨	0	2	222	224	—	—	130	130	—	—	1,535	1,535	1,889
静岡	14	1	1,008	1,023	—	—	567	567	—	—	6,100	6,100	7,690
計	12,205	2,038	18,084	32,327	—	1	7,567	7,557	6	108	66,677	99,791	139,695

▽ 備考 表中 Aは進駐軍（Occupation Personels）関係のもの

（昭和24年12月末日現在）

Bは占領軍以外の第三國人（Foreign notionals）のもの

Cは我が國既業者の使用のもの

自動車輸送道路（東日本）舗装別延哩概算表

〔第6表〕

都道縣別	舗 装 道 路			無舗装道路	合 計
	コンクリート	アスファルト	マカダム		
北海道	12,643哩	91,862哩	10,765,411哩	1,196,154哩	12,006,071
青森	65,387	47,276	2,228,363	247,595	2,588,621
岩手	40,996	5,329	3,490,452	387,827	3,924,598
宮城	48,429	27,858	3,199,837	355,531	3,631,655
秋田	10,755	14,804	2,446,805	271,866	2,744,230
山形	19,093	18,459	1,980,004	220,002	2,237,558
福島	26,458	6,901	3,035,636	337,293	3,406,288
以上小計	223,761	212,484	27,146,580	3,061,268	30,599,012
茨城	7,310	54,653	2,336,841	259,643	2,653,447
栃木	13,762	62,731	3,267,790	363,086	3,707,369
群馬	10,521	101,097	1,150,480	172,277	1,834,375
埼玉	25,203	195,928	3,721,862	313,543	4,356,536
千葉	5,894	150,786	3,959,543	439,942	4,556,165
東京都	198,255	2,287,452	3,927,964	436,441	6,849,850
神奈川県	84,905	422,452	4,609,306	512,140	5,628,803
以上小計	345,850	3,274,837	23,373,786	2,597,072	29,591,545
新潟	5,340	39,742	1,173,050	130,337	1,348,471
山梨	1,789	23,012	619,723	68,856	713,380
長野	19,818	20,140	3,919,373	435,485	4,394,816
静岡	16,467	141,683	3,563,194	395,916	4,117,260
以上小計	43,414	224,579	9,257,340	1,030,594	10,573,927
總 合 計	613,057	3,711,900	59,795,634	6,643,934	70,764,493

〔昭和24年12月現在〕

[第5表]

(備考) 本表は主として商工省工務局、内閣資源局調査を基準にし、表中には運輸省自動車局の調査に據るものもあり。尚、表中の終戦前の数字はG・H・Q及商工省に提出し現在のところ確定数とされているものである。

生産実績×印は軽自動車を含む。登録臺數には一切を含む。但し、モータースクーターを除く外車組立は日本フオード社、日本G・M・社、共立(クライスラー・ダツヂ系)を一括包含す。

完成車輸入臺數は主として高級車のみを指す。電気車の生産は小型車とバスを含む。

特殊車は索引被索引特殊用途車等を含む。小型車の保有臺數は二輪、三輪、各車を含む。

本表中、大型車とスクーターは除く。

我國に於ける自動車生産・登録・保有・台數年次指表

西歴	邦歴	年度生産と登録臺數				登録臺數	外車關係		保有臺數				小型車
		普通車生産臺數	小型車生産臺數	電気車生産臺數	生産実績		組立臺數	完成車輸入臺數	乗用車	貨物車	乗合車	特殊車	
1926	昭和元	246						2,381	26,856	10,619	40,070	1,218	15,089
27	" 2	302			302	46,293		3,895	34,074	14,176	51,762	1,425	14,344
28	" 3	433			433	60,833		7,883	42,015	17,871	66,379	1,825	15,339
29	" 4	437			437	71,555	29,338	5,018	54,115	25,218	80,370	2,128	16,701
30	" 5	458	1,650		458	90,116	19,678	2,591	58,690	29,744	88,708	1,682	17,896
31	" 6	434	1,754		434	98,966	20,109	1,887	63,917	32,926	97,256	2,232	20,985
32	" 7	696	3,057		× 984	103,915	14,087	997	66,906	34,531	100,221	2,478	24,915
33	" 8	4,055	4,439		× 2,170	106,803	15,082	491	68,219	36,115	104,932	2,454	29,880
34	" 9	1,077	6,648		× 4,067	121,192	33,458	896	76,124	42,337	112,540	2,731	43,041
35	" 10	1,181	15,938		× 6,525	171,564	30,787	943	82,775	48,135	120,926	5,065	55,236
36	" 11	5,851	20,618	25	× 15,782	190,825	30,997	1,117	89,008	56,083	117,088	4,978	68,988
37	" 12	9,462	26,315	31	× 59,557	209,530	31,000	1,100	75,740	52,992	112,509	5,069	85,011
38	" 13	15,755	20,805	68	× 37,066	216,738	20,000	500	33,110	55,063	112,187		94,109
39	" 14	30,089	15,048	155	× 43,958	213,331			31,643	54,461	109,285		97,846
40	" 15	43,706	10,929	97	× 57,880	213,117			29,497	60,517	112,408		94,388
41	" 16	43,878	7,481	184	× 53,959	195,301	↑	↑	27,773	54,263	104,002		85,005
42	" 17	35,491	5,999	207	× 43,419	185,881			18,468	56,319	96,531		82,189
43	" 18	24,207	3,712	175	× 29,612	178,155	不明	不明	15,879	56,864	94,245		76,861
44	" 19	21,453	1,650	164	× 24,353	162,137			13,632	55,506	85,898		69,010
45	" 20	5,487	687	122	× 5,950	142,037			17,879	43,235	62,233		53,570
46	" 21	14,154	4,843	239	× 20,179	161,322			20,375	78,035	109,586		54,161
47	" 22	9,934	11,232	547	× 25,085	179,305	↓	↓	20,605	89,142	110,220		53,321
48	" 23	18,493	26,510	1,147	× 54,516	229,892			21,405	102,110	123,041	21,841	84,873
49	" 24	◎ 16,190				239,871			22,661	107,748	142,230	△ 21,098	△ 102,943
50	" 25												

◎は昭和24年2月現在まで

ゴチツク體數字は運輸省自動車局調査依る。

△同年6月現在まで

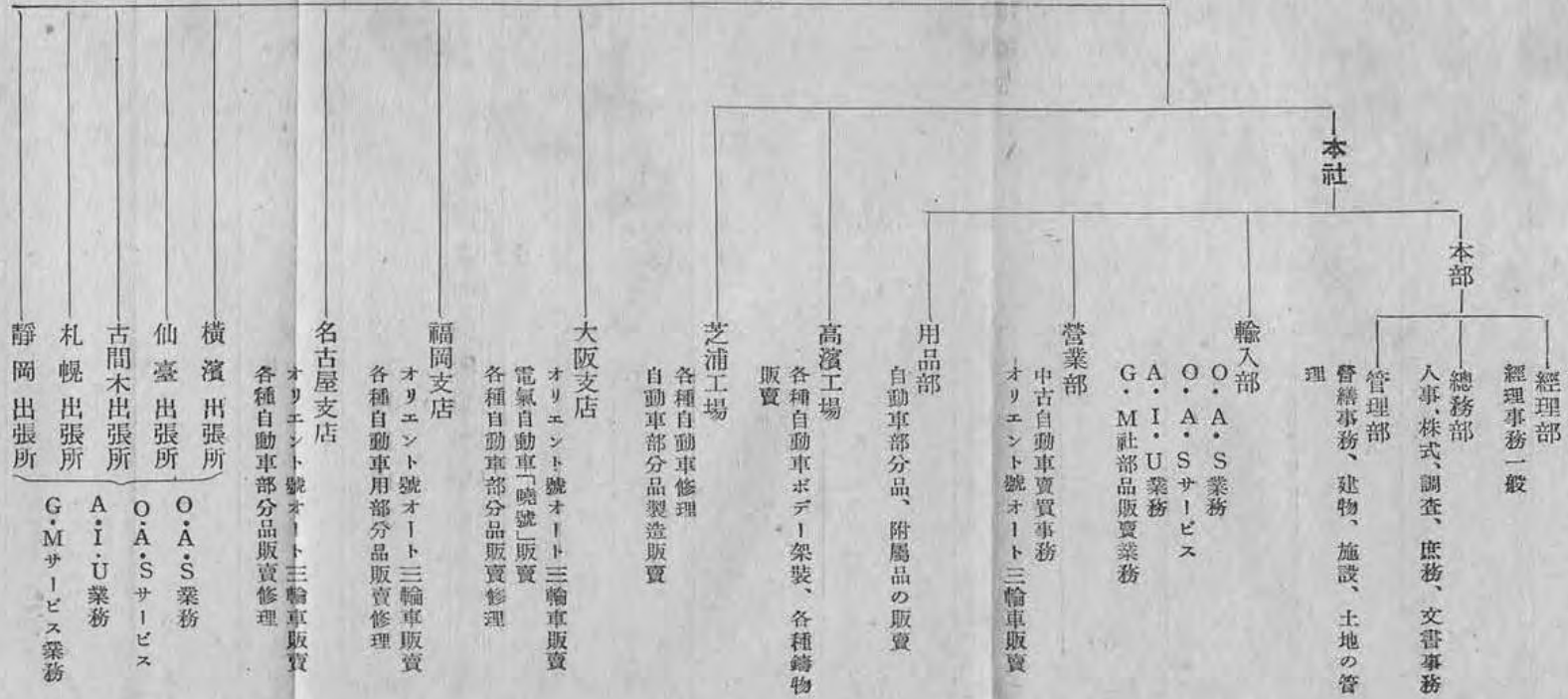
[第7表]

梁瀨自動車株式會社

機構及職制表

代表取締役會々長

代表取締役社長↓専務取締役↓



(昭和廿五年三月現在)

[第 8 表]

梁瀬自動車株式会社 輸入自動車販賣実績表

邦歴	西歴	ビュツク	ウーズレー	クライス デール	カデラツク	シボレー 乗用車	G・M・C トラツク	スチユード ペーカー	アースキン	ファイアツト 乗 貨	レ 乗 貨	オ 貨	ラサール	ボツクス ホール	オールズ モビル	ボンテアク	シボレー トラツク		
大正4	1915	120	10																
5	16	350	15																
6	17	400	20																
7	18	500	30	100															
8	19	550	30	200															
9	20	600	50	300	25	500													
10	21	600			50	500	100												△オークラ ンド約20臺
11	22	500			40	500	100												
12	23	400			30	300	200												
13	24	600			60	500	150												
14	25	500			50	500	100												
昭和元 15	26	500			45	400	50												
昭和2	27							57	32										附記
3	28							291	128	222	66								△印オークラン
4	29							176	41	42									Fはボンテアク
5	30				11			87	30	135		6							の前名稱である
6	31	24			8			156		11			8						×印九州ヤナ
7	32	327			50			2					3						セ・モーター
8	33	278			50							5	11			2			スに於てシボレ
9	34	654			48								14						ー・トラツク300
10	35	260			68								12						臺賣捌きし數字
11	36	488			89								17						を含む
12	37	801											35						×561
13	38	530											2						
14	39	6																	
15	40	29				35													
合計		9017	155	600	624	3235	700	769	231	410	66	11	2341	102	8	4	170	561	(總計) 19.004

日本自動車史と梁瀬長太郎



禁無斷轉載

昭和二十五年五月二十日印刷
昭和二十五年五月二十五日發行

(限定版)

發行者 大澤喜市

編集者 山崎晁延

印刷者 山村貞雄

印刷所 山村印刷所

東京都港區麻布十代町一番地
電話三田(45)〇二〇〇番

發行所「日本自動車史と梁瀬長太郎」刊行會

東京都港區芝浦一丁目三十五番地

梁瀬自動車株式會社內

電話三田(45)一六四・七六九・九三七番
五三三四三―四番

